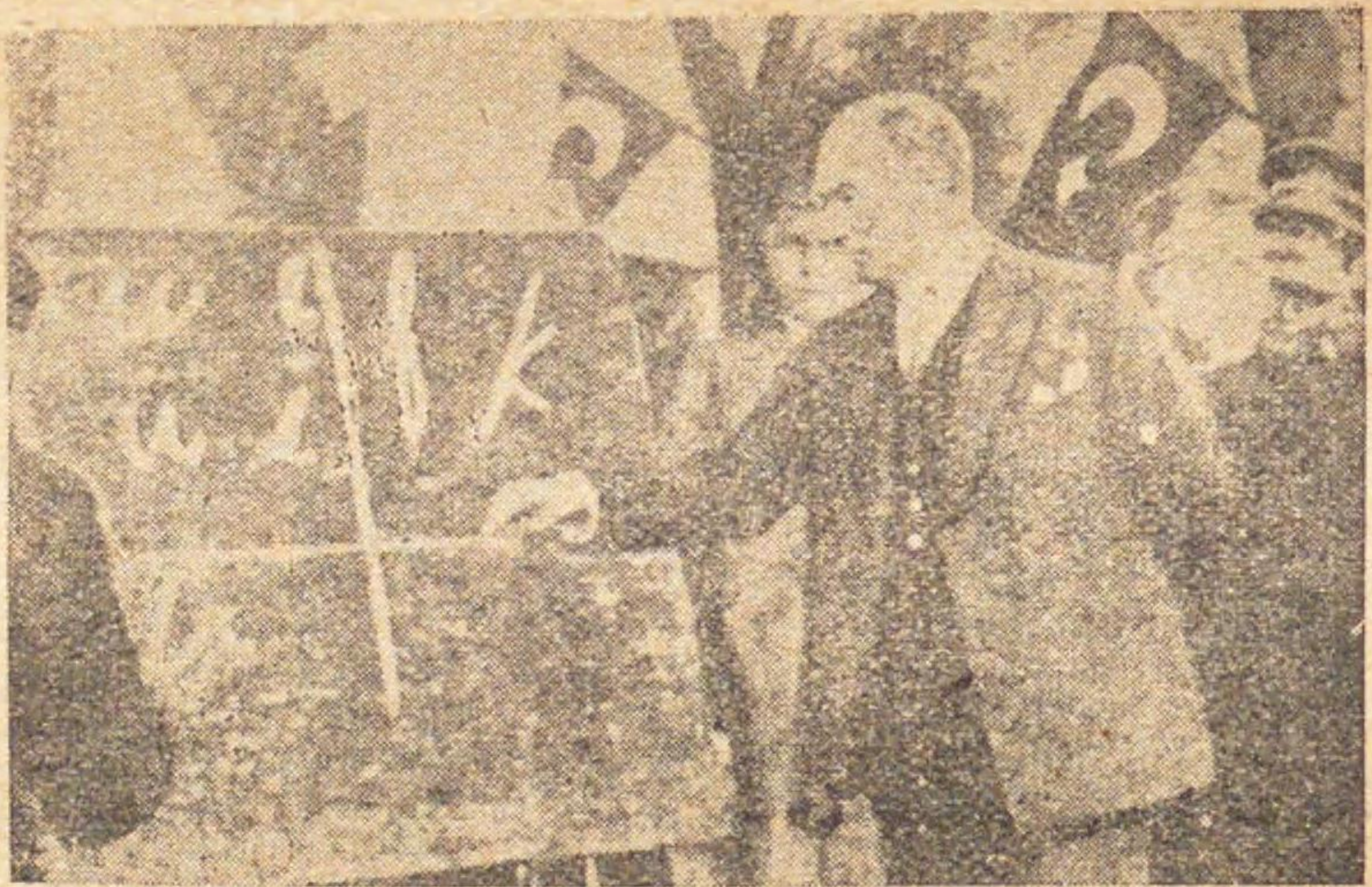


さて紋上の諸改革よりも一層重大なる文化的意義を有するものは、實にアラビア文字との訣別である。ムスタファがトルコ帽着用を禁止した時、或者は冷笑して言つた——「頭の外側を變へても肝心の中味を何うするか」と。まことにムスタファ自身が國民黨代表者會議に於て「見よ、諸君の前には其の八割が文盲なる人民の群が居るでないか。斯かる恥づべきことが何處にあるだらう」と嘆じたる如く、トルコ國民の大多數は、讀むことも書くことも出来なかつた。而して其の最も重大な原因の一は、アラビア文字の使用であつた。彼は「數世紀以來トルコ人の頭腦を束縛せる不可解なる記號から解放されねばならぬ」と覺悟し、アラビア文字を廢してローマ字を採用するに決した。一九二七年秋、政府はコンスタンチノープル大學文學部長を委員長とするローマ字調査委員會を設け、國字變更の調査を急がしめた。委員會は翌一九二八年八月十五日に報告書を提出したが、政府は翌々日に夙くもローマ字採用を決議し、直ちに軍隊、官吏、銀行會社員、商店員、車掌等にローマ字を講習せしめ、且國民全般に其の普及を圖るため「ローマ字入門」を出版した。此の小冊は一週以内に六十六萬部を賣り盡したと言はれる。ムスタファは自ら街頭に立つてローマ字の學習を民衆に勧めた。彼は自ら白墨を執りて黑板にローマ字を書いた。道行く人を捉へてローマ字を習つたかと訊ねた。



新トルコ文字を宣傳するアフタスマ

かくの如き準備の後、一九二八年十一月一日、第三次トルコ國民議會開院當日、ムスタファは内治外交に關する演説中、國民進歩の礎たるべき先決問題として、從來の如き難解のアラビア文字を棄て、小なる努力と短期の學習によつて容易に讀み且書き得るローマ字を採用すべきことを述べ、かくして「トルコ語に新しき生命を與へることにより、第三次國民議會は、單りトルコ歴史に於てのみならず、實に人類の歴史に於て特筆せらるべきものとなる」と説き、また「文盲なる吾が同胞を救ふために一教師となることの精神的満足が、吾が全身に横溢する」と叫んだ。彼の國字改革案は滿場一致を以て可決せられ、十一月三日、十一條より成る法律の發布を見た。かくてトルコは、翌一九二九年一月一日より、新トルコ文字としてローマ字を採用することとなつた。

之に伴ひて十一月十一日、その施行細則が閣令として發

布された。即ち全國に國民學校を設けて國字を學習せしめる。大統領自ら總裁となり、閣僚が幹事となりて、此の講習の徹底を期し、四十歳以下十六歳以上の男女を、悉く入學せしめ、毎日一時間以上、二箇月乃至三箇月授業する。教場には學校・寺院・官廳・俱樂部・サロン・カフェ等を使用する。原則として小學校教師が教員となるが、必要に応じて中等教員以上の者をも之に充てる。警官・憲兵・公吏・組合・團體・企業者を監督員とする。二十人以上の人員を使用する工場又は團體は、自ら使用人に新國字を習得せしむる義務がある。かくの如くにしてムスタファは、トルコから文盲を驅逐するために、國家の全力を擧げて戦つた。因に新トルコ國字は、二十九字より成るトルコ式ローマ字であり、標準語としてコンスタンチノール方言を、發音式に綴るものである。

このローマ字採用は、打見たるところ西歐主義への追従の如くなるに拘らず、其實は最も健全にして且熱烈なる國民主義の發露であつた。蓋しトルコ民族のイスラム改宗は、嘗に彼等をしてアラビア文字を採用せしめたるに止まらず、必然多數のアラビア語又はアラビア的表現を國語の中に導入した。また彼等が詩文の範をペルシアに取りしため、多數のペルシア語も國語の中に入込んだ。第十九世紀末葉に於ては、トルコ文語の七割はアラビア語、二割はペルシア語、本來のトルコ語は實に僅に一割に過ぎぬと言はれた。然るに今やムスタファは、ローマ字の採用によつて形式的にア

ピラア、ペルシア的束縛を斷絶すると同時に、進んでトルコ語のうちから外國的要素を驅逐し、同意義のトルコ語を以て之に代へんと決心した。即ち國字改革の次に、國語改革を續行せんとするのである。而して此の目的のために一九三二年七月十二日、トルコ語調査會が設立せられ、ムスタファ自ら其の總裁となり、古代トルコ語の復活、外來語の淘汰、學術語のトルコ化、現代國際語の採用等によつて、國語の純化並に確立に努力しつつある。但し國語改革は、決して國字改革の如く簡單に行ひ得べき性質のものではない。そはトルコ國民の精神的發達並に充實と歩調を共にして、今後一層不斷の努力が續けられるであらう。

ムスタファの國民主義は、トルコ史研究の獎勵によつて、一層陸離たる光彩を放つた。トルコ語調査會の設置に先だつこと一年、既に一九三一年四月十五日、ムスタファはトルコ史の一切部門の研究、乃至トルコ民族關係史料の蒐集を目的とし、彼自身總裁となり、全國の史學者を網羅して、トルコ史調査會を組織して居る。而して此の調査會の監修の下に、夙くも一九三二年には、トルコを中心とせる世界史——一層適切に言へば世界史に於けるトルコ民族の位置と功業とを明かにするトルコ通史、即ち「歴史」四卷が出版された。

予はムスタファのトルコ史研究獎勵を見て、吾が明治維新以後に於ける政治家の國史に對する態

度に想到し、省みて忸怩たらざるを得ない。予は此點に關して、史學者三上參次博士をして語らしめたい——「……歴史を學べば小學校の初めから外國歴史であつて、日本歴史は教へて貰へなかつた。……大學の豫備門即ち後の高等學校に於て、明治十六年に初めて一週に一時間、新井白石の讀史餘論を教科書として國史を教へられました。これが高等學校程度の學校に於て、國史を教へられた嚆矢であります。それも獨逸語の御雇教師グロート氏が、豫備門長杉浦重剛さんに向つて、各國とも此の程度の學校では其國の歴史を授くるものであるのに、此の學校にはそれが無いのは甚だ不思議である」と注意したので、豫備門長も成程と思はれ、そこで私共のクラスから國史を置かれたのであります。豫備門長が、あの國粹家の杉浦さんであつたからこそ、早速グロート氏の忠告を容れられたのであります。若し滔々たる其の當時の人々であつたならば、其の忠告も或は容易に受け入れられなかつたであらうと思ひます」。西歐の採るべき所は大膽迅速に採り乍ら、トルコ民族本來の面目を飽く迄も發揮せしめんとする點に於て、ムスタファの識見は寧ろ維新元勳の上に在る。

新トルコを、國民全體に徹底せしむることは至難の業である。而も改革に對する國民の理解と協力なくしては、新トルコの理想は實現せらるべくもない。それ故にムスタファは、國民教育の振興に肝膽を砕いた。既に述べたる如く、彼は總ての宗教學校を閉鎖した。單りトルコと言はず、

一切の回教諸國に於て、國民の上に偉大なる精神的勢力を揮へる宗教階級が、その頑迷と保守とを以て事實上少年並に青年の教育を獨占し來れることが、世界文明國に比して回教圈の進歩を少くとも二世紀遅れさせて來た原因の一つであつた。それ故に回教諸國の目覺めたる知識階級は、夙くより宗教階級の精神的支配に對して戰を挑んで居た。そは西歐の文藝復興以前に於て、新しき學者がカトリック教會とスコラ學者に對して挑める戰と同一轍である。曾て青年トルコ黨が政權を握れる時、彼等は教育改革を以て主要政綱の一としたが、竟に之を實現するを得なかつた。今やムスタファは、屢々企てられて而も行はれざりし教育改革を、何の躊躇もなく斷行した。彼は「全トルコ人の國民的・共和的・世俗的教育」を標榜して、初等教育を義務的とし、範をヨーロッパ諸國の最良のものに採れる教授案並に教科書により、總ての小學校に於て全國の兒童に一樣の教育を施すこととした。而して小・中學教育は主としてフランスを模範とし、專門教育・技術教育はドイツ及び其他諸國を模範とした。教員養成のために多くの師範學校が建てられ、アンゴラには高等教育學校が建てられた。農業學校・工業學校・商業學校が續々と建てられた。其等の學校の教師には、多くの外國人を採用したが、ドイツ人及びオーストリア人が最も多い。大學もまた次第に近代化された。

一九三七年十一月一日、國民議會開院式の演説に於て、ムスタファは下の如く述べて居る——

「吾等の偉大なる目的は、國民を文明と繁榮との最高水準にまで引上げるに在る。そは當に其の内面的機構のみならず、實に其の外貌をも根本的に改革を遂行せる大トルコ國民の飛躍的理想である。此の理想を出來得る限り短期間に實現するためには、思想と行動とが、手を携へて前進せねばならぬ。此の分野に於ける成功は、唯だ組織的なる計畫と、効果的なる實行によつてのみ獲得される。それ故に文盲は絶滅されねばならぬ。吾等の全體的改革事業並に國家の新機構が要求する専門家養成のためには、國民が能く國家の理想體系を把握し、また之を他に説明して、次の世代の國民に浸透せしめ得べき新施設を必要とする。そは文部省に課せられたる重大任務である。トルコ青年層の胸奥に、またトルコ國民の知識の中に、いま予が叙べたる原則を潑刺と保持せしむることが、大學並に高等教育機關に課せられたる最高任務である。

「この目的のために吾等は、トルコ國を三大文化地域に區分することから出發する。西部地域に於ては、コンスタンチノープル大學に着手せられたる改革が、一層嚴密に遂行せられ、完全に近代的なる大學が吾國に生れるやうにせねばならぬ。中央地域に於ては、出來るだけ速にアンゴラ大學が設立せられねばならぬ。最後に東部地域に於ては、ブン湖岸の景勝地に、一切の種類の初等學校と、後に大學を有するに至るべき近代文化中心地を建設すべく、直ちに實行に移らねばならぬ。此

の成果多き企圖が、東部諸州の青年に與へる文化は、共和國政府の眞に恵み深き功績となるであらう。

學校教育を補ふため、または之を徹底せしめるため、ムスタファは更に「國民館」の創設を實行した。此事は、一九三一年五月十日の共和國民黨第三回大會に於て決議せられ、翌一九三二年に先づ十四の地方中心都市に開設せられた。國民館は九部より成り、第一は國語・文學・歴史部、第二は藝術部、第三は演劇部、第四は體育部、第五は社會救濟部、第六は民衆講習部、第七は圖書館及び出版部、第八は農村生活刷新部、第九は博覽會及び展覽會部である。各部の活動は、會員中より選ばれたる三名乃至五名の委員より成る委員會によつて指導せられ、部委員會代表者より成る中央委員會が、全體の活動を統率して居る。

國民館は年々其數を増し、一九三三年には五五、一九三四年には八〇、一九三五年には一〇三、一九三八年には二〇九に達し、會員の數は百萬を超えた。一九三七年度に於て、國民館主催の各種の集會に参加せる人數は、實に六百六十四萬餘であつた。トルコ國民の教養は、國民館を通じて日に高められつつある。是くの如き施設は、決してムスタファの獨創でない。吾國の青年團の如きは、設立の趣旨に於て殆ど同一轍である。それがトルコに於ては國民訓育の上に偉大なる効果を擧げ、

吾國に於ては殆ど有意義なる貢獻をして居ないのは、一に指導者の相違に因る。

さてトルコ民族が眞個の獨立を確保するためには、國民經濟の確立を必須の條件とする。それ故にムスタファは、サカリヤ戰勝によつて獨立の第一歩を踏み出させる時、夙くも國民に向つて下の如く告げて居る——「同胞よ、吾等は光榮ある勝利を得るであらう。而もそれは決して銃劍によつて得らるるに非ず、經濟的・科學的・文化的に得らるべき勝利である。吾等の軍隊によつて今日まで獲得せる勝利は、決して吾國を眞の幸福に導くものでない。軍事的勝利の榮光に酔ふ勿れ。いざ新しき經濟的勝利に向つて準備しよう！」かくて、ローザンヌ條約締結を轉期として、トルコの新しき經濟的生活が始められた。そはトルコ國民經濟の自立を目標として、外債を整理し、外國資本を驅逐し、國內産業の近代化によつて經濟的獨立を實現するために、金剛の努力を揮ひ初めた。

列強はトルコの經濟的更生に對して何等の期待をかけなかつた。僥倖によつて勝利を得ても、其の軍人どもが經濟的改革にも成功すべしとは、彼等の決して信じ得ぬことであつた。殊に新共和國が、從來トルコ國民生活の經濟的部門に主要の役割を勤めたるギリシア人並にアルメニア人を國外に放逐せることは、トルコの經濟的改革に對して自殺的行爲なるかに考へられた。さり乍ら此等の兩國人は、決して世人が考へる如くトルコ經濟に貢獻して居たのではない。彼等は成程歐洲諸國の

會社商店の手代となつて居たので、歐土貿易に主要なる役割を勤めた。而も彼等は、正直なるトルコ農民に歐洲貨物を賣附けて其の代價を受取り乍ら、彼等の主人に對しては時として一厘も支拂はず、多くの場合は極めて僅少を支拂つた。其際彼等は常に純朴なるトルコ農民を泥棒なるかの如く罵るので、甚だしくトルコの評判を悪くした。彼等は此の狡猾なる手段によつて、二重の巨利を貪つて來た。蓋しトルコ農民は現金を所持せざるが故に、歐貨に對して農産物を提供した。此の物々交換に際し、トルコ農民は歐貨に對しては法外の高價を要求せられ、農産物の價格は極端に値切られた。而してトルコの輸出並に輸入貿易は彼等の獨占に歸した。そのためにトルコ農民は年々貧窮の底に沈み、ギリシア人及びアルメニア人は急速に富んで來た。かくてギリシア人及びアルメニア人が、トルコの經濟的生活に於て勤めたる役割は、多くの人々が考へるとは正反對に、實はトルコに取りて經濟的にも又道德的にも極めて有害であつた。従つて彼等を國外に放逐せることが、トルコの經濟改革の支障となる道理はない。

ギリシア人及びアルメニア人に擄取せられ、歴代サルタンの苛斂誅求に悩み、列強によつて市場を支配せられ、且一九一一年このかた連年不斷の戰亂に國力を消耗し去れるトルコを、從來の半植民地的經濟狀態より脱却せしめ、國民經濟の自力更生を圖ることは、眞に難中の至難事であつた。

而もムスタファは、國民に向つて下の如く告げた——「銃劍によつて征服せるものは、竟には鋤によつて獲得せる者に、其の地位を委ねることを餘儀なくされる。劍を使ふ腕は疲れるが、鋤で耕す腕は日毎に強くなり、年毎に國土の所有を確實にする。國民的支配は經濟的霸權によつて堅確たらしめねばならぬ。獨立の唯一の基礎、その最も強力なる下部構造は經濟である。軍事的・政治的榮譽は、若し經濟的勝利を伴はずば、斷じて永續せぬであらう」。而して國民生活の自餘の部門に於けると同じく、適切と大膽と果斷とを以てトルコ經濟の革新を遂行した。

ムスタファは、歐羅巴資本の侵入が、必然に政治的勢力の扶殖を伴ふことを熟知せるが故に、最初より其の支配に對して挑戦した。彼は法律によつて、トルコに設立せられたる一切の外國商社に、トルコ語使用を規定した。而して外資による一切の工業會社は、必ず半額以上のトルコ資本参加を必須とした。煙草の如き國際商品は、之を國家管理の下に置いた。特殊の工業に對しては、機械輸入の關稅を免除し、必要品の運賃を三割引にし、最も重要な工業に對しては、最初十年間租稅を免じ又は減じた。有史以來最初のトルコ國立銀行が設立せられ、イギリス系オットマン銀行及び其他既存外國銀行の特權は漸次縮小された。

外國よりの財政的援助を期待し得ざりし新トルコの經濟政策は、必然國家資本主義的ならざるを

得なかつた。トルコは實に此の主義に則りて、一九三四年第一次五箇年計畫を樹立し、各種の工業を興して國內必需品の自給自足を圖り、次で第二次五箇年計畫を樹立し、更に産業四箇年計畫によりて、鑛産物の開發、交通機關の發達に力を注ぎ、世界の豫想を裏切りて、着々目覺ましき成果を擧げた。

トルコ國民の七割を占むるものは農民である。ムスタファは既に一九二二年三月一日の國民議會に於て下の如く宣言した——「誰がトルコの所有者であり支配者であるか。言ふまでもなく眞個の生産者たる農民である。それ故に最も安寧と幸福とを享受すべきものは農民に外ならぬ。共和國の經濟政策は、此の原則を追求するであらう」。而して此の宣言は最も忠實に遂行された。サルタン時代に國家の主要なる財源であり、同時に農民の最大の苦惱なりし十分一稅は、一九二五年二月十七日の法律によつて廢止された。農業銀行を設立し、容易なる條件で貧農に貸附を行つた。都市と農村とを結ぶ道路を改修した。農村に猖獗を極むるマラリヤの驅除に力を注いだ。農科大學以下の農業學校を新設して、農業教育の根本的改造を斷行した。農事試驗場を設置して、農民に實物教育を施した。かくしてトルコ農業は、堅實に復興の途を辿りつつある。

さてトルコに於ては、從來名のみ用ひて姓即ち家族名が無かつた。一九三四年六月に制定せられ

たる法律により、一切のトルコ人は、一九三六年七月二日までに、必ず名の後に姓を付けねばならぬこととなつた。一九三四年十一月二十四日、トルコ國民議會は、ムスタファのためにアタトルクの姓を選んで之を贈つた。アタトルクは「トルコの親」を意味し、ムスタファの姓として、これほど適切なるは無い。彼は實に總ての意味に於て新トルコの親であつた。

ハむすび

一九三八年十月二十九日、トルコは共和國成立第十五周年紀念祝賀式を擧げた。實に此の十五年の間にトルコは身も魂も一新された。そは帝國から共和國となり、專制政治から民主政治となり、宗教の支配から理性の支配となり、コンスタンチノープルからアンゴラに移り、男女は同權となり、一夫多妻は一夫一妻となり、陰曆は陽曆となり、アラビア文字はローマ字となり、トルコ帽なく、面帕なく、ハレムなく、舊きトルコの面影は拂拭し去られて、新しきトルコが濺刺として登高向上

の一路を進んで行く。此の非常なる革新は、鋼鐵よりも堅きムスタファの意志によつて遂げられた。彼は他人が十年を要する仕事を一年、一年を要する仕事を一月でやり遂げた。昔は織田信長の功業を讃へて「天下速成」と言つた。この讃辭は直ちに移してムスタファに加へ得る。

而も此の紀念祝賀式の時、彼は既に病床の人であつた。國民の面上には此の歡ばしき日にも、一抹の暗雲が漂つて居た。病氣は持病の肝臓病である。而して國民の切なる祈願も其の甲斐なく、翌十一月十日午前九時半、ムスタファは五十八歳を以て遂に長逝した。死後に開封せられたる遺言狀は、此年六月十二日附を以て、彼の總ての財産を國家に寄贈して居た。

試みに新トルコ建國者ケマル・アタトルクと、アラビア神國建設者イブン・サウードとを比較せよ。年を同じくして生れたる此等兩人の英雄は、聰明と果敢と精力とに於て共通に拔群である。そのために兩者は共に偉大なる將軍であり、同時に偉大なる政治家であり得た。さり乍ら、前者の偉大の源泉は、透徹無比なる理性であり、後者のそれは熱烈眞摯なる宗教的信仰である。イブン・サウードは常に神より課せられたる使命のために戦ひ、その最初の加護を神に求めた。然るにケマル・アタトルクは、飽く迄も自己を信じ、自己の力を信じた。獨立戦争に苦闘しつつある間に、

彼は昂然として「吾死なばトルコ死ぬ可し」と明言して、自己の雙肩にトルコの運命を荷つた。而して彼の曇りなき理性は、常に驚くべき精確を以て現實を認識し、之に對して適切誤りなき處置を執つた。彼はまたイブン・サウードと異なり、決して嚴格なる道徳的生活を營まなかつた。彼の起居は一般に不規則であり、大いに飲み、大いに踊り、時としてはポーカーに耽つて夜を更かした。彼の結婚並に離婚は、能く彼の面目を躍如たらしめる。

一九二二年初秋、一擧ギリシア軍をアナトリアより掃蕩し去れる彼は、長驅してスミルナに入り、一旦トルコ軍司令部の汚ない一室に落着いた。然るに此の戦勝者の最も豫期せざる者が、此處で彼の來るを待ち構へて居た。それはラティフェ・ハヌムと呼ぶ美しき女性である。彼女はパリ人に劣らぬ見事なフランス語で、其父の邸宅をトルコ軍司令部として提供したいと申出た。最初彼は此の意外なる提議を斥けたが、委細の事情を彼女から聽くに及んで、遂に其の招待に應じた。

ラティフェは、ムアメロン・チャキ・ベイと呼ぶスミルナの豪商の女で、若くしてフランスに遊び、英・佛・獨語を流暢に話し、其頃は法律を學んで居た。此年の夏、あたかもトルコ軍がギリシア軍に對して攻勢を取り初めたころ、彼女はフランスの旅からスミルナに歸着したが、兩親は戦禍を恐れて何處へか避難し、町は混亂を極めて居た。當時尙ほスミルナを占領して居たギリシア軍は、



妻 夫 ア フ タ ス ム

彼女をトルコ側の諜者と疑ひ、兵士を以て其家を圍み、嚴重に外部との交通を遮斷し、且必要と認めれば直ちに逮捕すべしと威嚇した。ラティフェは、身に迫る危険を知つて居ながら、敢て脱走しようともせず、僅に數名の僕婢と共に、毅然して丘上の宏壯なる邸宅に踏み留まり、一日千秋の思ひで、トルコ軍の入城を待ち焦れて居た。彼女がロケットに藏めて肌身離さぬ寫眞の主が、今や常勝の歩みを此町に進めたのである。彼女は喧騒を極むる都心の塵まみれの司令部が、休息と靜

養を必要とする「常勝將軍」の宿たるに適せずとて、郊外に在る彼女の家に招かんとするのである。所謂「獨立戦争」を通じてムスタファと辛苦艱難を共にし、此時も從軍して彼と共に在りしハリ

デ・エディブ女史は、其著「トルコの試煉」の中に、目撃したままに當時の情景を述べて居る——
 「ムスタファ・ケマル・パシャは、遂にラティフェ・ハヌムの客となつた。彼女の家は戦火から最も離れ且最も安全な場處に在つた。……吾等は蒼々とした海を見下ろす美しきトルコ風の庭園を通つて進んだ。ゼランダに登る階段及びゼランダ自身までも、常春藤、藤、素馨ジャスミン、薔薇などで鬱蒼と包まれて居た。黒衣を纏へる小形の婦人が、階段の上で吾等を迎へた。齡は二十四歳とのことであつたが、落着いた物ごしは遙に年上に見えた。その優しい挨拶は、威嚴と古風な淑かさしよやを兼ね具へて居た。彼女は頭髮を黒いゼールで覆ひ、顔も體も圓味を帯び、且引緊つて居た。その堅く結んだ薄い唇は、やや女らしくないけれど、異常なる體力と意力とを示し、その目は此上もなく美しく、強く、輝き、また叡智が閃いて居た。

「ムスタファは暫く座を退いた後、禮服に着換へて歸つて來た。彼は金髪を綺麗に後に撫で付け、いつものやうに金色の眉毛を逆立て、内心の満足に兩眼を輝かせながら、數々の飲物を満載して居るテーブルの側に立つた。ラティフェは私と並んでソファに腰かけて居たが、始終彼から目を離さなかつた。彼女は彼に魂を奪はれて居たし、彼は明らかに彼女に愛を示した。二人を相牽く強烈なる人情の交流が、此夜を潑刺たるものたらしめた」。

ムスタファはラティフェに向つて、彼の希望や計畫を語つた。彼は是迄斯かる態度で女に話したことはない。彼女はまた無上の聽手であり、稀有の應對者であつた。回教の信仰を護り乍ら、西歐の儀禮を辨へ、新しき學問を修めたるラティフェは、ムスタファが心密かに描いて居た理想的トルコ婦人、解放せられ、教育せられ、訓練せられしトルコ婦人が具ふべき一切の性質を完備して居るかに思はれた。彼は青年時代から異性に對して無頓着であり、また戀愛沙汰に耽るには餘りに忙しかつた。彼は同僚が婦女子に騒ぐのを見ては「君は女と遊ぶが善からう、僕は馬の方が可愛い」と言つて居た。そのムスタファが、一見してラティフェに心奪はれたのだ。

彼女の邸宅に滞在中、彼女はムスタファに取りて絶好の祕書でもあつた。勝利の跡始末に列強との交渉が輻輳せる際のこととして、彼女の語學が別けても役立つた。ハリデ・エディブは、恐らく若干の嫉妬も手傳つて、屢々ムスタファを揶揄した。ムスタファが「彼女はロケットの中に僕の寫眞を入れて居たぞ」と欣んだのに對して、ハリデ・エディブは「トルコの女の半分は、皆な貴方の寫眞を肌身に着けて居ます。然し夫れは別に貴方に戀慕して居るからではなく、トルコを救つてくれた貴方に對する感謝からです」とたしなめた。但し彼の情熱は、ハリデ・エディブの揶揄ぐらゐで冷める筈がなく、彼女を知りて五日目に、彼は早くも彼女を吾有とせんとした。然るにラティフェ

は、結婚式を挙げたる後ならでは彼の希望を容れ難いと、斷乎として彼の要求を拒絶した。一敗せる「常勝將軍」は、憤然として翌日彼女の邸宅を去つた。其後五週間、彼からラティフェに何の音沙汰もなかつた。彼女はムスタファとの戀愛の經緯は最早解消せるものと諦め、再びパリに赴いて法律の勉強を續ける準備をして居た。

其間ムスタファは、アンゴラで政務に忙殺されて居た。一日彼は突如旅行の用意を命じた。一時間の後、彼は單獨でアンゴラを出發したが、何人も行先を知らなかつた。彼は迂路を取りてスミルナに赴き、驀地にラティフェの家に至り、端的に結婚を申込んだ。思ひがけぬムスタファの出現に瞠目せるラティフェの返事も待たで、彼は言ひ足した——「即刻結婚式を挙げよう。虚禮は一切ぬきだ」と。而して事は其の通りに行はれた。二人は直ちに新婚の旅に出た。世界は初めてムスタファの妻帯を知つて驚いた。

此の數年間、ムスタファの身のまはりを世話して來たのは、フィクリーと呼ぶ彼の従妹であつた。フィクリーは眞實な優しい少女で、密にムスタファに想ひを焦がし、まごころ籠めて彼に事へて居たが、そのうち肺結核に罹つた。ムスタファは、ラティフェとの結婚を決意してスミルナに赴く前、フィクリーを獨逸ミュンヘンの病院に旅立たせた。此時ムスタファと一緒に彼女を停車場に見送つ

たハリデ・エディブに従へば「彼女は始終泣き崩れて居た」。而してエディブ夫人に向ひ「パリに四五日滞在して、美しい衣裳を求めませう」と言つた。夫人は更に下の如く述べて居る——「フィクリーさんを見たのは、之が最後であつた。ミュンヘンの病院で彼女に附添つて居た一婦人は、彼女の衰弱、彼女の涙、ケマルの結婚を聞いた時に彼女が氣もそぞろに口走れる悲しい戀物語を私に告げた。ミュンヘンのトルコ人たちは、彼女が到着した時は物々しく歓迎したが、彼女に最早、前途がないと知つた後は振りかへりもなくなつた。彼女は病氣は癒らず、心に痛手を負ひて、唯だ一人の親切な婦人に見送られてミュンヘンを去つた」。

斯様に一人の可憐の少女を犠牲にした此の浪漫的な結婚は、二人に取つて決して幸福なものではなかつた。二人とも餘りに強烈な自我を有し、餘りに不屈な意志を有せるが故に、互に相譲りて一體となることは不可能であつた。ラティフェは、數百年間歴へつけられたトルコ婦人の全精力が、彼女に於て一時に爆發したかと思はれるやうな活動的女性であり、且秀でた頭腦を有つて居た。彼女は有らゆる仕事に興味を有ち、且其のたづさはる總ての仕事に通曉した。かくて彼女は、社會問題は言ふに及ばず、政治問題にさへも容喙し、且自己の意志を貫かうとした。而もそれは彼女よりも一層強烈なる意志を有するムスタファの斷じて許し得ぬところであつた。ラティフェは勝れたる女

性ではあつたが、ムスタファの妻としては決して適當でなかつた。ムスタファの彼女に對する愛情は幾くもなくして冷め、やがて離婚するに至つた。彼は其後また娶らず、アングラ郊外チャンカヤの邸宅に獨身生活を送つた。

ラティフェとの結婚以前、サカリア戰勝直後、彼は其母ズベイダを君府からチャンカヤに迎へた。ズベイダは齡既に七十に達して居たが、丈高く骨格逞しく、顔色は乳の如く白く、その輪郭は強くはつきりして居た。ハリデ・エディブに従へば、彼女は純白の衣を纏ひ、純白の頭巾を被れる典型的なるマケドニア婦人であつた。ズベイダに取りて彼は小學校の腕白小僧時代と同じムスタファであり、その當時と同様に「彼を愛し、彼を叱り、彼に話した」。彼女は其子が三軍を叱咤すると同様の峻烈さを以て、其子の家政を見て居た可憐なるフィクリーを容赦なく叱りつけて指圖した。老齡のために視力は衰へ、多くの病氣を煩つて居たので、概ね藁蒲團の上に坐して日を送つた。アングラは彼女の氣に入らず、生れ故郷のサロニカを戀ひ焦がれ、其子が此町を敵から奪回するまでは、決して新しい衣裳を身に着けぬと頑張つた。ハンス・フロエムブゲンの言葉に従へば「母と子とは、宛も親善なる二大強國の如く相隣りて生活した。兩者とも各自の國境を尊重したが、若し他が此の國境を越えんとする場合は、直ちに衝突を見た。兩者とも事を成さんとし、勝利を得んとする決意

に燃えて居た。ズベイダは祈禱し、ムスタファは計畫した」。やがて母はスミルナに轉地して靜養することとなつたが、一九二三年一月、其子が國民議會に於ける彼の反對派と惡戰苦闘しつゝありし時、遂にスミルナに於て長逝した。彼女のムスタファに對する最後の命令は、わがためにサロニカを奪回せよといふことであつた。

ヒットラー又はムツソリニが、紆餘曲折の路を辿れると異なり、ムスタファは當初より唯一筋の路を邁往した。但し其路は、彼等のそれに劣らず嶮難を極めた。彼等をして其の嶮難を突破せしめたるものは、實に彼等の自身に對する金剛の信念、同志に對する不動の信賴、時代並に人心の透徹せる認識、舊秩序を無視する敢然たる勇氣、志業に對する驚くべき堅忍、及び、滾々不盡の精力である。ムスタファは、ヒットラーのギジモンと直覺とを缺いて居る。而も其の旺盛なる精力に至つては、眞に超人的と呼んでよい。彼の生活を熟知せるハリデ・エディブは、實に下の如く言ふ――「彼の周圍には、知性と徳性とに於て彼に優れる者あり、また教養と學問に於て遙に彼の上に出でたる者もある。而も彼等のうち何人もヴィタリテイの一點に於て、彼と匹敵し得る者はない。恐らく彼の人格は、平凡なる萬人の性質の一部づつを集めて成れるものなるが故に、一層嚴肅圓滿なる性格、又は一層深奥なる智慧の所有者よりも、却つて善く民衆を支配し得たのであらう。總ての人

が疲れ果てた時に、當初と變らぬ潑刺さを以て、室の眞中に立つて話し續けて居た彼の姿が、今でも私の眼前に彷彿する。其時、私は自ら斯く問うたことをも記憶して居る——何と驚くべき人であらう。これは人間の姿を取つた自然力とでも云ふものであらうか。この怖るべき旋風は、トルコ國民が其の目的を遂げた時に、何うして鎮まるのであらうかと」。

當面の仕事が無い時には、彼は其の精力を議論と研究とに注いだ。例へばカリフ制度廢止を決意するや、彼は回教の教義、その初期の歴史を熱心に研究して、宗教階級との必至の鬭争に準備した。一九二七年十月、建國の基礎ほぼ成れる時、彼は共和國民黨大會に於て、獨立戦争の經緯と國民革命の遂行について精細なる説明を與へた。そは世界に於てまさしく空前であり、恐らく絶後なるべき、實に四十萬語の長演説であるが、その草稿を彼は四十八時間ぶつ通しで一氣に作り上げた。幾人かの祕書が疲れ果てて交代したが、彼は最後まで凜然として居た。

アンゴラの大議事堂に於て、彼は熱心なる聴衆を前にして演説を始めた。そはラヂオによつてトルコ全國に放送された。風雨のために二日目から放送は不可能となつたが、演説は六日に亘つて續けられた。極めて明晰に、極めて論理的に、而も事實其者に具はれる戲曲的多彩を以て、彼は新トルコ建設の歴史を説き去り説き來りて、完全に其の聴衆を魅了した。而して實に下の如き言葉を以

て其の長廣舌を結んだ——

「諸君！ 予は此の敘述に於て、國家の進路既に盡きたりと思はれた一個の偉大なる國民が、如何にして其の獨立を回復せるか、如何にして科學の最新の成果の上に一個の民族的・近代的國家を創建せるかを示すために心を碎いた。吾等が到達せる此の成果は、苦難の數世紀より學べる教訓の賜物であり、わが愛する祖國の土を紅に染めたる血潮の賜物である。予は此の神聖なる寶を、トルコ青年の掌中に置く。トルコ青年よ！ 諸君至高の本務は、國民的獨立を、トルコ共和國を、擁護することである。これこそは諸君の生存の、また諸君の將來の、唯一無二の礎である。この礎は諸君至高の寶を藏する。將來に於ても、國の内外に於て、此の至寶を諸君より奪はんとする非謀が現れるであらう。萬一諸君が諸君の獨立及びトルコ共和國を脅かされるやうな場合に立ち至らば、諸君は其の本分を盡すために、諸君の置かるる境遇及び條件に左右されてはならぬ。境遇や條件は甚だしく不利であるかも知れぬ。諸君の獨立及びトルコ共和國を亡ぼさんとする敵は、振古未曾有の強大なる力を以て臨むかも知れぬ。彼等は其の武力と謀略とを以て、祖國の一切の城砦と武庫とを奪ひ去るかも知れぬ。彼等の軍隊は普く祖國を蹂躪し、完全確實に之を占領するかも知れぬ。更に最悪の場合を想像すれば、是くの如き非常時に際して、國內に於て政權を握るものが過誤を敢てし、

敵の傀儡となり、甚だしきは彼等の個人的利害を敵の主要目的と合致せしめるかも知れぬ。かくて國民は極度の窮乏に陥り、破滅の淵に沈淪するかも知れぬ。トルコ青年よ！實に是くの如き場合に陥りても、敢然として獨立と共和國とを救ふことが諸君の任務である。此の大業のために必要な力は、實に諸君の血管に流るる鮮血の中に漲つて居る」。

彼は自ら此の言葉通りに戦ひ抜いた。それ故に彼はトルコ青年に向つて斯く要求することが出来る。吾等はトルコ青年が、彼の此の教訓に忠誠ならんことを希望して止まぬ。彼の長逝を發表せるトルコ政府の公文は、下の一節を以て結ばれて居る。吾等は其の一節を以て此の小篇をも結ぶであらう——

「今日吾等が其の永眠を悼む吾等の偉大なる統領アタトニルクは、常にトルコ國民を信じて居た。而して其の信頼に勵まされて、彼の偉業を成就した。彼は滿腔の信頼を以て、此の偉業を偉大なるトルコ國民に遺した。青年トルコは此の無比の遺産たる共和國を護り、偉大なる故人の跡を踏んで邁往するであらう。ケマル・アタトニルクは永遠にトルコの歴史の中に、またトルコ人の魂の中に生きるであらう」。

レザー・パフラギ皇帝

一 レザー・カン出現以前

ペルシアは、幾度となく異民族のために征服の憂目を見た。それにも拘らず、ペルシア人は遼遠なる過去の光榮を、恰も昨日の如く考へて、自ら誇り且慰めて來た。例へばナスルッディン皇帝の逸話として、下の如きことが傳へられて居る。一八四八年より一八九六年まで、殆ど半世紀の長きに亘りてペルシアに君臨せるこの皇帝が、一日ギリシアの政治家を引見せる時、その最初の挨拶は「ギリシアがペルシアに對する舊怨を忘れて欲しい」といふ言葉であつた。而も過去數十年乃至數百年の間、ギリシアとペルシアとの間には如何なる葛藤も、紛糾もなかつたので、此の近代ギリシアの政治家は、皇帝の謂はゆる舊怨とは、果して何を意味するかと思ひ惑つた。然るに皇帝自身は、親らドリウス、サークセス諸帝の後繼者を以て任じたるが故に、實に二千數百年以前の祖先のために、そのギリシア遠征を辯解せんとしたのである。

かくの如きは單りペルシア人のみならず、古に榮えて今に衰へたる多くの東洋國民に共通する悲惨なる特性の一つである。彼等は幾度となく異民族のために征服された。その異民族は、概ね彼等が野蠻人として輕蔑せる蒙昧の民であつた。その野蠻人のために彼等の國は亡ぼされた。而も彼等の主人となれる野蠻人は、いつとはなく却つて其の征服せる民族のために同化せられ、彼等の文化とその傳統とを吾がもの如く尊重するやうになる。是くの如き歴史を繰返す間に、其の民族の昔ながらの傳統は歪められ乍らも綿々不斷に護持されて來たが、民族其者は、敢然として外敵に抵抗する反撥力を失ひ、國家獨立の礎たるべき愛國的感情を稀薄にした。かくて彼等は、一面に於て過去の榮華を讚美し誇負し乍ら、他面に於て現實の屈辱を意に介しない。彼等は強力者の前に其膝を屈することを恥ぢず、唯だ一日の安きを偷む生活に甘んずる。

之をペルシアに見よ。カジャール王朝治下のペルシアは、第十九世紀を通じて、間斷なく歐羅巴の政治的並に經濟的蠶食を受けて來た。夙く既に一八二六年、ロシアはトルクマンチャイ條約によつて、コーカサスの豊かなる諸地方を此國から奪つた。一八五七年には、イギリスがアフガニスタンの西部を此國から失はしめた。ペルシアはイギリスの無法に對して起つて戦はんとしたが、遂に如何ともし難かつた。恰も此時、後にアリアン人種優秀を力説せる人種哲學を提唱して其名を世界に

知られたるゴビノー伯が、フランス公使館參事官として、テヘランに駐在して居た。彼は具さに當時のペルシア國情を目睹して、平素は過度に祖先の偉業を誇るペルシア人が、現前の國難に對して全く無關心なることに驚き呆れて居る。ゴビノー伯の記するところによれば、ペルシア政府は國民を激勵して侵略者と戦へと號令し、教師たちはイギリスに向つて聖戰を布告した。然るにペルシア國民は、啻に政府の號令に應ぜざりしのみならず、教師たちの聖戰呼ばはりを嘲弄し、わけてもテヘラン商人は、晚かれ早かれ英軍が征服者として入都するものと諦め、専ら其の商品を高價に彼等に賣付ける算段に没頭して居た。

かくしてペルシア國民の大多數は、空腹を充たすに足る食物あり、時に醉ふべき阿片さへあれば、大なる不平なしに其日を送つた。カジャール家の諸君主は、生活の享樂に餘念なく、其の豪華に要する費用を際限なく外國から借りた。世界戰の前年に於て、ペルシア皇帝のイギリスに對する負債は三百二十五萬ポンド、ロシアに對する負債は千三百五十萬ルーブルに達して居た。英露兩國は、殆ど如何なる抵抗をも受くることなしに蠶食の歩を進め、一九〇七年八月三十一日、密に露都に於て協約を結び、肆まに各自の勢力範圍を定めて、一朝にしてペルシアの地圖を塗替へて了つた。爾來ペルシアの國運は、淪落の一路を急ぐだけであつた。一九一一年、ペルシア政府に招かれて財政

整理の重任に當り、着々改革の實を擧げたる事が英露兩國の忌諱に觸れ、在職僅に八箇月にして恨を吞んで歸國せる米人モルガン・シャスターは、滿腔の義憤を下の言葉によつて洩らして居る——「唯だマコーレーの史筆、エレスチャギンの彩管のみ、能く此の舊國の没落に伴へる急轉の場面を、如實に描出し得るであらう。場面場面に於て、二個の文化高き、而して基督教國と自稱する國家が、眞實と體面と禮節と而して法律とを標榜して、緩急如意の役割を演じた。少くも其のうちの一國は、自國の政治的欲望を遂げるため、而してペルシアをして到底革新の希望なからしめるため、最も野蛮なる慘虐を敢てするに躊躇しなかつた」。英露の掌裡に翻弄せられたるペルシアは、全く名目のみの獨立國となり果てた。政府は彼等の傀儡に過ぎざるが故に、其意に満たざる内閣は隨時之を倒し、甚しき時は毎月内閣の更迭を見た。従つてペルシアの政治家は、自主獨立の精神を失ひ盡し、唯だロシア公使又はイギリス公使の臣隸として、彼等の願使に甘んじた。かくの如き淪落行程の只中に、第一次世界戦が勃發したのである。

ペルシア政府は、世界戦に於て局外中立を宣言した。さり乍ら聯合國も同盟國も毛頭、此國の中立を念頭に置かなかつた。ペルシアは世界戦の始より終まで、兩交戰團體の戰場として、悲惨なる戰禍を嘗めさせられた。雙方のプロバガンダが悪辣に行はれ、雙方の黄金が湯水の如く撒かれた。

ペルシアの政治家は、或は其身を聯合國側に賣り、或は同盟國側に賣り、甚だ屢々雙方に賣つた。世界の國々が金の缺乏に四苦八苦せる大戰最中に、テヘランのバザールだけでは、金貨よりも紙幣が歡迎される有様であつた。

一九一七年の露國革命により、ペルシア後門の狼は退却したが、前門の虎は一層残酷なる猛威を振ひ、一九一九年八月九日、暴力と黄金とを以て此國を威壓し籠絡して、遂に英波條約に調印せしむるに至つた。この條約は「飽迄もペルシアの保全を念とし、その獨立を尊重す」と標榜しながら、ペルシアの行政を輔佐する官吏を英國より送り、ペルシアの軍隊を英國將校の手によつて改編し、内政改革の目的を以て英國より借款し、鐵道建設及び其他の交通機關改善に關して英國と協力し、且英國の手によつて關稅改革を行ふべきことを約束せるものであり、實にペルシアを以て完全に大英世界帝國の一部たらしめんとせるものである。さればこそ當時のフランス新聞は、此の條約を以て「過去五年間、印度並にエジプトの防波堤を築かんとして、イギリスが拂へる一切の努力のうち最も重要な成績を擧げたるもの」として羨み且嫉んだ。而して此の恥づべき條約に調印せる首相ゾオスケツグウレー以下三人のペルシア政治家は、實に七十五萬トーマンの黄金をイギリスから貰つたのだ。

「如何に國家の興廢に無關心なるペルシア國民といへども、この條約には憤激せざるを得なかつた。わけても露國革命後に復活せるペルシア議會は、ロシアの宣傳によつて排英精神と國民的自覺とを喚起せられたが故に、是くの如き條約に協賛を與ふる道理なく、政府もまた之を議會に提出する勇氣が無かつた。かくて折角の英波條約も、正式に批准せらるることなくして空しく中有に迷ひつありし間に、ペルシア政府の優柔不斷を怒れる英國外相カーゾン卿は、一九二〇年六月に至り、從來ペルシアに與へつつありし毎月の補助金交附を止めたので、首相ヴォスケッダウレーは其職を辭し、急遽、歐羅巴に逃避せねばならなかつた。

ヴォスケッダウレー及び其他の親英政治家群がペルシア政局の舞臺より退場するや、直ちにセパダリアザムを首班とする親露内閣の出現となり、英波條約廢棄を宣言して、ソギエト公使館と新條約の交渉に入つた。セパダリアザムは、前首相にも優る腐敗せる老政治家であり、多數の黄金をロシアから貰つた。ロシアの撒ける黄金は、恐らくイギリスの撒けるそれに劣らぬであらう。かくして買収し得たる露波條約は、一九二一年二月二十六日モスクワに於て調印されたが、其の精神は舊露帝國がペルシアに對して取れる侵略政策を放棄し、且舊露帝國の締結せる一切の條約を廢棄し、全く對等の獨立國家としてペルシアを待遇せるものであつた。かくの如き條約の締結にさへ巨額の

賄賂を必要とせることは、殆ど吾等の不可解とするところである。當時のソギエト大使ロートシュタインは實に下の如く語る——「ペルシア政治家は、誰からでも金を受取る。今日はイギリスから取り、明日はロシアから、またはフランスから、またはドイツから、または其他の國から取る。但し彼等は、金を受取つたからとて何事をもしない。假令六度ペルシアを買収しても、ペルシアは決して何國の手にも落ちぬであらう。ペルシアは何うにもならないのだ。それ故にペルシアは、結局健全だと言ふ可きであらう」。

而も是くの如き「健全状態」は、心あるペルシア人に取りて、最早堪へ難きものとなつた。腐敗せる賣國政治家どもを葬れといふ要求が、眞摯なる青年並に一部の軍人の間に、火の如く燃え立つた。而して此の革新運動の中心指導者は、テーランの新聞「トレード」の主筆サイエッド・ズィアエツデインであつた。彼は當時齡三十三歳、未だ嘗て英露に其身を賣らず、腐敗貴族と何等の因縁を結ばず、何人も其の清廉と愛國的熱情とを疑はなかつた。彼は少數の同志と相謀りてクーデタの斷行を企て、そのためにコサック兵團を用ゐるに決した。

コサック兵團は、一八八二年、ナスルツデイン皇帝の時、當時次第に醸成せられつつありし人民の反抗に對し、皇帝が一身の護衛に備ふる目的を以て、露國陸軍大佐チャイコフスキをして編成せ

しめたもので、爾來、露國軍人によつて指揮されて來た。一九二〇年、デニキン軍の敗退後ボルシエギキ軍がアゼルバイジャンに侵入してソギエト共和國を此地に建設するや、コサツク兵團は其の征討のために派遣せられたが、却つてボルシエギキ軍の撃退するところとなつた。此の敗北のため、露國將校は悉く放逐せられ、ペルシア將校の手によつてコサツク兵團の改編を見るに至つたが、此時最も才幹を示したのが、レザール・クリ其人であり、兵團改組と共に佐官に昇進し、カスィム・カレン及びマスド・カン兩將軍の下に、兵團の最も有力なる指揮者の一人となつた。

當時コサツク兵團の大部分はカズギンに駐屯してゐたが、ズィアエツディン及び其の同志は、豫てよりマスド將軍と脈絡を通じて居たので、クーデタの計畫を打明けて將軍の同意を得た。將軍はカスィム及びレザールと擬議の上、一九二一年二月二十日深更を期してテールランに進軍するに決し、二千五百人より成る革命軍の指揮をレザールに委ねた。レザールは欣んで此の重任を負ひ、途上何等の抵抗を受くることなくしてテールランに進軍し、カズギン門より市内に入つた。スウエデン人を司令官とする憲兵隊が多少の抵抗を試みたが、その敵し難きを知りて直ちに降服したので、二月二十一日拂曉には、殆ど總ての主要官衙を占領し了つた。當時テールラン駐在中なりし英國財政委員の一人 J・M・バルフォアは、一夜の間に革命の行はれしことを、朝食の時まで知らなかつたと語つて居

る。ペルシア皇帝は生命の危険をさへ感じたので、何等の抵抗を試みることなく、總てを成行きに任せた。かくて即日、セパダリアザムは逐ひやられて、ズィアエツディンを首班とする内閣が組織せられ、マスド・カンは陸相となり、カスィム・カンはテールラン總督となり、昨日のレザール・クリ、今日のレザール・カンはペルシア陸軍總司令官となつた。

レザール・カンは、一八七八年三月十六日、マザンダラン山間の一邑サワードクフに生れた。兩親は貧しくあつたが、地方の名門であると言はれる。マザンダランは一方カスピ海によつて限られ、他方峻峻なるエルブルズ山脈によつて護られたる山地なるが故に、アラビアよりの奔潮も、蒙古韃靼の波濤も、共に此地には押寄せ得なかつた。マザンダランが完全にペルシア帝國の一部に織込まれたのは、實に第十七世紀初頭、アッバス大帝の時のことである。それ故にマザンダランでは、ペルシアの如何なる他の地方に於てよりも、イランの血液が純潔に保たれて來た。レザールの脈管にも、純潔なるイランの血が流れて居る。さればこそレザールは、後にペルシアの帝位に登れる後、國號をイランと改め、帝位繼承者をイラン種の母より生れたる皇太子に定めたのである。

彼は二十五歳のころ、一兵卒としてコサツク兵團に入つたと言はれるが、その以前の生立ち、乃至其後の閱歷は殆ど知られて居ない。但し彼は軀幹拔群に長大、容貌また雄偉なるが故に、單に其

の風貌のみを以てしても優にコサック同僚を威壓するに足りたであらう。一九一九年、ジエンガリ族の叛亂征討に際し、彼は尙ほ一下士官であつたが、其の勇武を以て人目を惹いた。一九二〇年には士官に昇進して居たが、コサック兵團改組に際して非凡の才幹を示し、そのために「テーラン進軍」の指揮者に選ばれたのである。

二 レザー・カンの出現

レザー・カンが彗星の如く其姿をテーランに現したのは、齡四十三歳の時である。高き教養とてもなく、些かの政治的經驗もなく、コサック兵團以外には殆ど其名を知られざりし武骨なる一軍人が、やがてペルシアの救國主となるであらうことは、恐らく當時、何人も考へ及ばぬところであつた。一兵卒より出身せる彼が、一躍、陸軍總司令官に任ぜられし其事さへ、既にペルシアの上流階級をして驚魂駭魄せしむるに足りた。恐らく彼等は、レザー・カンが此の異類絶群の寵遇に感激し、

唯々諾々新内閣のために犬馬の勞に服することと考へて居たであらう。然るに、事實は忽ち彼等の想像を裏切つた。新内閣の主人は決して首相ズィアエッディンに非ず、實にレザー・カン其人であつた。

彼は陸軍總司令官としてペルシアの武力を掌握しつつ、政府に向つて一切の重要政務に對する發言權を要求した。彼は軍隊の増員改善のために經費を要求した。革命に反抗する貴族の彈壓には、彼自身之に當るべきことを要求した。ズィアエッディン政府は、従前のそれと異なり、眞向に國民主義を標榜せるが故に、イギリス又はロシアの援助を得べくもなかつた。従つて政府は、否應なしにレザー・カンの武力と其の鐵石の意志とに頼らなければならなかつた。新政府は何よりも先づ必要なる政治費用を算段せねばならなかつたが、國庫は空乏であり、徵税は全く不可能であつた。レザー・カンは首相に強要して、豪富を擁せる貴族たちを逮捕せしめた。英波條約調印者の一人フィルズ親王及び其父を初めとし、新政府樹立後の數週間に、多數の貴族が牢獄に投ぜられ、その財産の一部又は全部が沒收された。此等の貴族は、多年英國の走狗なりしが故に、心密かにイギリスは決して彼等の没落を坐視せぬだらうと豫期して居たのに、英國公使館は唯だ「嚴重なる抗議」を提出するだけで、積極的行動に出でようとしなかつた。



首相兼陸軍大臣の時のカ・ザレ

に財政再建を望んで居たので、該條約によつてイギリスが獲得すべき利益を個々に分譲して、その好意を買はんとした。然し乍らカーゾン卿は、頑然として該條約の全面的承認を強要し、ズィアエ

二二〇
此の非常手段によつて當面緊急の費用を手に入れたズィアエッディンは、直に政治的改革に着手した。彼は一切の官廳から無用の冗員を罷免し、出來得る限り有能正直の者を舉用せんとした。彼は前内閣と同じく、英波條約廢棄を宣言したが、

内心は英國の援助の下

ツディンの提議に耳を藉さうとしなかつた。かかる間に四方よりズィアエッディンに對する反抗の火の手が擧がり初めた。ソゾエト公使が彼の親英的態度に不満を抱いた。軍隊の將校が彼に反抗した。迫害せられたる全貴族が彼を呪つた。王族の彈壓に憤慨せる皇帝も彼を憎んだ。彼の立場は至難になつた。

この形勢を看取せるレザー・カンは、四月三日、辭職をズィアエッディンに迫り、カヅメス・サルタネーを首相に推し、自ら陸相に就任した。新首相は、曾てコラサン總督たり、事を以て鐵窓裡に繋がれて居たのであるが、今やレザー・カンの推舉により、牢獄より一躍して臺閣の首座を占めることとなつたのである。この政變によつて、ペルシアの政治的實權が、レザー・カンの掌裡に在ることが、初めて内外に明白になつた。而して人々は、此の無學なる武人の獨裁の下に、ペルシアの悲運と不幸とは、一層甚しくなるだらうと悲んだ。然し乍ら此の悲觀は當らなかつた。レザー・カンは、大膽不敵の將軍であると同時に、果敢有爲の政治家であることを立證して行つた。

レザー・カンは、陸相兼陸軍總司令官として、先づ軍隊の改造並に叛亂諸部族の鎮壓に全力を注いだ。當時のペルシアは、實に混沌亂離を極めて居た。西方に於てはルリスタンの諸部族が、公然政府に叛旗を翻して居た。北方に於てはロシアの後援を恃めるクチユク・カン其他の叛軍が、勢威

を遅くして居た。東南に於てはバルチスタンが相變らず不穩であつた。西南に於てはモハメラの君主が、イギリス庇護の下に殆ど獨立して居た。此等の叛亂を鎮定し、テラン政府の威令を四方に普からしむるに非ずば、ペルシアの統一と復興とは、竟に望むべくもなかつた。かくて彼は先づ軍を北方に進め、クチュク・カンの勢力を覆して、アゼルバイジャンを平定した。次で彼はクルド、ルリ、バクティアリ、カシガイ其他の剽悍好戦の諸部族の武装解除に着手した。此等の諸部族は、皆な遊牧又は半遊牧を事とし、各自の族長の下に獨立不羈の生活を營んで來た。彼等はテラン政府に納貢することとなつては居たが、それは唯だ名目のみであつた。彼等のうち最も頑強なるはルリ族であり、従つてルリスタンの武装解除は極めて難事であつたが、レザール・カンは一九二三年より之を強行し、數年を費して其の目的を遂げた。

レザール・カンがペルシア統一のために北伐南征しつゝありし間に、首府テランでは相變らず政治的陰謀が繰返され、そのために内閣は三度も更迭した。レザール・カンは、愚劣なる首府の政局に風馬牛の態度を取り、専ら戰陣の間に汗血を濺いで居たが、一九二三年十月に至り、曾て彼によつて擧用せられし前首相カヴメス・サルタネーが、彼を暗殺せんとする陰謀を企てて居ることを知るに及び、此月三十一日、自ら首相となりて新内閣を組織し且陸相並に陸軍總司令官を兼任した。而

してアフマッド皇帝は、一切の責任を避けるため、興亡の岐路に立つ國家を後にして、翌月、歐羅巴に旅立つた。

いまやレザール・カンの勳功は普く國民の間に認められ、その勢力は政府の一切の方面を支配するに至つたので、若し彼が性急輕率の人間であつたなら、恐らく既に此時にペルシアの主權者たらんとしたことであらう。ペルシアに於ける彼の地位は、打見たるところトルコに於けるケマル・パシヤのそれに酷似して居た。而してシャールの非愛國的行動も、またサルタンのそれと酷似して居た。さればこそ翌一九二四年初頭から、ペルシアに於ても共和國運動が頓に擡頭した。議會に於ける革新黨は、憲法を改訂して政體を變更すべしと主張した。恐らくロシアの煽動を受けたるムハムマッド・アル・カリツスイの一派は、共和國建設を目的として總選舉を行ふべしと唱へた。此年三月には此の問題を繞り、議會に於て激烈なる議論が闘はれた。革新黨は三月二十一日、即ち回教紀元一三〇三年正月元日を期して共和國宣言を斷行すべく、猛烈なる運動を行つた。議會に於ける殺氣立ちたる空氣は、テラン市民にも波動して、暴動及び同盟罷業の勃發を見るに至つた。

レザール・カンは、ペルシアの國情が決してトルコのそれと同じからぬことを知つて居た。ペルシアに於ては、回教教師團の國民に對する勢力が、トルコに比べて遙かに強大である。その教師團は、

トルコ共和國がカリフ制を廢止し、教師の特權を奪へることに對し、深刻なる不安と憤激を抱いて居る。彼等は斷乎として政體變革に反對する。而して一般國民も、また彼等に動かされ、共和國を非とする意志を示し初めた。此の形勢を看取せるレザー・カンは、テヘランを去りて聖都クムに赴き、全國民の尊信を博する此地の教師等と談合し、ペルシアに於ける共和國建設は、回教の精神に悖る旨を聲明せるのみならず、新聞紙其他に於て、此事に就いて論議することを禁止した。而も熱狂せる議會は、彼の聲明に耳傾けず、喧々囂々して止まなかつたので、彼は一切の官職を辭して、四月八日ルーデンに赴いた。彼の諸將軍は、テヘランに進軍して議會を蹂躪すべしと壯語した。議會は急ぎ代表者をレザー・カンの許に派し、首府歸還を懇請せねばならなかつた。かくして彼はテヘランに歸りて再び政權を握ることとなつた。而して先づフランスより購入せる近代武器を以て、其の軍隊を強化した。

三 ペルシアの統一

さてペルシアの西南部クズイスタンは、世界に名高き石油産地であり、且そのためにペルシアの最も富裕なる地方である。その住民の大多數はアラビア人であり、最大の勢力を揮へるはモハマドの首長カザルである。イギリスは、夙く既に一九〇五年、カザルと契約を結んでクズイスタンの豊富なる油田を確保し、英波石油會社を設立して其の開発を初めた。爾來、此地は單りペルシアと言はず實に世界に於ける最も富める地方となつた。之と共に首長カザルの収入も増し、紅海より裏海に至る西南亞細亞全體を通じて、如何なる君主も彼の如く豪富を擁せるはなかつた。

英波石油會社の送油管はシャッタラバ河口のアバダンに終り、此處より英國汽船によつて印度洋に運び出される。此の大切なる送油管を防護するために、世界戰の勃發と同時に、イギリスは印度軍を派遣してイラクの南部を占領した。英波石油會社の利權は、もとよりテヘラン政府との條

約によつて獲得せるものであるが、モハメラー首長カザルは、實際に於てシャッタララプ河の全左岸、及びアワロス以南のカルン河可航下流を支配して居るので、イギリスは別個にカザルと條約を結び、カザルの領域を侵す敵に對して、武力援助を約束して居た。

カザルは至深の關心を以てレザー・カンの擡頭を注視して來た。彼はテーラン勢力の昂潮が、己れの領域を侵すべきことを恐れたが、ペルシア統一の偉業が、レザー・カンの號令の下に着々進められるのを見て、不安は次第に深刻になつた。事實、一九二四年の夏頃にはペルシアの自餘の地方は殆ど皆なレザー・カンの旗風に靡き、中央の威令に服せざるものはクズイスタンだけとなつた。カザルはレザー・カンを蹉跌せしむべく、數々の陰謀をめぐらした。彼はペルシア議會をして其の「獨裁者」に反抗せしむべく、巨額の黄金を議員の間に撒いた。或はルリ諸部族に援助を與へて、レザー・カンの武裝解除に抵抗せしめた。但し彼は起つてペルシアと戦ふことを敢てしなかつた。テーラン政府が彼に向つて租稅滯納を督促せる時、彼はペルシア臣民としての納稅義務を承認し、且その義務を履行すべき旨を約束した。然し乍ら此事ありてより彼の策動は頓に活潑になつた。一九二四年夏にはバクティアリ諸部族並にカシガイ諸部族を煽動し、武器及び黄金の援助を約束して叛亂を起さしめんとした。かくて九月に入りて西南ペルシア一帯に、不穩の空氣が漲り初めた。十

月にはバクティアリ部族が遂に諸處に蜂起して叛亂を起すに至つた。

バクティアリ人はペルシアに於ける最も有力なる民族の一つであり、從來テーラン政府と親密なる關係に在つた。彼等のうちの有力なる諸族長は、或は宰相となり、或は閣員となりて帝國の政治に參與して來た。ムハムマッド・アリ皇帝の專制に對し、國民黨が起つて之と戦へる時、之を援けて勝利を得せしめたのは、實にバクティアリの豪族アサド家の力であつた。カザルは恐らくバクティアリ諸族をして、新しき「獨裁者」と戦はしめんとしたのであらう。而もアサド家の一族は、レザー・カンの護國運動の熱心なる協力者であり、其の當主は此年八月に組織せられたるレザー・カンの新内閣に入りて遞信大臣に就任して居た。それ故にバクティアリ諸族の鎮定には、アサド家が其任に當ることとなつた。

さてカザルの策動の背後には、イギリスの手があると信ぜられて居た。モハメラーとイギリスとの間に結ばれたる條約は周知のものなるが故に、兵をモハメラーに用ゐる者は、當然イギリスを敵とせねばならぬと考へられた。少くともカザル自身は、一旦緩急あれば必ずイギリスの武力的援助を受くべしと信じて居た。而も總て其等の顧慮は、毫もレザー・カンの決意を妨げなかつた。十一月六日、彼は敢然としてカザルを叛徒と宣告し、二萬二千の軍隊をクズイスタンに向つて進發せし

め、自らイスファハンを経てシラーズに赴いた。此勢に怖れて、バクティアリ諸族は殆ど戦はずして屈服した。カザル自身のアラビア軍は、遂に優勢なるレザー軍に對して、全く戦意を失つた。而して最も期待せられたるイギリスは、如何なる援助をも與へなかつた。萬策盡きたるカザルは、レザー・カンに打電して將來の忠誠を誓つた。彼は之に對して、電報による降服を受諾せずと答へ、シラーズよりペルシア灣頭ブシール港に出で、此處より砲艦パフラギ號に搭乘して西北に航し、十二月五日ナセリ港に到りて投錨した。戦慄せるモハメラー市民は、美々しく街頭を飾りて歓迎の意を表した。首長カザルは、翌十二月六日、其の諸子息及び叛旗を翻せるバクティアリ族長の一人を伴ひてレザー・カンの面前に至り、跪拜して無條件に降服した。一方彼の軍隊は、容易にクズイスタンを征服し、ペルシア帝國は茲に従前の國境線を回復した。而して彼は此の光榮ある遠征の歸途、イラクに赴いてシア回教徒の至聖の都カルバラに巡禮し、然る後に一九二五年一月、威風堂々としてテーランに凱旋した。市民は歡天喜地して彼を迎へた。彼の聲望は絶頂に達した。此の國民的英雄を見るために、市民は毎日群を成して彼の門前に集まり、その出入を根氣よく待ち構へた。而して彼の偉大なる體軀、凜乎たる容貌、嚴然たる態度は、市民の英雄崇拜心に十分なる満足を與へた。クズイスタン遠征及びカザル降服は、國民に深刻なる感激を與へ、且強大なる自信を鼓吹した。

かくて此年五月アストラバードのトルコマン族が、マザンダラン及びコラサンに侵入せる時は、意氣軒昂たるペルシア軍のために一擧撃退されて了つた。また之と相前後して、バクティアリ、カシガイ兩部族の徹底的檢閲を強行し、悉く其の武器を押收して叛亂の禍根を絶つた。武装解除に反抗せるカシガイ族の有力なる族長ソラテツダウレーは、捕へられて獄に投ぜられた。此の年の夏、レザー・カンは普く國內を巡視したが、到處、熱狂的なる歓迎を受けた。かくてペルシア統一の偉業が、此年の秋までにほぼ成就された。

四 レザー・パフラギ皇帝の即位

さてペルシアが浮沈の瀬戸際を彷徨しつつありし間に、皇帝アマッドは果して何を爲して居たか。此の短軀肥滿の快樂主義者は、世界戰の直後、ペルシア國民が名狀し難き戰禍に惱みぬいた上に、猖獗を極めたる流行性感冒に襲はれ、死屍途上に横はる慘狀を呈して居た一九一八年に、無法

にも穀物の買占めを行ひて價格を暴騰せしめ餓死線上に彷徨せる國民の懷より搾り上げた黄金を携へて、其年の夏、歐羅巴に豪華なる旅行を試み一九二〇年に歸國したが、國家の政務は棄てて顧みなかつた。一九二三年十一月に前述の如く皇帝は歐羅巴再遊の途に上つた。國內ではレザイ・カン



帝皇ドゥマフ

が軍を北方に進めてアゼルバイジャン鎮定に肝膽を砕きつつありし時、皇帝は歐羅巴美人と腕を組み、ドーゼル海岸を散歩して居た。レザイ・カンがクズイスタンを征討して、ペルシアの最も富裕なる國土を皇帝のために克服せる時、皇帝自身はニスやカヌで果てしなき歡樂に酔つて居た。國民は皆な彼を憎んだ。それにも拘らず此の狡猾なる青年は、レザイ・カンが汗血を濺ぎて成就せる功績を、己れのものとして享受せんと望んだ。彼は未曾有に統一せられたるペルシアに歸りて王者の榮華を味はんと欲したのである。そのために彼はテランのカジャル黨を動かし、密かに彼のために運動せしめた。彼は議員の或る者を買収し、議會をして彼の歸國を請願せしめんとした。此の提案は議會に於

て否決されたが、彼はそれにも懲りず一九二五年十月一日、首相レザイ・カンに對し、近く歸國の途に就くべしと通告した。此の通告に接したるレザイ・カンは、皇帝に向つて歸國を歓迎すべき旨を答へ、同時に全國に向つて此事を布告した。

レザイ・カンは、ペルシア共和國の大統領となることを斷念したが、決してペルシア帝國の皇帝となることを厭はなかつた。彼は一九二五年二月、即ちクズイスタン遠征より凱旋して幾くもなく、廣汎なる軍統帥權を議會より賦與せられ、ペルシア國內に於て最早何人も武力を以て彼に反抗し得ざらしめた。而して此年八月、ペルシアの北部並に東部を巡視して、民心の彼に歸せることを確實に知り得たので、歸來密かにカジャル王朝廢止の準備を進めて居た。宗教界は決して積極的に此事に賛成せぬであらうが、共和制に對する如き猛烈なる反抗を試みぬであらうことは確實であつた。かかる時に當つて前記の通告が到着したのである。

この通告はアフマッド皇帝の自ら掘れる墓穴であつた。皇帝歸國の報一たび傳へられるや、國民は勃然として憤慨した。カジャル王朝打倒運動は、先づアゼルバイジャンに於て最初の火の手を擧げ、やがて四方に燃え移つた。皇帝歸國阻止の請願がレザイ・カンの周圍に蝟集した。彼は時機の正に熟せるを見、十月二十八日、議會を召集してカジャル王朝廢止案を提出した。僅に五名の議員

が勇敢に此の議案に反対したが、若干の討議の後に大多数の賛成を以て可決せられ、十月三十一日次の如き宣言が發表された――

「國民の福祉のために、ペルシア國民議會は、カジャール王家の主權を廢止し、憲法及び其他の法律の限界内に於て、臨時統治權をレザー・カン・パフラギに委任す。恆久的なる政體の決定は、追つて組織會議によつて成さるべし」。

此の宣言は直ちに全國に通告された。即日レザー・カンは皇太子をグリスタン宮殿より逐ひ、カズギンを経てバグダードに送致した。皇太子は南佛ニースに悠遊せるアフマッド廢帝の許に辿り着き得るだけの旅費を與へられた外、何物をも持出すことを許されなかつた。

やがて組織會議が召集された。議事はレザー・カンの筋書通りに進められた。十二月十三日、組織會議はレザー・カンを、パフラギ家第一代君主として、ペルシア皇帝の位に即くべきことを決議し、翌十四日に解散した。十二月十五日、彼は憲法の遵守を宣誓し、翌十六日、全國に新皇帝の即位を布告した。國民はパフラギ家萬歳を高唱して、此の公布を歓迎した。王朝の更迭が、是くの如く平和裡に行はれたことは、恐らく東西の歴史に其例を見ないであらう。

戴冠式は翌一九二六年四月二十五日に舉行と決定された。其間の數箇月を、彼は主としてパフラ

ギ王家の典範を定めるため、及び戴冠式の大典準備のために費した。一九二六年二月二十五日、當時八歳の少年ムハムマッド・レザー・パフラギが皇太子に立てられた。皇太子の母は、他の一夫人与共に皇后と宣せられた。二人の皇后は、

全く同等の地位と待遇とを與へられる。

彼は即位式に際して、カジャール王家傳來の帝冠を戴くことを欲しなかつた。それ故に彼は、パフラギ王家の新しき帝冠



戴冠式に於けるパフラギ陛下

として、黄金と金剛石とを以て飾られたる豪華なる冠冕を造らせた。而して戴冠式に使用すべき玉座は、名高き孔雀玉座と定められた。此の玉座は、勇武無雙のナディール皇帝が、印度に遠征してモ

イガル帝國の首都デーリを陥れた時、分捕品として持ち歸れるモイガル王家の玉座である。かくて、一九二六年四月二十五日、恐らくナディル皇帝以來其比を見ざりし莊嚴なる戴冠式が、國民歡呼の裡に芽出度く行はれた。二十五年以前の一コサツク兵は、今や神を地上に代表する「諸王の王」^{シヤイ、シヤイ}となつた。而も此事は、決して僥倖に恵まれて贏ち得たるに非ず、實に自身の才幹と勳功によつて正當に獲得せる報酬である。

五 軍事並に財政の改革

レザイ皇帝の戴冠式直後ペルシアに遊べる米國記者ギンセント・シーアンは、雑誌「アジア」に數々の文章を發表したが、一九二七年之を「新ペルシア」と題する一卷に纏めて刊行した。彼は此書の第十章に於て、レザイ皇帝を袁世凱に比して「彼等の經歷は酷似し、彼等の成功も正に同一である」となし、實に下の如く論じて居る——「レザイと袁世凱との類似は、それだけで止りさうも

ない。蓋し武力によつて建設せられ、且武力によつて指導せらるる國家は、その根柢に於て不健全である。その行きつくところは、古代ローマ及び近代支那に見る如く、解體と亂離とである。袁世凱の没落と死滅、及び彼が支那に遺せる恐るべき混沌は、數年ならずしてペルシアに於ても繰返されるであらう」。

豫言も是程までに外れると一の愛嬌となる。レザイ皇帝を袁世凱に比することが、既に甚だしく當を失して居る。而してペルシアの其後の歴史は、完全に彼の豫言を裏切つて、ペルシアは嘗に混沌亂離に陥らざるのみならず、レザイ皇帝の號令の下に、健實に復興の一路を辿りて今日に及んで居る。レザイ皇帝は、ブロッケルマンが言へる如く、時代に遅ること百年なりしペルシアを、十年の間に追ひつかせた。

シーアンは、レザイ皇帝が武力を以てペルシアを建設し且統治することを非難して居るが、この非難もまた當を得て居ない。サー・ウィリアム・グレゴリー曰く「東洋に於ては、政治運動の主體は、常に軍人である。彼等のみが、能く其の目的を遂行すべき統一と勇氣とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも洩らし得ず、毛を剪られ肉にせらるる羊の如くである」と。吾等は此言の眞實なるをトルコに於て見、アラビアに於て見た。ペルシアもまた決して例外でない。さればこそレ

ザイ皇帝がテラン政局の舞臺に登場してこのかた、ペルシア統一並に統治の基礎條件として、最も其力を籠め來りし一事は、實に軍隊の強化であつた。吾等は先づ「テラン進軍」以前に於けるペルシアの軍備を一瞥するであらう。

今世紀の初めに於てペルシアの常備軍ともいふべきは、約六千の兵力より成る一コサック旅團にして、ロシア將校の指揮の下に置かれた。この軍隊は規則正しく俸給を支拂はれ、北部諸州に於ける騒亂及び反帝室運動鎮壓の任に當つた。テランにも若干の聯隊があつたが、經費缺乏のため次第に兵力を減じた。一九一一年にはスウェデン將校によつて憲兵隊が新に編成せられ、地方の治安維持に當つた。一九一五年には其の兵力は約八千を數へた。一九一六年に至りペルシア政府は英露兩國の強制により、コサック兵團を増員し、且南部ペルシアに於てイギリス將校の下に南波ライフル兵團の編成を許可した。此時より一九二〇年に至るまで、ペルシアの大部分は諸外國軍隊の占領下に置かれた。かくて一九二一年のクレーダ當時に於けるペルシア兵力は、實に下の如く貧弱微力なるものであつた。コサック師團、兵員一萬四千。テラン中央旅團、兵員二千。憲兵隊、兵員一萬二千。外に諸州總督の編成せる地方軍若干。

レザイ・カン陸相は、直ちに陸軍改造に着手し、一九二四年にペルシア陸軍を改編して五個軍團及び一獨立旅團となし、軍團司令部をそれぞれテラン、タブリス、ハマダン（後にケルマンシャー）、イスファハン（後にシラーズ）に置き、獨立旅團司令部をギランに置いた。然るに一將軍の下に強大なる部隊を置くの不利と危険とを感じ、一九二七年より再び改編を行ひ、現在に於ては之を三個軍團及び十個獨立旅團となし、其の兵力は十萬に達した。ペルシア陸軍は、固よりソビエト軍の侵略を防ぐに足らず、またはトルコ軍の攻撃にも堪へぬであらう。然し乍ら之をレザイ皇帝即位以前に比ぶれば、全く面目を一新し、その兵員に於て、並にその裝備に於て、ペルシア國家の統一を強化し、その治安を維持するに足るものとなつた。彼は此の充實せる武力を背景として、歩々ペルシアの政治的改革を斷行した。

サー・アーノルド・T・ウイソンはレザイ皇帝について下の如く言つて居る——「レザイ・カンは生れ乍らの軍人である。而も彼は幾くもなく政治家の技倆をも獲得した。……アッバス大帝以後の諸君主と異なり、彼は軍事的改革が、若し廣範圍に互る財政並に行政上の革新を伴ふに非ずば、竟に無益に終るべき事を熟知して居た」と。彼の批評は正しい。レザイ皇帝の第一關心事は軍隊であつたが、その改善充實の爲には、必然紊亂を極めたるペルシアの財政を再建せねばならなかつた。

一九二一年二月のクレーダありて幾くもなく、ペルシア政府は財政顧問を米國に求め、幾多の紆



テレーンに於ける米國財政顧問團
 (後列左より四人日米魯博士)

等の報告をも大藏省に提出しなかつた。關稅はベルギー人顧問の手に委ねられ、是亦全く大藏省か

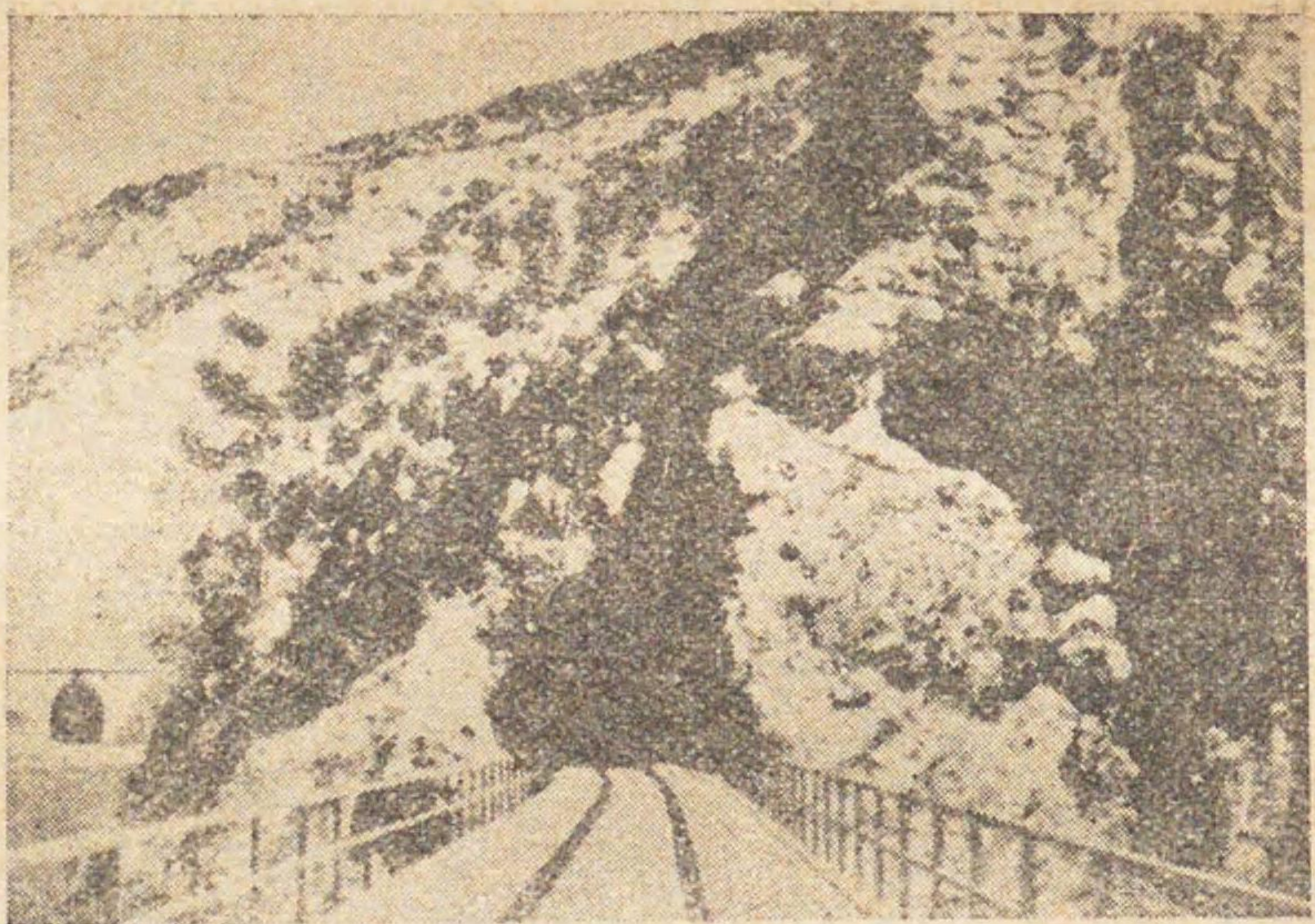
ら獨立して居た。
 是くの如き事情の下にペルシアに於て財政の統一を實現することは眞に至難の業であつた。各省は皆な従來の特權を固持し、その收支に就いて大藏省の監督を受けることを欲しなかつたので、財政刷新は必然、諸方面からの猛烈なる政治的反抗を豫期しなければならなかつた。而してミルスパウ博士が能く此の至難事を遂行しペルシア財政再建の礎を置き得たのは、彼が當時の陸相レザール・カンと提携し、その全幅の援助を得たからである。そのためにミルスパウ博士は、一英國人が指摘せる如く、恰もクローマー卿がエジプトに於て揮ふる力を、ペルシアに於て揮ふことを得た。彼が如何に偉大なる權力を揮へるか、下の如き二三の事實によつて容易に揣摩し得るであらう。まづペルシア政府の一切の官吏は、上は首相より下は小使に至るまで、彼の手より其の俸給を受けた。彼の許可なくしては、如何なる高官も國庫の金を使用することが出来なかつた。彼の署名なしには、如何なる小切手も通用しなかつた。

是くの如き權力は、賄賂授受や公金費消が日常茶飯事なりしペルシアに於て、財政改革を斷行するためには缺くべからざるものであり、之を與へられたがために着々目的を遂げて行つたのである。然し乍ら外國人又は外人團に、是くの如き非常の權力を行使せしむることは、やがてペルシア人の

自尊心を挑發し初めた。彼等の不平と反感とは次第に昂まつた。ミルスパウ博士の四年の任期が終らんとする頃より、彼の權力を制限すべしとの聲が四方より起り、政府もまた任期更新の條件として、従前の契約を改訂し、財政顧問は大藏大臣の監督下に置かるべきことを交渉した。而もミルスパウ博士は頑として之に應じなかつたので、交渉は遂に決裂し、彼及び彼以下の米人顧問團は、一九二七年、任期満了と共に大なる功績を残してペルシアを去つた。彼の著書「ペルシアに於ける米人の勞作」は、嘗に彼等の努力の跡を知り得るのみならず、ペルシア政界の表裏、ペルシア國民の心理、ペルシア國情の真相を知り得る點に於て、ペルシア研究者に取りて好個の資料である。

六 交通の改善

軍事的行動のために、政治的統一のために、並に經濟的發展のために、最も重要な條件の一つは、言ふまでもなく交通機關の整備である。カジャール王朝時代に於て、ペルシアの道路は荒れるが



線部北道鐵斷縱

(ルネントの間ドーバサバッアび及ック・ズルイフ)

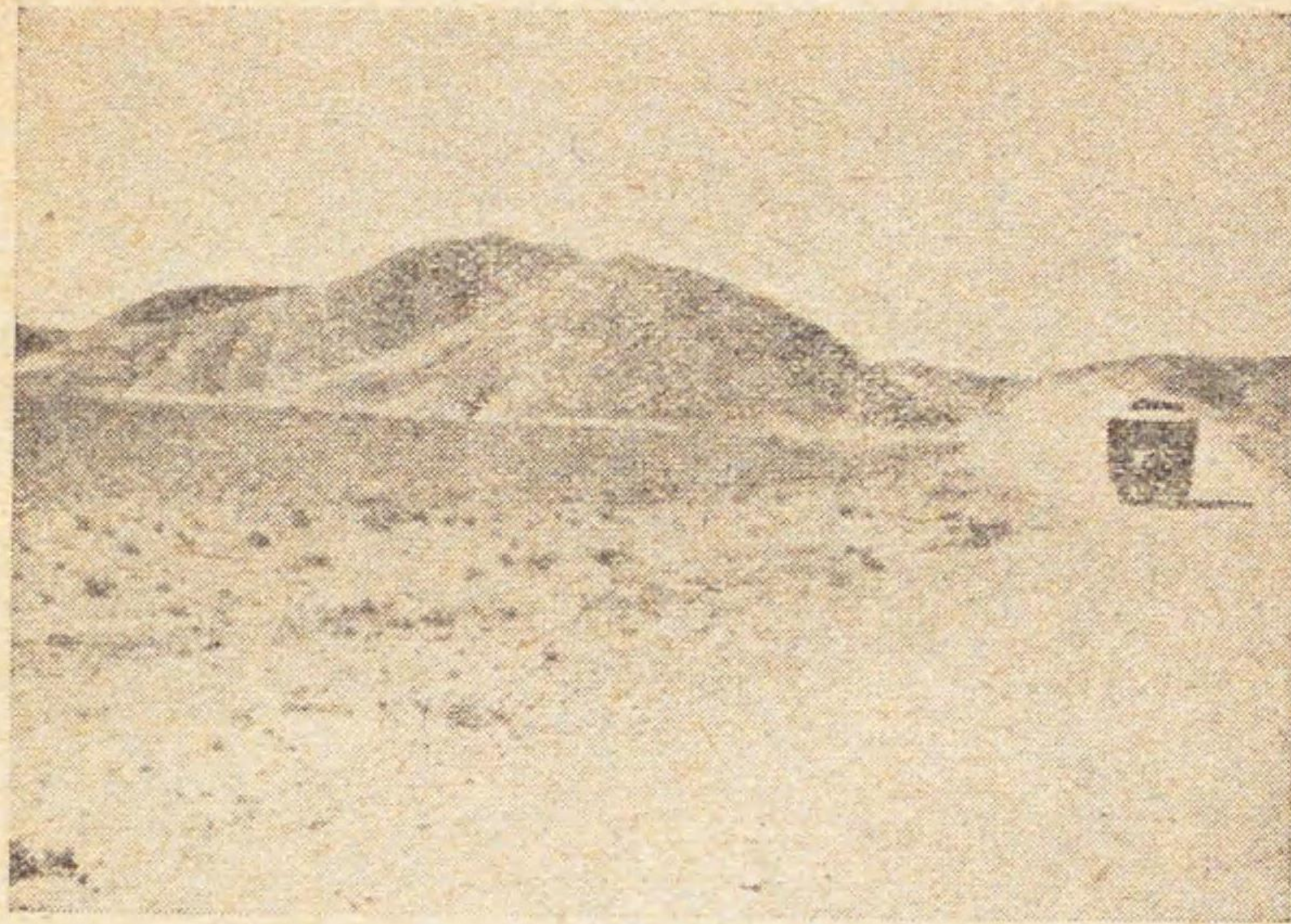
儘に任せられ、其上、追剝の出沒に委ねられた。世界戦前に於てペルシアには一臺の自動車もなく、馬車を通ずる路すら僅少であり、貨物の輸送は殆ど全部、駱駝・馬・驢馬によつた。然るに世界戦の末期に至り、イギリス軍隊が作戦上の必要より、西部ペルシア及び南部ペルシアの道路を新造又は改修し、初めて自動車交通を可能ならしめた。レザー・カン
の政權を握るに及び、一層力を道路網の建設に注ぎ、即位後五年にして、夙くも自動車を通ずる一等道路
二一九五籽(鋪装せるもの)、二等道路九五五六籽
(石及び小石を敷きたるもの)、三等道路二一九九
籽(鋪装せず、また季節によつて多少困難なれど、
一年を通じて自動車往復可能なるもの)、合計一三

九五〇籽に達し、今日に於ては既に二萬籽を超えて居る。其等の道路網のうち、レザー皇帝が其の

愛する故郷マザンダラン州に、數時間を以て到達し得るため、首府テーランよりカラジを經、デマ

ーワンド山脈を越えて裏海沿岸チャールスに至る自動車道路は、わけても見事なものである。この道路のうち、チャールス峠は積雪のために九月より五月まで通行不能となるので、皇帝は峠を貫くトンネルを開鑿せしめた。此等の新道路を馳驅する自動車數も、いまや二萬臺を超過し、旅客及び貨物の運轉を激増せしめた。

皇帝はまた數十年來の懸案なりしペルシア縦斷鐵道計畫を、萬難を排して實現した。彼がミルスパウ博士を援けて遂行せんとするペルシア財政革新の根本原則は、徹底せる節約及び外債排除の二つなりしが故に、鐵道建設に要する巨額の費用は、之を國內に求めねばならぬ。かくて彼は、一九二五年五月、その首相時代に、茶及び砂糖に新税を課して、之を鐵道建設費に充當するに決した。



車動自る走てつ向にムクを野荒

茶はペルシア人が酷愛する飲料にして、殆ど生活必需品とも言ひ得る。それ故に茶及び砂糖に課税することは、國民の最も喜ばざるところであつたが、その消費量が甚大なるだけ、有利なる財源でもあつた。彼は此の課税を斷行することによつて、毎年五千萬リアルの収入を豫想して居たが、實際は期待せるよりも遙に多く、一九三三、四年度の如きは、實に其の倍額即ち九千八百萬リアルに達した。而して此の財源によつて工事は着々進められた。

ペルシア縦貫鐵道は、裏海東南隅の一港バンドル・シャール（皇帝港の意味、舊名エンゼリ）より起り、斜に此國を貫きてペルシア灣西北隅の一港バンドル・シャール（皇太子港の意味、舊名コル・ムサ）に至るものにして、延長一四三五軒、地質を異にし、高度を異にし、氣候を異にする諸地方を走る。テーラン以北を北部線、以南を南部線と呼ぶ。北部線のうちバンドル・シャールよりシヤヒに至る一二七軒は、マザンダラン州の豊沃卑濕なる不健康地帯を西北に走り、シヤヒより南折してエルブルズ山脈の峻難を突破し、南面の山腹フィルズ・クフに達する。兩驛の間一三〇軒に過ぎざるに、トンネルの數六十八を算へ、鐵橋の數もまた夥しい。シヤヒの高度は僅に海拔一六四呎であるのに、ドゴル驛南のトンネルは海拔六九二九呎の高さに在るが故に、實に百軒の間に六七六五呎の差がある。従つて此間の鐵道は世界に於ける難工事の一に數へられ、沿線風光の絶佳もまた

世界屈指と稱へられる。線路はフィルズ・クフよりハブレールド谿谷の描ける如く美しき景色の間を降りてペルシア中央高原に出で、砂漠を西に走ること二〇四軒にしてテーランに達する。北部線の開通せるは一九三七年六月五日にして、全長四六一軒、首府より裏海沿岸までの所要時間は十五時間である。

バンドル・シャールプルより起る南部線は、ペルシア灣頭よりほぼ一直線にクズイスタンの曠野を北上すること約二四〇軒にして、ザグロス山麓サレハバードに達する。この曠野は曾て肥沃繁榮の地であつたが、河流の變向と運河の崩潰のために、殆ど砂漠化して了つた。サレハバードよりはアビ・デイス河及びアビ・ケザル河の狭き谿谷を辿りて、名だたるザグロス山脈の嶮難を超えるのであるが、其の最も嶮峻なる區域六〇軒の間には、百五十のトンネルを穿ち、多數の鐵橋を架けねばならなかつた。曾て此の地方を旅行せるラミントン卿は「あの戰慄すべき嶮路を通る鐵道が敷設されようとは、夢にだも想はなかつた」と述べて居る。線路は此の谿谷を出でて中央高原を東北に進み、サルタナバード及びクムを経てテーランに至る。高原は概ね不毛の砂漠であるが、處々に沃地ありて農村が點在する。かくて十年の日月と、約三千萬磅の巨費を以て、裏海とペルシア灣とが鐵道によつて結ばれ、一九三八年八月二十六日、芽出度く全線の開通を見た。

此の鐵道は決して經濟的に有利なものでない。當分のところ、其の収入は辛うじて運轉費と保線費とに充てるに足るに過ぎぬであらう。而も此の偉大なる事業の遂行は、覺醒せるペルシア國民精神の強烈なる表現であり、レザー皇帝の理想主義、高邁なる識見、及び不屈の勇氣によつて實現を見たるものであり、その國民に與へる感激は、深刻にして偉大である。そは現に軍事的並に政治的に深甚の意義を有するのみならず、國內産業の發展と資源の開發とに伴ひて、必然、經濟的價值を加へる。

かくてレザー皇帝即位後十五年にして、ペルシアの交通機關は飛躍的に發達し、往來は空前に安全になつた。一九三七年に此國を旅行せるドイツ人ワルター・ヒンツは「今日ペルシアを旅行する歐羅巴人は、ドイツの狀態に比ぶべき交通の絶對安全に驚く」と言つて居る。而して従前は追剝の出沒のために殆ど一個の冒險ともいふべかりしペルシア旅行を、是くの如く安全ならしめたるは、レザー皇帝が創設せる「護路兵團」の力による。全國の街道に、若干の距離を置いて、概ね小高き處に建てられ、庭園に圍まれ、屋上に綠白紅の金獅子旗を翻せる番所があり、一人の番所長と四名の護路兵が駐屯して居る。鮮藍色の制服制帽を着け、見る目に快感を與へる此等の護路兵は、正規軍の一部として陸軍大臣の配下に屬し、不斷に道路を警戒し、旅行者に保護と便宜とを與へて居る。

七 産業の奨励

皇帝が産業の發達に力を注げることは言ふまでもない。第一に農産物の増額を圖るために灌漑設備を急いだ。そのために傾に未墾地が開拓された。棉花栽培が盛んに奨励された。クズイスタンでは甘蔗栽培が始められた。裏海沿岸地方では、從來多額の米を産して居たが、今や米の外に煙草・茶・桑の栽培が奨励された。一九三四年までに、二百萬本の茶の苗木が農民に配布せられ、ラーヒジャンに茶研究所を設けて其の栽培を指導した。同時に政府は若干の農學校及び模範農場を開設して國民の農業知識の向上を圖つた。

開墾地の擴大は二重の利益を此國に與へつつある。一は言ふまでもなく農産物の増加であり、他は遊牧民の定着農民化である。蓋しペルシアの遊牧民は、不羈剽悍にして政府の命令に服せず、隨處に出沒して旅人を劫掠し、常に國內の治安を紊して來た。新政府が土地開墾を強行するや、彼等



下陸中ラフパ・ーザレ

面目なる牧畜業者は剽悍なる遊牧民の襲撃掠奪を免れ、僅少の牧者を以て多數の羊又は牛を牧し得

は其の牧野を侵さるることを怒り、激しく反抗を試みたが、政府は近代武器の力を以て着々之を掃蕩した。その歸順せるものは農耕に従ひ始めた。かくて曾ては群盜の巢窟なりし海東南のトルコメン高原に於てさへ、多くの定着農民を見るに至つた。加之、眞

るに至つた。

新開地に對する農業移民も極力奨励された。例へば一九三七年には南部ペルシアのブシル附近に於ける帝室所有地が、無償にて農業移民に分與された。而して移民には種子・農具及び必要の場合には資金をも貸與する。此の資金は皇帝が創設せしめたる農業銀行よりするものである。

「皇帝はまたペルシアを外國の經濟的羈絆より出来るだけ脱却せしむるため、農業の上層構築として、國內工業の發達に全力を注がしめた。當然の順序として、先づ日用品の製造を奨励した。そのための原料は國內に豊富なるに拘らず、從來は大部分を外國よりの輸入に仰いで居たのである。工業發達のために少からぬ貢獻ありしは、一九二五年テランに創設せられ、其後各地に分校を設けられたる「イラン・ドイツ工手學校」である。此等の學校卒業者及び外國留學より歸れる技師の努力によつて、工業は短期間に長足の發展を見、今日では大規模の工場數が五十を超えるに至つた。現在の九製糖工場が、既に國內需要の三分の一を充たして居る。之に次では紡績業が年々盛んになりつつある。而して帽子・燐寸・石鹼・香水・皮革・紙・硝子工場が續々創立された。此の國內工業の發展は、直ちに外國貿易に反映して、その激増を見た。

八 文化の啓發

國民の心身兩面に於ける向上のために拂はれたる努力も、また極めて眞剣であつた。一九三七年にはテランに五個の新病院が建てられ、且全國に二十以上の病院・助産院・無料診療所・診察所が新設された。同年テランの近郊シャーハバードに、ペルシア最初の肺結核療養所も建てられ、タブリスには精神病院が建てられた。種痘もまた強制的に施行されることとなつた。かくて僅々十數年間にペルシアの死亡率は、實に半減するに至つた。

また宗教階級の執拗なる反對に拘らず衣服の改良も實行せられ、いまやペルシア人の服裝は殆ど歐羅巴風となり、ターバンと長衣を着用する者は僅に回教教師だけとなつた。加之、婦人の被衣も遂に影を潜めるに至つた。而してペルシア皇帝は、ケマル・アタトゥルクと異なり、法律によつて一舉に之を斷行せず、徐ろに機運の熟するを待ち、巧妙なる模範によつて之を改めた。

一九三六年一月八日、レザー皇帝は女子師範學校の開校式に臨御した。其時、皇帝は皇后及び二皇女を同伴した。君主が婦人を伴ひて公けの儀式に臨むことさへペルシア史上に空前の出来事であるのに、皇后及び二皇女は、被衣なき洋装にて現はれたのである。而して學校では、文部大臣が同じく洋装せる夫人と共に皇帝一行を迎へた。皇帝は、女子が人口の數にも入れられざりし時代は既に過ぎ、いまやイランの婦人は、常に家庭に於て従前の女子よりも善き母とならねばならぬのみならず、社會に於ても一個の人間として本務に盡さねばならぬことを訓示した。

諸大臣や富豪たちが、此の破天荒の實例に倣つた。彼等は茶會又は晚餐會を催ほし、主人と主婦は自由に招客と歡談した。主婦が被衣を脱せることは言ふまでもない。かくて數月ならずして、テヘランの平民婦人も皆な被衣を棄てるに至つた。地方もまた首府に倣ひ初めた。シヤ回教の聖都クムに於てさへ、聖フアーティマ寺院の院長が、被衣を取れる夫人を伴へる從僧全部と共に、敬虔なる信者を引見した。かかる周到なる準備工作の後、時に被衣を着けて往來する婦人あれば、警官が訓戒を與へて之を取去らしめることとなつた。長き歴史を有する被衣は、是くして全く葬り去られた。

被衣は人格を無視せられたるペルシア婦人のシムボルであつた。それ故に之を除去することは、

取りも直さず婦人の人格を認めることである。一九三五年に先づ結婚法が發布せられ、女子の可婚年齢を十五歳以上と定め、次で一九三七年之を改正して女子の可婚年齢を滿十六歳以上、男子のそれを滿十八歳以上と定めた。此の結婚法によつて、結婚せんとする男女は互に他の健康證明を要求し得ることになつた。女子は財産分離を請求し、適當なる扶養及び待遇を請求する權利を與へられた。不當なる扶養又は虐待を受くる場合には、女子は離婚を要求し得ることとなつた。そは疑ひもなくペルシア女性史上に於ける劃期的出来事である。

従前は全く社會から隔離され、ハレムの中に幽閉されて居たペルシア婦人が、今や國家の一員として公の舞臺に働き得ることとなつた。一九三五年にはイラン婦人聯盟が結成され、皇女が其の名譽總裁となり、女子の心身鍛鍊を目的として活潑なる活動を開始した。そは講習會を開きて知識の普及を圖り、運動會を催して體育を奨励し、裁縫・手工及び育児法の講習を行ひ、其他、孤兒院を初め各種の社會施設を創立した。而して官廳又は銀行に於て女子を雇傭することは、今や何人も怪しまざる尋常事となつた。

教育の普及もまた目覺ましくある。例へば一九二二年には、ペルシア全國を通じて僅に六百十二の學校を算へるに過ぎなかつたが、一九三五年には既に五千三百三十九校に達し、今や一萬に垂ん

としてゐる。皇帝はペルシア歴史に於て初めて義務教育制度を布き、七歳より十三歳までの總ての兒童を就學せしむることとした。一九三五年以來は、男兒女兒の混合教育をも行はしめた。同年に卒業せる八八七四名の生徒中、二二五三名は實に女兒であつた。

一九三六年二月四日、ペルシア最初の綜合大學がテヘランに創立された。大學は醫學部・法學部・神學部・理學部・哲學部・工學部の六科より成り、一九二〇年に創立せられたる高等師範學校をも其の附屬とした。高等師範學校は教員養成と共に文部省官吏の養成を兼ねて居る。大學以外に各種の専門學校も設立せられた。而して政府は毎年百名の留學生を歐羅巴に派遣して居る。またペルシア固有の技術を修得する工藝學校が建てられ、傳統の藝術を傳承せしめんとして居る。其外に皇帝は一九三五年、ペルシア語の調査、その純化を目的として翰林院を建てた。役員は二十七名より成り、毎週一回會合して國語改良を議して居る。其他の多くの施設と同じく、是また恐らくトルコに倣へるものであらう。

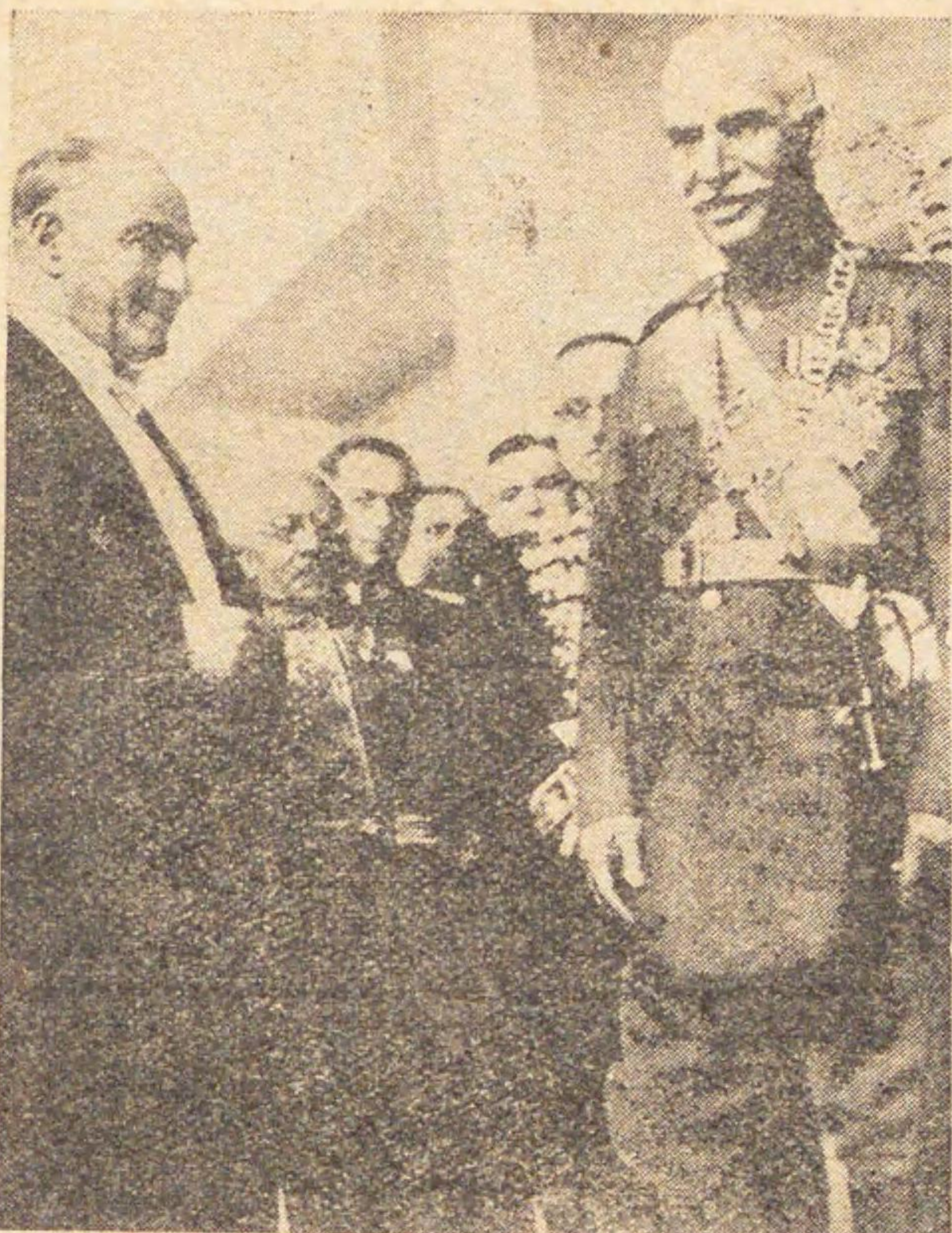
九 對外關係の調整

皇帝即位してより十五年、其間にペルシアは眞に驚嘆すべき政治的統一、經濟的發展、及び文化的向上を遂げた。而も此間に於て、ペルシアは三度、對外關係の緊張を見た。而して皇帝は三度も見事に之を解決した。

問題の第一は石油に關するイギリスとの衝突である。ペルシアの石油は、世界周知の如く、英波石油會社の掌裡に握られ、且この會社の最大の株主は英國海軍省である。一九一一、二年の產油額は僅に四萬四千疋弱であつたが、一九二六、七年には實に四百八十萬疋に達し、其後、新油田の發見に伴ひて產額は頗る激増し、今日に於ては千百萬疋を超過するに至つた。而して此の會社より納入する歩油金は、ペルシアの最も大なる財源の一つであつた。例へば一九三〇年度のペルシア政府歳出總額は約八百萬磅であるが、歩油金は百萬磅に達して居た。然るに一九三二年に至り、油價低

落が主なる原因となりて、歩油金は僅に三十萬磅に激減した。

それはペルシア財政に對する、深刻なる打撃であつたが、之を導火線として國民積年の排英感情が



帝皇—ザレの間訪御ヤシパ・ルマケ

は六十年であるので、満期までに尙ほ三十年を餘して居る。會社は此の晴天の霹靂に吃驚し且憤慨したが、ペルシア政府と折衝の結果、問題の解決を國際聯盟に委ねた。而して其の解決案に基き、

爆發し、イギリスの經濟的侵略を呪詛する聲が頓に昂まつた。皇帝は此の國民的感情の昂潮に乗じ、一九三二年十一月二十六日、突如、英波石油會社に對し、一九〇一年ダースイに許可せる石油利権一切を取消すべき旨を通告した。その理由とするところはダースイ契約當時、ペルシアには合法的政府なかりしを以て、該契約は無効なりといふに在つた。ダースイ契約による利権

一九三三年四月三十日、ペルシア政府と英波石油會社との間に新契約の締結を見るに至つた。それは

一、從來の契約面積五十萬方哩を、一九三八年まで二十五萬方哩、其後は十萬方哩とし、期限を六十箇年とすること

二、送油管敷設の獨占權を廢棄すること

三、販賣又は輸出石油に對し、一疋につき四志をペルシア政府に支拂ふこと

四、六十七萬一千磅を株主に配當せる殘餘の二割をペルシア政府に支拂ふこと

五、一般積立金を配當に使用する場合は、ペルシア政府に二割を納付すること

六、最初の十五箇年は毎年二十二萬五千磅、其後は三十萬磅を納稅すること

七、出來得る限りペルシア勞働者を雇傭すべきこと、等々

を定めたるものにして、問題はペルシアのために極めて有利に解決された。而して相手がイギリスなりしだけ、皇帝の斷乎たる處置は、深甚なる感激をペルシア國民に與へた。

第二は東方國境に關して紛糾を生じたが、一九三五年春に至り、バルチスタン並にアフガニスタンとの間に、境界協定が成立した。而して後者はトルコの調停によつて成れるものである。

第三は一層紛糾せる境界問題が、ティグリス・オイフラート兩河の合流してペルシア灣に注ぐシ

ヤツタルアラブ河に關して、イラク國との間に起つた。之は多年に互る懸案であり、兩國の關係は屢々緊張したが、一九三七年七月八日、所謂サダーバード協定の成立により、一舉その解決を見た。サダーバードは、永遠の雪を戴くデマールワンド山脈の盡くるところ、峻峻なるトウチャル山麓、テーランを去る北方約四里に位し、皇帝の避暑宮殿の所在地である。此の協定はペルシア、トルコ、イラク、アフガニスタン四國を堅固に結び、互に不侵略を約束せるものであり、此の協定のためにサダーバードは一朝にして世界に其名を知らるるに至つた。是より先き一九三三年十月、ペルシアは既にトルコ及びイラクと條約を結び、一九三五年十一月、アフガニスタンとも條約を結んだのであるが、いまやサダーバード協定によつて、新興四回教國の堅き握手を見たのである。わけてもトルコとペルシアとは、一は回教のスナ派を奉じ、他はシア派を奉じて、數百年に互る仇敵の有様であつたが、一九三三年波土條約締結の翌年、レザー皇帝は親らアンゴラに赴き、ケマル・アタチュルクを訪問して腹心を布いたので、積年の宿怨が茲に一掃された。

一〇 むすび

明治維新の場合と同じく、又はトルコ共和國建設の場合と同じく、ペルシア新帝國もまた、一面に於て急激なる文明開化政策を敢行すると共に、他面に於て、復古即ち國民精神の昂揚に全力を注いだ。

テーランの街頭からペルシア語以外の外國語が取り去られた。一九三五年には國號をイランと改めた。もと此國をペルシアと呼べるは、其の南部の大州の名ファルス即ちパルスより來れるものである。古代諸王朝は此地より起りしが故に、歐羅巴ではギリシア時代より此國をパルス又はペルシアと呼んで來た。

いまや皇帝は此國本來の正しき名前に復したのである。但し此國の公用語は、イラン語に非ずしてファルス語なるが故に、國語は依然としてペルシア語と呼ばれるであらう。またペルシア灣は、

フアルス州の岸を洗ふによつて爾く名づけられたものであり、イラン人自身が「フアルス灣」と呼び來れるものなるを以て、歴史的並に地理學的に見て、之をペルシア灣と呼び續けることが正しいであらう。

今やイラン帝國の隅々まで、レザー皇帝の恩威は限なく行はれて居る。國民は頽廢衰微のイランを、其の強烈なる意志と無限の精力とを以て、復興向上の一路を登らしめつつある君主に對して、滿腔の信頼と愛情とを抱くと共に、深刻なる畏怖の念を抱く。此點に就いてワルター・ヒンツはいみじくもレザー皇帝をアッバス大帝及びペトロ大帝に比べて居る。まことに彼の言葉の如く、此等の三偉人は、其の性格並に功業に於て、著しき類似を有する。

彼等は皆な、其の國家が衰亡に瀕し、又は興亡の岐路に立てる時に出現した。而して、其の全人格の威力と大なる犠牲とによつて、まづ其國を外敵の壓迫から解放した。アッバス大帝はトルコ及びウスベク人の、ペトロ大帝はスウェーデンの、レザー皇帝は英露兩國の脅威より、それぞれ其國を救つた。

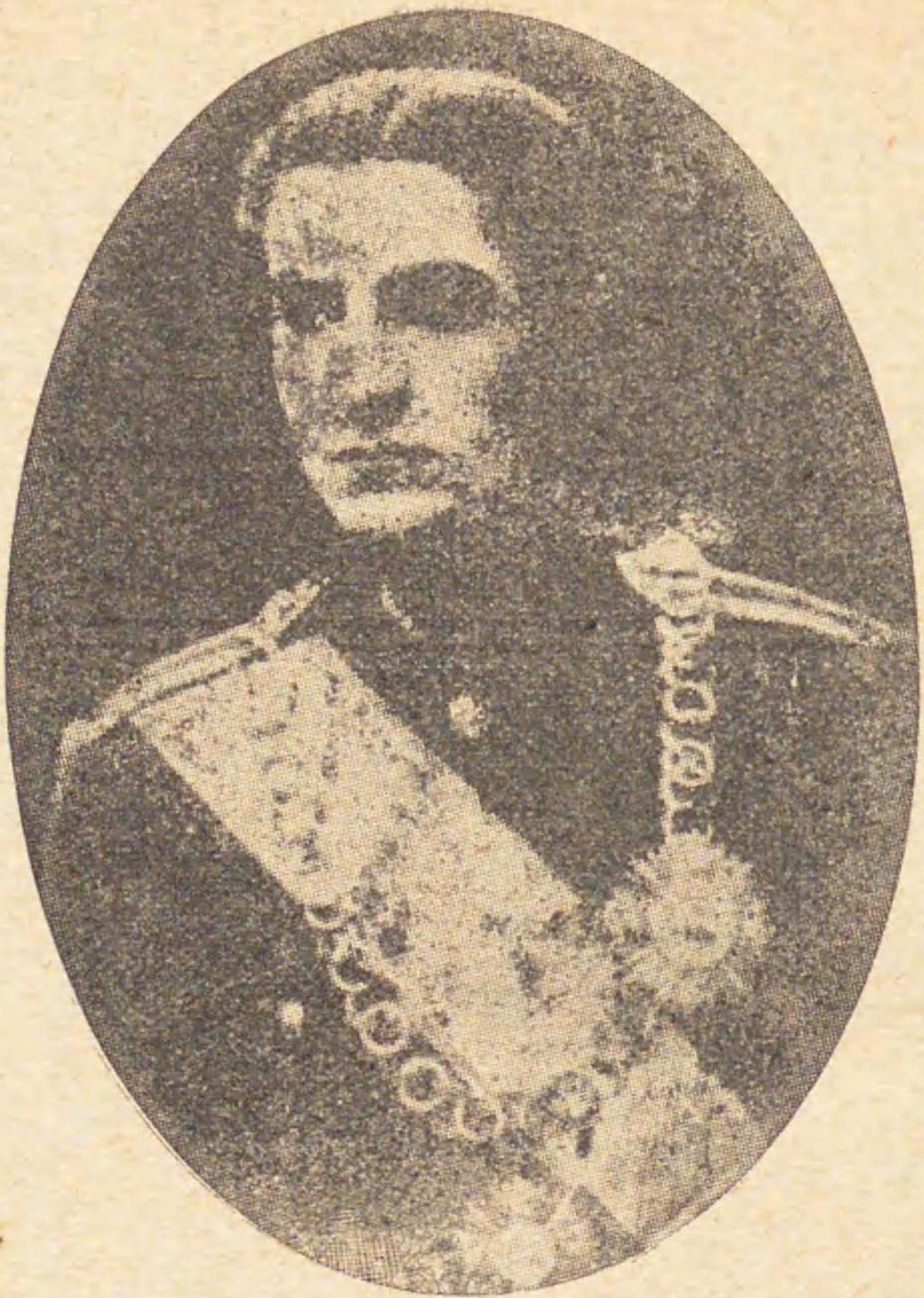
彼等はまた、一面外敵の脅威と戦ひ乍ら、他面國內に於て武斷政治による徹底的革新を行つた。而して三者とも外國の經濟的羈絆を脱するため、主力を工業の獎勵に注ぎ、且些かも躊躇すること

なく外國の長を採つた。其の經濟計畫の遂行に際し、全體の利害のために容赦なく個人の利害を犠牲にせることも、また彼等に共通して居る。彼等は皆な金剛の意志と、決斷力と、時代の動向に對

する洞察とを兼備して居る。彼等の精力は超人的であり、事に當つて疲るることを知らない。

例へばレザー皇帝は、毎朝五時に起床すると言はれる。彼は第一に官相、次に陸相、次に參謀總長、次に必要に應じて他の大臣と事を議する。皇帝に召されたる者は、晝夜を問はず十五分以内に伺候せねばならぬ。

かくして一刻を惜みて終日政務に勵精する。彼は斷じて怠慢を赦さない。一日彼は突如一兵營を訪ひ、その衛生状態の不良なるを見た。多くの士官及び軍醫が懲罰を受けた。微恙のために閱兵式に列せざりし故を以て、陸軍大臣が罷免



下殿ーザレ・ドゥマムハム子太皇

された。

皇帝の私生活に就いては多く知られて居ない。但し皇太子に關して極めて嚴格なる、同時に極めて慈愛深き父なることだけは確實である。

或年の夏、皇太子はチフスに罹り、一時危篤に陥つた。皇帝はサダーバードの避暑宮殿に滞在して居たが、皇太子の病褥に在りし數週間は、殆ど政務を見ずに憂悶した。時に皇太子は、士官學校に通ふ便宜のため、傳育官と共にグリスタン宮殿に住んでゐたのであるが、皇帝は毎朝テーランに自動車を驅り時としては朝六時から終日、皇太子の病床について居た。而も彼は決して皇太子を甘やかすことがなかつた。彼は皇太子の教育に全力を注ぎ、その訓練は甚だ嚴格である。學課は實に朝より夕に達し、半は軍事上並に體育上の鍛鍊に、半は君主として必要なる諸多の學問の修得に充てられる。即ち歴史・數學・科學・回教教義・ペルシア語・アラビア語・フランス語・イギリス語等である。

此事に關してジョン・ガンサーは、其著「亞細亞の内幕」の中で興味ある言をなして居る。彼曰く「彼の長子ムハムマッド・レザーは、君主の本務について注意深く訓練されて居る。彼は太子を酷愛し、その教育に至深の注意を拂ふ。そは東洋の他の君主と著しき對立を示す。例へばイラクの

ファイサル王や、エジプトのファウド王は、其の太子をして王位を繼がしめんと欲するに拘らず、二三の點に於て太子の教育を無慚にも閑却した。東洋の君主は、其の國家と家族とを念頭に置き乍ら、兩者が畢竟一つなることを忘れて居る。唯だレザーのみは例外である。彼は其の太子が、聽て當面すべき偉大なる仕事に對し、太子を訓練すべく、一切の方法を講じて居る」と。

イラン復興の礎は既に置かれた。吾等は是くして育て上げられたる皇太子が、他日其父を辱しめざる皇帝として、イランの興隆を實現せんことを禱るものである。

ガ
ン
デ
ィ
出
現

一 はしがき

傳ふらく、古へ印度に榮えたるクル王國に於て、先代の百王子と先々代の五王子とが、從兄弟の間柄であり乍ら、互に鎬を削りて權勢を争ひ、確執多年の後、遂に戰端を開くに至つた。時に毘紐天の權化クリシユナは、正義の五王子に存するを見、自ら第三王子アルジユナの軍師となりて、敵の不義を討たしめんとした。然るに、日頃勇武の譽高かりしアルジユナが、兩軍の旗鼓既に相見え、矢石將に飛ばんとする突嗟の際に、一念端なく同族相屠るの酸鼻に想到するや、選ばれて正義の戰士たる身なるに拘らず、善戰健闘のこころ頓に挫け、全く戰意を失ひ去つた。

此時彼がクリシユナに披瀝したる衷情は、非戰主義・平和主義・無抵抗主義・人類愛主義などと名づけられて、今日吾等の周圍に時めく思想である。アルジユナは言ふ——「殺氣立ちて對峙する同族を見て、わが四肢は崩れ、五體は慄へ、口は涸れ、髪は逆立つ。戦つて同族を殺して何の善を

か望まれよう？ 予は勝利を願はず、王位も歡樂も望まない。王位何ものぞ、歡樂何ものぞ、將又生命何ものぞ。予は之を得るために同族を殺さうと思はぬ。假令三界の主權を得ん爲なりとも、予は彼等を殺すことを欲しない。吾敵は、貪欲に心奪はれて、一族相鬪ふ罪惡を意識せずとも、予は其の深重なる罪業たることを知つた。同族を屠るは、正法を滅ぼすことである。正法滅びなば、非法、世を支配するに至るであらう。非法の支配は地獄である。予は武器を抛つて戰意を捨てる。假令吾敵が、武器なくまた抵抗を試みざる吾等を殺したとて、邪惡を犯すよりは可い！」と。言ひ放ちて彼は手にせる弓箭を投げ棄て、身を戰車の臺座に投じて嗟嘆した。

かかる感情に従ふことは、女子に寛恕すべくして、戰士に許容せらるべくもない。クリシュナは、立所に之を叱咤した——「アルジュナ！ 此の危急の時に際し、かかる悲觀が何處から汝に來たのか。そは已れを汚すもの、天國の門を鎖ざすもの、體面を失ふものである。沮喪してはならぬ！ そは汝に適はしくない。卑しむ可き怯心を去つて起て！」と。されどアルジュナは、尙ほ「憂ふ可からざるを憂ひて、聰明に似たる言をなせる」が故に、クリシュナは彼の問ふに任せ、螺鼓鳴り響く戰陣の間に人生の意義、天意の歸趣、自覺の原理を提示した。而して此の問答によつてアルジュナは見事に心裡の葛藤を一刀兩斷し去り、青天に白日を仰ぐが如く歡呼して曰く——「吾は安住せ

り、吾が疑惑は去れり、吾は主の言に従つて戰はん」と。かくて彼は、凜然たる意氣を鮮かにし、三軍に號令して惡戰苦鬪すること十有八日、屢々一生を九死に脱し、芽出度く勝利の凱歌を擧げた。印度の古典薄伽梵歌は、此のクリシュナとアルジュナの對話篇である。そは戰陣危急の間、端的に生死巖頭の問答なるが故に、動もすれば無用の長廣舌に失する印度諸典とは似もやらず、雄渾透徹なる思想を、最も簡潔に要約せる點に於て、既に萬綠叢中の紅一點である。宜なるかな印度復興の諸先覺をして、其魂に莊嚴なる國民的理想を樹立し、加ふるに萬難屈せざる氣魄を養はしめたる上に於て、與かつて最も力ありしもの、此の薄伽梵歌の右に出づるは無い。げに薄伽梵歌は、何時の世、如何なる國と言はず、正義に據つて不義を討たんとする總ての眞實なる戰士にとりて、珍重至極の聖典である。

さて此の希有の古典は、其の一節に於て下の如く説く——「假令劣機ならんとも、己れの本然を盡すは、巧に他の本然に倣ふに優る。己れの本然に死するは善い、他の本然に倣ふは畏れねばならぬ」と。(註一)こはカントによつて初めて明確なる論理を與へられたと言はれる「道德は模倣を許さず」との道德的原則を、逸早く確立せるものである。個人にもあれ、國民にもあれ、苟くも道義的生活を營むものに在りて、自己に忠にして斃れることは、却つて絶後に蘇る機縁となり得るが、他に追

して一時の功を擧ぐる如きは、所詮枯葉の秋風に捲かれて天上に舞ふと等しく、やがて浮ぶ瀬もなき死滅に終らざるを得ない。

このことは、印度復興を批判する上に、最も肝心なる公準の一である。否な獨り印度と言はず、總じて國民運動の成敗を卜すべき最後の準據は、實に此の珍重すべき原則でなければならぬ。孰れの國の國民運動にせよ、若し夫れが模倣的であり、輸入的であり、直譯的であるならば、假令一時の成功を贏得るとしても、其の成功は竟に成功せる自殺たるに終るであらう。之に反して若し其の運動が、深く國民本來の精神に根ざし、運動の各部門に於て、躍如たる國民性の發露を認め得るに於ては、晚かれ早かれ、其の壯心烈志を實現せずば止まぬ。

之を當面の印度に就て見るに、現代印度に復活せる印度精神の莊嚴に隨喜し、ギゾーカーナンドの門に入りて修行者となり、其名をニゾーディタと改めて印度の爲に獻身せる殊勝なる一英國女性は、今を距る三十年以前、其の深刻なる印度的自覺を、女子に適はしき感情の高潮を以て、既に下の如く述べて居る——
(註二)

I believe that the strength which spoke in the Vedas and Upanishads, in the making of religions and empires, in the learning of scholars, and the meditation of saints, is born

once more amongst us, and its name to-day is Nationality.

I believe that the present of India is deep-rooted in her past, and before her shines a glorious future.

O Nationality, come thou to me as joy or as sorrow, as honour or as shame ! Make me thine own !

私は信ずる、吠陀とウパニシャドに現れ、諸々の宗教と帝國との創造に現はれ、學者の研究、聖者の諦觀に現れた力が、再び吾等の間に復活した。而して今日は其力を國民精神と呼ぶ。

私は信ずる、印度の現在は、深く過去に根ざし、また印度の行手には、光榮ある未來が輝いて居る。

ああ印度國民精神よ、歡喜にてもあれ悲哀にてもあれ、榮譽にてもあれ恥辱にてもあれ、私に來格せよ！私を爾のものとなせよ！

最後の一節は、寧ろ不要の詠嘆であるが、それは婦女子の常として暫く勘辨せねばならぬ。其の根本に於て、まさしくニゾーディタは正しきものを把握して居る。印度に於ける國民運動が、果して是くの如き正しき自覺に據つて立てるものとすれば、實に吾等をして隨喜感嘆の外なからしむる

ものである。蓋し印度復興とは、往々にして沙汰せらるる如く、印度の近代化または西歐化を意味するものでは断じてない。張公酒を飲むも李公は酔はぬ。西歐に可なるもの、直ちに印度に可なりとするさへ、既に以ての外の周章狼狽である。如何に況んや西歐を泥酔せしめ、目も當てられぬ醜態を演じさせたる惡酒を將來して、之を印度に飲ませようとするなどは、思ひも寄らぬ荒涼の沙汰と言はねばならぬ。印度復興とは、印度に内在する昔ながらの生命が、芽出度き春に回り會ひ、新しき力を帯びて捲土重來することである。そは印度其者の「本然」の復活たるべくして、断じて他の「本然」の追従たることを許されない。日蓮既に説破すらく「法は必ず國を鑿みて弘む可し。彼の國に好かりし法なれば、此の國にも好かるべしとは思ふ可からず」と。宗教猶ほ且然り、社會組織・國家制度の如き、尙更のことなるは言ふ迄もない。復興印度の原則は、取りも直さず改造日本の原則なるが故に、吾等は特に此の一事を明確にして置かねばならぬ。

さて予に取りて印度復興は確實疑ふ可くもない。若し予の觀る所に大過なくば、ニゾーデイタの精神は、實に印度に於ける國民運動の精神なるが故に、其の據つて立つ所は正しくして強い。而して復興印度の行手を阻む金城鐵壁は、朝たに一つ夕べに一つ陥落しつつある。加ふるに臆て出現すべき新しき世界其者が、切に復興印度を要望しつつある。世界は、崇高雄渾なる文化の母たりし印

度精神が、再び現代に蘇り來り、今將に没落の路を急ぐ西歐文化に代るべき新世界文化の創造に、其の全力を傾倒せんことを翹望しつつある。

サー・ジョン・スウィーリ、其の名高き「英國膨脹論」に於て、既に夙く憂慮して曰く「若し印度に於て、微か乍らも共通なる國民的感情が起り初めるならば、假令積極的に外人を驅逐せんとの希望を抱かぬまでも、若し其の國土を保有する外人に助力することを恥辱と感ずるに至らば、殆ど其日から吾が印度帝國は無きものとなるであらう。吾等がイタリーに於て見たる如き國民運動が、萬一印度にも起るならば、英國はオーストリアほどの抵抗も能くせずして、直ちに其の勢力を失ふであらう」と。^(註三)げに此の先見は今や事實として現はれて來た。印度の獨立が、一年の後か十年の後か、或は三十年を要するかは、天のみ能く之を知る。吾等は唯だ其日の必ず來る可きことを信すれば足る。

予の是く言ふは、決して好む所に倣しての沙汰に非ず、従つて主觀的に判下せる獨合點の類ひでない。予の立言の根據を明かにすべく、予は先づ印度文明の種々相を探りて、印度精神の意義と價値とを尋ね、次いで現代印度覺醒の内面的徑路を辿り、進んで其の國民運動が、今や本質に於て紛れもなく印度的となれる事實を示し、是くして印度精神の復活、従つて印度復興の確實性を、徐ろ

に論證し行くであらう。

(註一) 薄伽梵歌三の十二。高楠博士は、予が自己の「本然」と譯せる Dharma を「本務」と譯し、アキニ・ハサント夫人また之を Duty と英譯して居る。さり乍ら予はアラビンダ・ゴーシユが之を Law of one's own being と英譯せるの最も適確なるを思ふ。かく譯してこそ、此の一節は初めて奕々たる神采を帯ぶ。

(註二) ニューデイトの本名は Margaret Noble. 掲ぐる所は一九〇九年週刊雜誌 Karmayogin に發表せる短文 A Daily Aspiration for the Nationalist 中の三節。〔註收め〕 Aurobindo Ghose, The Ideal of the Karmayogin の末尾に載せらる。

(註三) Course II, Lecture III, How we govern India (Macmillan's Colonial Library 版二二七頁)

二 印度精神の種々相

はしがきを終へて本論に入る。最初に着手せんとするは印度精神の闡明である。之に就て先づ想起せらるるは、ヘーゲルの「歴史哲學」に於ける印度論である。「歴史哲學」は、信屈なるヘーゲ

ルの諸著作中、妙に筆致雅潤であるが、わけても印度を敘する一段の如き、神韻縹緲として正に詩人の壘を摩して居る。彼は極めて繊細に、而も濃かなる詩趣を湛へて、女性にのみ認められる「此世ならぬ美しさ」を敘し來り敘し去れる後、此種の美しさは、其の最も掬すべき相すがたに於て、之を印度其者に見ると言ふ。まことにヘーゲルには珍らしき道草なれば、誰しも釣込まれて暫く彼と共に徘徊せず居られない。而も讀者が、心長閑に千紫萬紅を眺めんとすれば、何事ぞ天地を寒煙荒草裡に葬り去る下の言葉に會ふ——「此種の美は、仔細に之を眺め、且人格の尊嚴並に自由と云ふ概念に據つて點檢すれば、一見して痛く心惹かれしだけ、それだけ一切の點に於て竟に無價値なるを見出だすであらう」。(註一)かくてヘーゲルは、印度の世界觀を、全然抽象的なる汎神論、思想の汎神論に非ず空想のそれであるとした。

さて印度を是く觀るものは、獨りヘーゲルのみでない。印度研究はヘーゲル以後、眞に巨人の歩武を以て進歩せるに拘らず、印度の出世間主義、其の形而上的傾向に驚魂せる西歐學者は、恰も之を以て印度精神の全體なるかの如く判斷し、殆ど千篇一律に下の如く結論する——「現世を無明の長夜と遠離し、偏へに抽象的・形而上的・宗教的無限にのみ心奪はれ、非現實的にして非具體的なることが、實に印度文明の本質である」と。

印度文明の精華と云ふべき佛教を、存分に翫味し得る宿縁芽出度き吾等より觀れば、斯かる斷案が一面に偏局せる依怙の沙汰なることは、之を看取するに難くはない。固より印度文化の一切の方面に於て、豊かに宗教的精神が漲つて居ることは事實であり、印度思想の一部に、濃厚なる厭世的傾向あることも、また明白なる事實である。而も之を以て印度の全體なるかに考へることは、巨象の長大なる鼻に心奪はれ、象とは鼻のことなりと速了するに等しい。拒むべからざる事實は、印度文明が常に精神的方面に於てのみならず、知識的方面に於ても、將又實踐的方面に於ても、決して他國に劣らぬ偉大なる發達を遂げたこと云ふことである。

ただ茲に以ての外の顛倒是、印度人自身が一時西歐學者の掣ひそみに倣ひ、印度は宗教・哲學・乃至文學・藝術に於て世界に誇り得るものを有するも、其他は總て之を西歐に師事し模倣せねばならぬとしたことである。後節に述べんとする如く、第十九世紀の印度は、實に歐羅巴崇拜の時代であり、従つて歐羅巴模倣の時代であつたが、幸に今や一陽來復し、漸く獨自の明晰なる眼光を以て印度の過去を照顧し、西歐學者の見解が、甚しく自他を誤れることを知り得るに至つた。而して印度人を靡いて、如是の正見・正思惟に導きたる先覺の隨一は、アラビング・ゴーシユ其人を推さねばならぬ。

固より印度文明の本質が精神的であると云ふことは、明白疑ひを容れざるところである。印度の社會組織に於て、宗教階級が最高地位に置かれたことが、既に何よりの實證である。印度人は既に吠陀時代に於て逸早く萬象の背後に潛む一如を把握し、次び「*Aham Brahma smi* 我は梵なり」と云ふ金剛不壞の眞理を證悟した。正統印度の精神的要求は、實に此の眞理を現實の生活の上に實現すると云ふこと以外に無い。百花繚亂の印度哲學・印度宗教は、精緻なる論理と周到なる修行とによつて、如法に人間の理智と意志とを鍛鍊し、一切の不完全を脱却して自我を完成し、かくして梵に歸一するを究竟の目的とせる點に於て、悉く其の嚮ふ所を一にする。換言すれば印度の教法は、數ふるに遑もなかるべき諸多の法門に分れて居るとは言へ、總じて解脱を理想とせざるはない。

此等の法門は「ダルシャナ」と呼ばれる。ダルシャナとは「ドリシユ」即ち「見る」と云ふ語根より出でたるもの、人生觀・世界觀などと云ふ場合の「觀」に當る。而して其の「觀」には、肉眼を以て見ると、知性の眼を以て見ると、精神の眼を以て見るとの三がある。(註二)哲學・宗教のダルシャナは、第三の精神的直觀にして、それは存分に自我を鍛鍊することによつて開かれたる靈眼を以てしてのみ可能とされた。此の精神的文化の一面に於て、印度が特異の地位を世界史上に占むることは、學者の絮説し盡して既に餘蘊なきところである。

さり乍ら、之が印度精神の全體ではなく、また全體であり得る道理がない。富士の高根が裾野なくして雲表に聳ゆるものに非ざる如く、精神の百花また地上を離れて空しく爛漫たるものでない。印度が精神的直観を重んじたことは、印度人を没理性的なるかに誤解する原因の一つとなつて居る。而も世界に於て最も早く論理學と認識論との發達した國は印度であり、既に二千年の往昔に於て、實に三十二の學、六十四の術を學習して居た。まことに印度の理智は深刻にして且豊麗、綜合的にして且繁瑣、強大にして且繊細である。單に阿育王時代より回教時代に至る間に現はれたる無量の知的所産を一瞥するだけでも、最早や驚魂駭魄に値する。此等の資料は、漸く近年に至つて學者の研究する所となつたが、其の明かにされたものは、現に存在する文獻の眞に一部であり、且現存の文獻は曾て存在せるものの其のまた一部なることを忘れてならぬ。記憶によるか、又は損じ易き貝葉に書寫された其等の著作は、年月の経過と共に失せ去りしものも夥しい。それであるのに、現存の文獻だけを以てしてさへ、尙ほ且世界の孰れの國にも比儔を見ざる豊富なものである。而して其の研究の範圍は、認識論・論理學・文法・修辭學・言語學・天文學・數學・醫學・藥學・建築學・造船學より、惹いて一切の社會的科學・實踐的科學に及んで居る。即ち政治・經濟は言ふまでもなく、繪畫より舞踏に至る一切の藝術、生活に必要な一切の事項、例へば馬の飼育法、象の調御法

の如き、甚しきは性欲並に性交の方法に至るまで、悉く一個の學術として其の術語を有し、其の専門著述を有して居た。當時の印度精神は、一面には飽くを知らぬ好奇心、一切を知悉せずんば止まざらんとする欲求と、他面には綜合統一の精神、即ち知り得たる一切を整理し組織せんとする欲求に燃えて居た。(註三)

加ふるに印度は、異常なる實踐的精力、滾々不盡の創造力を有して居た。B・K・サルカル君が、見事に英譯し且解説せる「シニクラニーテイ」(註四)一卷を讀んだだけでも、社會的・政治的方面に於ける印度精神の活躍を窺ひ得て餘りある。まことに印度は息むことなく、疲れることなく、無限の豊富と多様とを以て、民國・帝國・宮殿・寺院・都市・城壘・乃至數々の團體、擧げ來れば際限もなかるべき現實の施設を創造して居る。印度人に實行の能力なしなどと言ふは、根も葉もなき放言である。

試みに西紀前第四紀の著書とせらるる「アルタ・シャーストラ」を繙けば、綱擧がり目張れる印度政府の行政組織の敘述がある。そは十八省に分れて居るが、一例として軍務省の組織を見るに、軍務局・海軍局・陸軍局・歩兵局・騎兵局・象軍局の六門に分れ、三十名の幹部より成る。孔雀王朝の創立者、印度のナポレオンと呼ばれるチャンドラグプタ大帝の常備軍は、歩兵六十萬、騎兵三

萬、象兵九千、戰車衆多と算せられて居る。是くの如き大軍を組織編制して國防外征の爲に用ひたる國民を、偏へに出世間的と謂ひ非實際的と謂ふは、根もなき誣言と言はねばならぬ。

または印度の羅馬とも云ふべきパータリプトラの都市計畫及び其の行政を見よ。市は幅二哩半、長さ九哩にして、圍繞するに城壁を以てし、城門六十四、壁上に聳ゆる大小の塔五百七十とあるを見ても、其の規模の雄大を知るに足る。市の三十長老、相會して市政の衝に當り、六局によつて事務を分掌した。一は市民の工藝を管轄する工藝局、二は入國する外人に關する事務を取扱ふ外事局、三は歳入其他の目的の爲に出生死亡を明かにし今日の戶籍事務を取扱ふ統計局、四は商業及び度量衡を管轄する商業局、五は製造業を管轄する工業局、六は稅務局である。法顯の南海寄歸傳を繙いても、印度の市制が甚だ發達して居たことを立證する幾多の記事がある。

またラダクムード・ムケルジ教授の周匝精到なる研究によつて、上代印度の海外發展の事實も、漸く明白になつて來た。^(註五)印度の船舶は、ユダア・エジプト・ローマの諸國と盛んに貿易を營み、印度洋並に多島海に幾多の植民地を經營し、商業的利益を收めると共に、印度の藝術と詩歌と信仰とを弘布した。ムケルジ教授に據れば、上代印度の造船術並に航海術は、意想外の發達を示し、能く三百乃至八百の船客を容るるに足る巨船を造り、其の最大なるは千五百の船客を收容し得たとのこ

とである。

西歐の批評家は、上代印度の彫刻、建築、乃至其他の藝術を論ずるに當り、常に其の過度に豐滿濃厚なるを指摘して居る。而して此の一點に於ては、枯淡閑寂を愛する一日本人として、予もまた同感至極である。さり乍ら此事が、缺點なるにせよ將又長所なるにせよ、是くの如く表現されることが、實に印度に漲れる豐滿なる生命、創造し享樂して足るを知らず倦むを知らざりし活力の、必然の成果として承認するの外はない。

次に印度精神の特徴として、決して見逃がしてならぬ一つがある。そは心靈的になると、純知的なると、實踐的なるを問はず、總じて其の觀念・思索・實行を、到り得る極端まで徹底させねば止まぬと云ふことである。印度精神は、一切の極端に於て、其の極端に於ける理法を求め、且之を實現すべき方法を求める。此の傾向は隨處に之を認めることが出来る。例示すれば印度の唯心論は徹底して唯心論であり、其の唯物論は徹底して唯物論である。其の思想には秋毫の妥協なく苟合ない。宗教的信仰に於ても、或者は自力の絶巔に上り、或者は他力の九地に下る。日常生活に於ては奢侈贅澤の限りを盡す者の傍に、樹下石上の無一物生活を樂しむ者がある。帝王の權力其の絶頂に達せる時、これと相並んで「王者よ、汝は民に奉仕する者に非ずして何ぞ」と嘯く者が居る。孤筇萬山

の崎嶇を渡り、歩々鮮血に染めて只管悟道に精進し、眼中また花鳥風月なき修行者ありと思へば、他方には五欲の歡樂を肆まにし、五官の經驗の有らん限りを嘗め盡す以外、他に人生あるを知らざる極端なる享樂主義者が、嬉々として酔ひ且歌つて居る。

而も茲に珍重至極とすべき一事は、印度精神が當初の潑刺たる力を失はざりし間は、此の極端に奔馳する特質さへも、印度精神の他の特徴なる綜合的傾向によつて、見事に牽制されて居たことである。これあるが爲に、其の旺盛なる享樂主義を以てしてさへ、今日の西歐に見るが如き社會的放縱に陥らざるを得た。印度精神は一面に於て一切の極端に走りながら、他面に於て、能く全體としての統一調和を破らしめざる統制の力を具へて居たのである。

吾等は、印度精神を點檢し來りて、其の深奥なる精神主義、其の透徹せる知力、其の旺盛なる實行力を指摘した。いま之を印度文明史の上に辿れば、精神の時代先づ現はれ、理智の時代之に次ぎ、更に實踐の時代に入つて居る。ヘーゲルが「夢見る女の美しさ」に譬へたる印度は、彼が主張せる如く印度の全體に非ず、唯だ第一期の精神時代に於ける印度である。此の時代の次に、ヘーゲルが知らざりし理智の時代が來た。そは精神的眞理の光に照らして、事物の奥に横はる理法を闡明せんとしたる時代であつた。而して其後を承けて、是くして把握せる理法を、現實生活の上に實現せん

と努めたる實踐の時代が來た。而して此の時代こそ印度文明の黄金時代であつた。此等の文化の種種相を、一層詳細に敘述することは、他日世に問ふことある可き亞細亞文明史に譲り、今は唯だ其の輪郭を彷彿せしむるだけに止めて、吾が論歩を進めねばならぬ。(註六)

さて青天一碧、赫灼たる烈日の下に、鬱密深沈として茂る梅檀林の如く、滾々不盡の生命と活力とを示したる印度精神も、其の第三期に於て繚亂たるサンスクリット文明を滿開せしめたる後、漸く萎微凋衰の域に入りかけたことは、是非もなき次第であつた。此の衰兆は、第一に現實生活に對する努力の減退、創造の歡喜に對する氣力の薄弱となりて現はれ、第二には自由なる知的探究の終焉、科學的・批判的精神の銷磨となりて現れた。而して第三には、印度の精神主義其ものが、最早昔日の昭々たる光輝を失ひ、寥々たる個人の魂の裡に、消えんとする炎を僅かに護持されるに過ぎなくなつた。印度が英吉利のために征服されたのは、實に是くの如き時である。

吾等は、序を以て茲に一言して置く。印度に歴史なしとは、多くの學者の沙汰する所である。若し謂ふところの歴史が、單に編年史と云ふ意味ならば、是く主張するは正しくある。なるほど古代印度の文獻は、埃及・支那乃至希臘・羅馬の古典の如く、王朝の隆替、戰爭の勝敗、總じて所謂歴史的事實の本末を、年代順に物語つて居ない。故に「印度には一のヘロドツスなく、一のツキデデ

スなく、また一のリギなく、一のタキツスなし」とするは必ずしも誤りでない。^(註七)さり乍ら、若し此事を以て、印度には國民生活の記録なかりしかに思ふならば、是れほど顛倒の沙汰はない。古代印度の文獻は、文化の進歩、人心の發達に關して、極めて明瞭なる、而も一貫連綿たる敘述を含んで居る點に於て、所謂「歴史」と銘打たれる他國の古典よりは、遙に意義あり價値ある歴史である。各々の時代に於ける文獻は、實に夫々の時代^{をれぞれ}に於ける印度生活の最も潑刺たる縮圖であり、物心兩界に於ける彼等の生活を、吾等の眼前に彷彿せしめるのである。それ故に、時代を逐うて印度古典を涉獵することは、直ちに四千年に亙る印度文明史を辿ることである。加ふるに古代印度の文獻は、石に刻まず紙に書かず、實に人間のこころ其者に銘記されて來た。吠陀は言ふも更なり、其他數々の聖典を記憶暗誦することが、古より今に至るまで人間無上の聖行と考へられ、一語一節を誤るさへ赦し難き大罪とせられて、師弟相承し父子相傳して昔ながらのまま今日に及び、恐らく今後も永久に然るであらう。

(註一) ヘーゲル「歴史哲學」レクナム版一九六一七頁。

(註二) 印度哲學者は、認識の方法を智原と名付け、現量・比量・聖言量の三とした。現量とは感官による知覺、比量とは論理的思惟による認識、聖言量とは聖者の體驗を通しての眞理把持、即ち精神的直觀である。

ある。

(註三) 印度人の科學的業績を知るべき無上の好著に Rajanendranath Sastri, The Positive Science of Ancient India がある。外にサルカル君の著書に Hindu Achievements in Exact Science ありと聞く。未だ讀むことを得なく。

(註四) Sacred Books of the Hindus 第十三卷としてアラン・ブームの Panini Office より出版せらる。またアルタ・シャーストラに基づいて上代印度の政治を敘述せるものに Kumar Narendranath Law. Studies in Ancient Hindu Polity がある。

(註五) Radhakumud Mukerjee, A History of the Indian Shipping and Maritime Activity。此書は全く前人未墾の野を拓いて驚喜驚嘆の外ならしむる收穫を擧げたるもの。古代印度史の權威 V. A. Smith 教授の如き、之に向つて最上級の讃辭を捧げて居る。

(註六) 印度文化全般に亙る著述としては、予の知る限りに於て今日尙ほ R. C. Dutt, A History of Civilisation in Ancient India の右に出づるは無い。但し種々相の一々に就ては幾多の良書がある。

(註七) E. J. Rapson Ancient India 一五一―一六頁。

三 國民運動の根據をなせる宗教的覺醒

事物の真相を洞察する眼光に於て、常に予を推服せしめたる佛人リシャル君が、四年に互る滯在の後に日本を去らんとする頃、一日予に向つて語るらく、日本の少年少女の顔が、此の四年の間に著しく歐化して來たと。而して其の理由の一つを、洋服の流行に歸して曰く「物心不二、衣裳を借りれば魂も自ら乗り移る。自分の魂が出來上つて居れば、移つて來た魂を追拂ふことも出來るが、生憎く子供には其力が無い」と。果して然りとすれば、英國に征服された印度が、嘗に政治的のみならず、精神的にも其の奴隷たらんとせることに何の不思議も無い。

蓋し英國が將來し、且強要せる西歐文化は、印度に取りて全く新しき異類の文化なりしが故に、物心兩界に互りて深甚なる刺戟となつた。その各方面に及ぼせる影響の一々を絮説することは、予の當面の問題でないが、茲に予の論歩を進める上に於て、特に擧示せねばならぬ影響の隨一は、之

によつて印度人の間に、西歐崇拜者・西歐模倣者の輩出したることである。而も此の傾向が、當時先覺者と呼ばれ、新人と呼ばれたる人々に於て最も顯著であり、且其の動機が、まさしく愛國の至情に出でたりしことは、最も注目し値する。彼等は、印度を英國治下の屈辱より脱せしめるためには、之を「近代化」する以外に別途なしと考へた。彼等は、印度に對するイギリス人の批判を、其儘に承認した。彼等は、中世印度の文明を以て、全く無價値なるものと信じ、悉く其の遺風を掃蕩せんとした。彼等は、流石に上代印度に對して高き誇負を感じ、且彼等の主張に有利なる例證を之から採らうとしたが、而も竟に其の至高精神を把握することなく、唯だ彼等の歐化せる理性に翻譯し得るものだけを珍重し、然らざるものは總じて惜氣なく之を拋棄した。彼等は英文學の形式・思想・精神を如實に輸入して新印度文學を建設しようとした。彼等は第十九世紀英國の民主主義を無上の政治的理想とし、西歐の社會思想並に社會制度を採用して、直ちに印度を改革せんとした。

此の印度歐化の傾向は、其の目撃者たるV・チロルが「印度不安」の中にいきいきと描き出して居る——「三十年以前、予の初めて印度に遊びし頃は、歐羅巴教育を受けたる印度青年は、少くとも知識的には忠誠の民たらんとして居た。彼は雙手を舉げて西洋の知識の木實このみを挽もぎ取つた。或者は英文學、殊に英詩の熱心なる研究者であつた。彼等はワーズワース詩社、ブラウニング詩社と云

ふやうなものを組織して居た。或者は英國史を學びてミルトン、バーク、又はジョン・スチュアート・ミルに政治的感激の泉を汲み、或者はカント、シュレーゲル、乃至はスペンサー、ダーキンの忠實なる學徒であつた。孰れにもせよ、教育ある印度青年の最大多數は、西歐思想を讚美し、假令、全然印度傳統の思想信仰を放棄し、又は心密かに之を侮蔑して居たのでは無かつたにしても、兎にかく印度在來の信仰習慣を改め、之を西歐の夫れと調和せしめようと苦心した。彼等は往々にして英人を悪んだが、而も心中之を尊敬し且崇拜した。彼等は英人が餘りに高慢なるを快しとしなかつたが、而も是れには當然なる理由があると思つて居た^(註一)。チロルの著書が出版されたのは一九一〇年であるから、茲に三十年前と云ふは、一八八〇年前後のことである。

予は更に印度人自身をして、當時に於ける英國崇拜の有様を物語らしめる——「英人は新聞を読む。そこで印度人も自分たちの新聞を始めた。英人は俱樂部や教會に集まる。そこで印度人も同様のものを始めた。英語を知る印度人は、得々として其の先生を眞似た。彼は其の服裝を採り、其の葉巻とパイプを採り、其の酒杯とピフテキを採つた。彼は印度生活を蔑^{あや}すみて、英吉利化されることを誇りとした。彼の眼には、一切の印度のものが悉く愚劣に映じた。印度人は未開人であり、其の宗教は迷信の巢窟である。彼等は不潔の民であり、其の風俗習慣は野卑である。彼等は狭量なる

偏見者にして、人間の本性は自由であると云ふことを知らない。かやうな調子で英人は一から十まで印度人の模範となつた。若し英人が教會に行つて聖書を読めば、彼等また之に倣つた。若し英人が自由思想を抱けば、彼等また之に倣つた。彼等は萬事英人の如くならんことを欲したのである^(註二)。

第十九世紀後半の印度に全盛を極めたる此の歐化運動は、予が繰返し述べたる如く、薄伽梵歌に戒むるところの、他の本然^{ズル}に追從せる邪道なりしことは、言ふ迄もない。唯だ其の動機は、兎にも角にも印度の復興を念とする愛國心に存し、且其の言行が、端なくも眞個の復興運動を激成する逆縁となりたる點より見れば、此の運動もまた決して無意義のものでなかつた。歴史の原則は、古今東西に共通である。予は今日吾國に於ける所謂新人の諸運動に對しても、全く同様の見解を抱くものである。

第一に此の運動は、久しく長夜の眠に墮ちて居た印度人の理性を呼び醒まして、自由なる知識的活動を復活させた。第二には既に醜酵力を失ひ盡したるかに見えし古代文化の裡に、新しき觀念の酵母を投じた。第三には印度の過去に對して、全く新しき見方を教へた。第四には彼等の苦々しき猿真似に憤激せる、保守的印度國粹主義者の出現を促した。總じて此等の結果が、相寄つて正しき印度覺醒の因縁となつたのである。

さて印度に於ける眞個の偉大なる運動は、常に新しき精神運動、わけても新しき宗教的活動を以て始められて來た。この事は、印度史を知る者の直ちに首肯する所である。現代印度の歴史に於ても、復興印度の曙光が、先づ宗教運動に現れたことは、決して怪しむに足らぬ。それ英國が印度に齎らせる西歐文明は、其の本質に於て主知的・物質的にして、寧ろ非宗教的である。然るにも拘らず、印度が之に刺戟せられて、先づ宗教的に覺醒せることは、最も鮮明に印度精神の特色を躍如たらしめるものである。

印度の新人諸君が、異常なる熱心と精力とを以て、印度の西歐化に努力せる時、彼等とは類を異にせる一群の先覺、其魂に昔ながらの印度精神を護持せる一群の先覺は、下の如く考へた——「印度は改造せられねばならぬ。印度はまさしく思想と制度の兩面に於て徹底せる革新を必要とする。而もそれは必ず精神的根據の上に立ち、且初めより宗教的動機並に形式を採らねばならぬ」と。是く考へることが、孰れの國如何なる世にも、普遍なる妥當性を有するや否やは、自ら別個の詮議を要するが、少くとも現代印度に於ては、此の思想並に運動が、印度自身の本然に據れる正しき復興運動の先驅をなした。ラーム・モハン・ロイのブラーマ教會、ダヤーナンダ・サラスワティのアーリヤ教會、ラーマクリシュナの傳道團、及び此等の運動に刺戟せられて印度教内に起れる信仰の復活、

總じて是等の宗教運動が、復興印度の魁をなせるものである。

親ら^{ミウカ}印度國民運動の最も主要なる役割を勤め、内外兩面の經緯を知悉せるラージパト・ライの如きも、明白に此等の宗教運動の意義を認めて、下の如く特筆して居る——「此の英吉利化の傾向に驚き、ラーム・モハン・ロイ其他若干の人々が、起つて此の風潮と戦はんと決心した。彼等は一時、効を擧げたが、大勢は如何ともすべくなかつた。されど此爲に、少なからぬベンガル人は、能く英化の風潮に抗し、其の英國的教育に拘らず、自己の宗教と自己の風習とを固守した。彼等は幾多の缺陷を印度の社會に認めただけれど、徒らに之を破壊し、又は西歐に模倣することを堅く拒んだ、かくてベンガル人の間に、國民的傾向を帯びたる一群の同志が現はれ出でた。ブラーマ教會の創設者ラーム・モハン・ロイは實に近代印度の最初の國家建設者であつた」と。^(註三)

而して此の印度精神の宗教的覺醒を、最も深刻鮮明に具現せるものは、ギゾーカーナンダ其人の出現であつたとせねばならぬ。高き英國的教育を受け、明朗鏡の如き頭腦と、玲瓏玉の如き人格とを以て、カルカッタの花なりし年若きギゾーカーナンダが、一念發起して求道聞法の人となり、眼に一丁字なき苦行者——異國思想の影だになく、専ら印度傳統の道術により、如法に修行して得道證悟せる聖者の前に、至心に合掌し跪拜して、良師に會ひ得たる宿縁の芽出度きに隨喜せる其姿こ

そ、げに印度復興を象徴せる希有の瑞兆でなければならぬ。ベンガル青年の魂に、初めて眞個の革命的情熱を鼓吹せるものは、既に述べたる西歐崇拜者の最も能辯なりし革命論に非ず、却つて直接



ダンナーカーゴギ

政治とは風馬牛なるかに見
えたるゴエーカーナダの
精神的感化であつた。

是と相並んで特筆せねば
ならぬのは、アーリヤ教會
の興隆である。ダヤーナン
ダ・サラスワティは、信仰
の解放、良心の自由、個人
的判斷の價値の確立、教會
制度の羈絆より個人を脱出

せしめたる諸點に於て、正に印度教のルーテルと呼ばれるべきものである。^(註四) 時は一八七九年十一月十七日、ベナレスに於ける印度教徒の大會に臨んで、いま印度に行はるる多神教は、自ら盲目にして

群盲を導かんとする婆羅門僧の迷信に基く虚偽の宗教なること、種姓制度は、分業の原則に基けるものにして、決して宗教的根據を有するものに非ざること、婦女子をして今日の如き境遇に置くは、印度本來の精神に背くこと、印度の宗教家は、理智と情操とに偏して、剛健尙武の鍛錬を重んぜざるが故に、人をして柔弱に流れしむることを指摘して、汝等吠陀に復る可しと獅子吼せる彼の颯爽たる英姿は、さながらにウォルムス會議に於けるルーテルのそれである。

彼は其の純一なる一神の信仰を以て、信者に求むるに嚴格秋霜の如き戒律を以てし、教團に鼓吹するに軍隊的精神を以てした。此の戰鬪的宗教が、印度青年に國民的自覺を鼓吹せるは言ふ迄も無い。印度政府の如きは、實にアーリヤ教會を以て、宗教の假面を被れる革命結社なるかの如く恐れたのである。吾等は、アーリヤ教會の面目を彷彿せしめるために、教會が如何にして其の信徒を養成しつつあるかを敘述せねばならぬ。そは吾等に向つて深刻なる暗示を與へずば止まない。

恒河の上流、ハルダワルを距る約五哩、遙かに萬古の雪を戴くヒマラヤ連峰を望む小高き丘の上に、一九〇二年、アーリヤ教會の長老ムンシ・ラームが建立せる學院^{グルダ}がある。そはラーム自ら院長となり、十三名の長老及び多數の講師と共に、約三百名の學生を薰陶する神聖なる道場である。學生は六歳より十歳までの少年を採り、不邪淫・隨順・清貧の三事を宣誓せしめ、悉く學寮に收めて

嚴に世間より遠離し、鍛錬陶冶實に滿十六箇年に及ぶ。其間、學生は婦女子と接見するを得ず、一族の父兄さへ一年二回學院を訪ひ長老同席の上で其の子弟を見ることを許されるだけである。講師は皆な諸大學を卒業せる敬虔篤學の士で、衣食を給せらるる以外何の報酬をも受けない。學生は徹底して共同の生活を營み、一切のもの皆な共有であり、父兄保護者よりの贈物に至るまで、悉く之を平等に分配する。特に力を體育に注ぎ、武道の鍛錬は前後十六年を通じて最も嚴格を極める。その滿十四歳に達するまでは、専ら印度傳統の哲學・宗教・文學を教授し、十五歳に達して初めて英語を教へ、西歐の科學を教授する。そは印度古來の修行の要諦と、西歐の新しき教育法とを兼ね行ふ當代無類の學校である。今やパンジャブには、此外にも同制度の數箇の學院が建立せられ、幾多の純一眞摯なる青年が、眞個印度の戰士たるべく薰陶されて居る。こは實に頼母しき新印度の基礎を築き上げつつあるものに非ずして何ぞ。此の一事、以て印度に於ける宗教復活の面目を躍如たらしめて餘りある。^(註五)

(註一) Valentine Chirol, Indian Unrest 二四頁。

(註二) Lajpat Rai, Young India 一一二—一三頁。

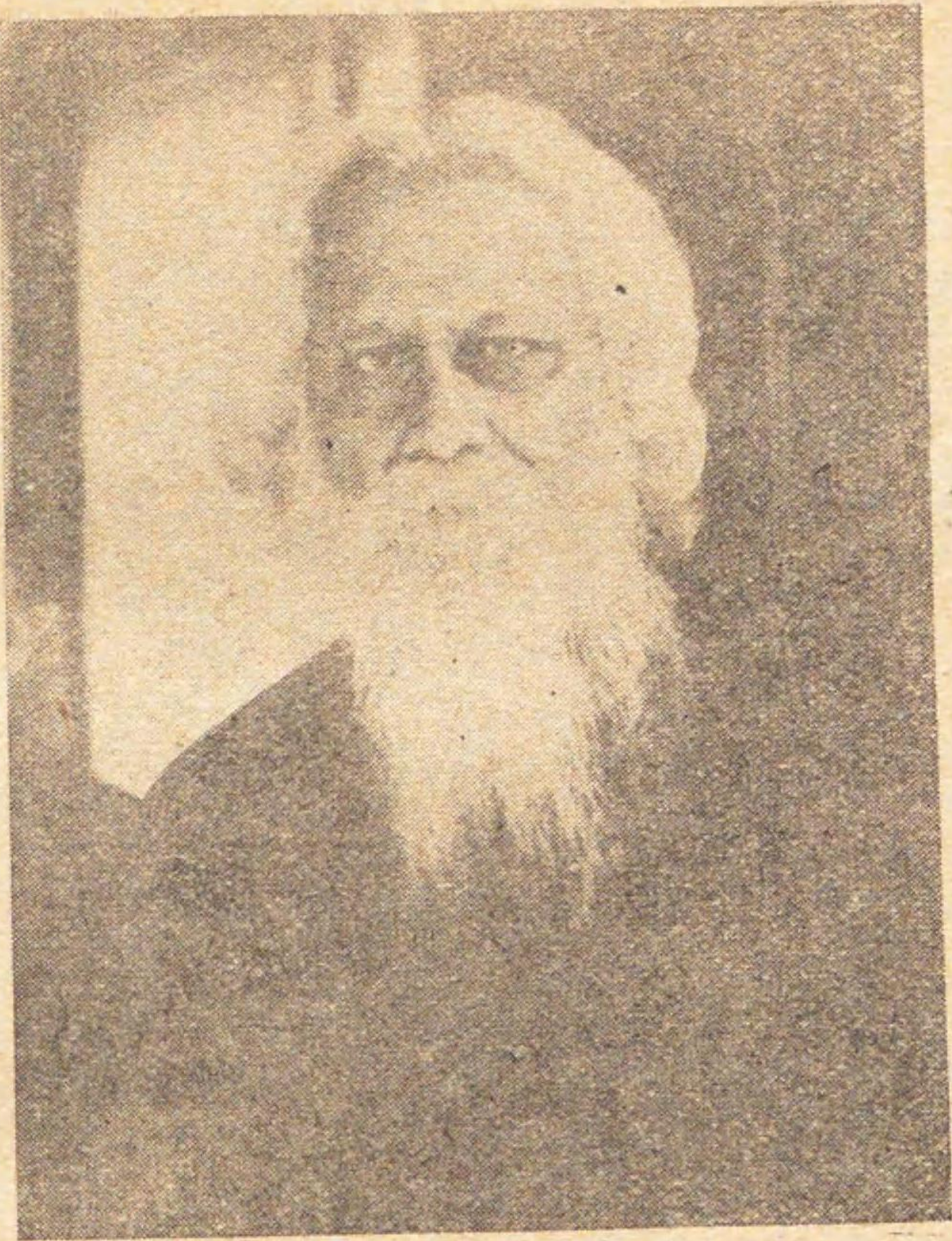
(註三) 同上 一一一頁。

(註四) D. N. Bannerjee, India's Nation Builders 七八頁。

(註五) アーリヤ教會に關してはライ氏の好著 The Arya Samaj がある。また前述チロルの「印度不安」一一四—一五頁、同じくバネルジ「印度建國者」中のダヤーナンダの傳記參照。

四 文藝哲學に現はれたる印度精神の復興

印度の場合に於て、宗教的覺醒は、常に國民精神の根本的覺醒を意味する。他國の民ならば「卿は何國人か」と訊ねる場合に、印度は即ち「卿は何教信者か」と問ふのに徴しても、容易に彼等の宗教的特性を看取し得よう。故に一度び印度が宗教的に覺醒し、而して其れが眞實の覺醒であるとすれば、やがて一切の精神的・知識的方面に於て、同じく覺醒を見ずには止まぬ道理である。果せるかな同様の瑞兆は、踵を接して先づ文學藝術の方面に現はれた。散文に於けるバンキム・チャンドラ・チャッテルジ、韻文に於けるラビントラ・ナート・タゴール、而して繪畫に於けるアベニン



ルーゴダ・トーナ・ラトンピラ

三〇四

ドラ・ナート・タゴールは、それぞれ各自の領域に於て、先づ陸離たる印度的光彩を放つた。而して絃上三者が、共にベンガル人であることは、印度人のうち、最も藝術的天分に豊かなるものは、ベンガル人なるが故に外ならぬ。

ベンガル文學が、西歐文學殊に文學の模倣を以て始まれることは、既に述べたるところである。而も國民的意識の擡頭するにつれ、ベンガル文學者の感化は拒むべくもないが、能く之を印度精神に同化し、立派に自己のものたらしめるに至つた。バンキムは、獨創的な識見と、豊麗無比の詞藻とを以て、印度文學の爲に新路を開拓せる第一人者であり、其の小説「歡喜殿」は、獨

立自治の思想を印度青年に鼓吹せる點に於て、維新志士に對する「日本外史」の役割を勤めた。それは英國が初めて印度侵略の根據を築きたる頃、之を掃蕩せんが爲に苦心慘愴せる印度青年志士の善戰健闘を叙したるもの、その結構に於てスコットの傳奇小説より暗示を得たと言はれて居る。印度の革命歌として愛誦せられ、彼等の熱血を湧かしめつつある「母國萬歳」の歌は、實に彼の作にか

Hail Motherland!

Bande Mataram!

Thou art my muse, Thyself my creed,

In thee my heart and soul;

And in my limbs the spirit Thou;

In mine Thou art strength!

Thyself heart's devotion;

Thine the images bodied forth

In temples one and all, Mother!

タゴールの詩に就ては、恐らく此處に絮説するの要を見ない。彼は其の昂潮せる神秘的感情、其の味識せる精神的經驗、其の透明清澄なる理智の閃きを、或は端的に、或は絢爛に、或は婉曲に歌ふ。而も總ての場合に於て、タゴールの詩には、ベンガル人の魂に特有なる天女の如き幽なる物優しさを湛へて居る。予は彼の詩を読む毎に、少くとも印度精神の一つの特色なる「微妙柔軟みづからんの相」を身に沁みて感得せざるを得ない。いま印度詩人としてのタゴールの片鱗を窺ふために、印度を讃頌せる彼の二詩を下に引用する——

○ Thou, who charmest all mankind!

○ Thou, whose hands are ever bright

With ray serene of pure sun-light!

Mother of fathers and mothers!

With the blue deep's waters thy feet ever washed,

Thy scarf of green ever waving in breeze,

Sky-kissed on high thine Himalayan brow,

Crowned white thy head with tiara of snows.

First in thy firmament appeared the dawn,

First rose soma-chants in the holy groves,

First were revealed in thy forest abodes

Wisdom and virtue and poesy's self.

Ever beneficent! glory to thee!

From thee flows food to countries far and wide;

Jahnavi and Jumna, streams of thy love;

Giver of sweet sacred milk, O Mother!

是くの如くにしてベンキム及びタゴールは、紛れもなく印度精神の復活を、文學の方面に於て立證せるものである。さり乍ら印度文學が、今後も彼等の跡を蹤むべきや否や、換言すれば彼等の開ける新路が、印度文學の進むべき最も正しき路なるや否やに就ては、幾多疑問の餘地を存する。アラビンド・ゴーシュの如きは、兩者を以て等しく唯だ黎明を告ぐる聲となし、將來の印度文學は、一層印度的なる相すがたをとる可きことを論じ、既にタゴールと別箇の路を歩み初めたるベンガル詩人の一團を擧げて居る。

例へばサトエンドラ・ナート・ダッタの如き、同じくベンガル詩人であり乍ら、タゴールとは全く別箇の路を進む随一人である。タゴールが印度の過去を詠嘆し、印度の未來に憧憬するに對して、ダッタは即ち印度の現實を直視して歌ふ。彼は印度の爲に憤り、嘆き、悲しむ。彼は其の同胞を叱咤し、激勵し、慰藉する。印度國民運動史の一切の出來事が、彼の詩魂に訴へた。例へば今を距る二十五年前、南阿に於ける印度移民問題初めて勃發し、ガンディ其の首領として起てる時、彼は印度國民の激悲を色讀して下の如く歌つた——

Ah, there, the guileless children of Ind,
Lured by the immigration-agents' snares,
Deprived of home and of self-respect robbed,
Beyond the seas abide in foreign lands.

また此等無辜の印度人を率ゐて戦へるガンディの英姿を描いて下の如く歌ふ——
Firm is their leader like the tree upright,
His soul flourishes by conquering grief;
On his own shoulders he bears the thunder,

Thus is their success guaranteed of course.

または一九〇四年、二十一歳を以て夭折したる天才詩人サティス・チャンドラ・ロイの詩は、青年印度の潑刺たる活力を歌へるもの。試みに下の一詩を読むも其の旺盛果敢の氣魄に満ちたること、ベンガル人の詩とは思へぬほどのものがある——

Whither haven't I been—in quest of man, real man,
Whose spirit is free to receive world's all impress,
Light and deep,—who feeling one with every atom,
Senseless, sentiment, can rise up to an infinite All!
Powerful-armed like that fisher-boy
Into life's ocean he throws himself down,
Abrupt, dives deep, and elbowing billows,
Heaves most gleefully with laughter again;
Confident-smiling he casts the net of work,
And “up the fish must” he muses, patient frow'd.

No doubt he is in love with terror deep!

How else can he smile amidst troubles of the sea?

Here is life, my friend, life, the joyous life!

さて繪畫に於けるアベンンドラ・ナート・タゴールは、文學及び詩に於けるバンキム及びタゴールよりも、一層明確に、印度藝術の進路を指示せるものである。彼の藝術は、飽く迄も精神の藝術である。その志すところは、印度精神の種々相を、線と色とによつて彷彿せしめんとするに在る。それは堅確に把握せる理想、明瞭に認識せる觀念、心ゆくばかり味へる神祕を、最も有効に表現せんとする努力である。彼及び彼の門下の繪畫が、予に與へる感じは、奈良朝時代の吾が佛像が與へる夫れと全く類を同じくする。而して彼が其の藝術を大成するに當り、日本畫の研究によつて最も多く啓發されたと云ふことは、興味ある事實と言はねばならぬ。(註一)

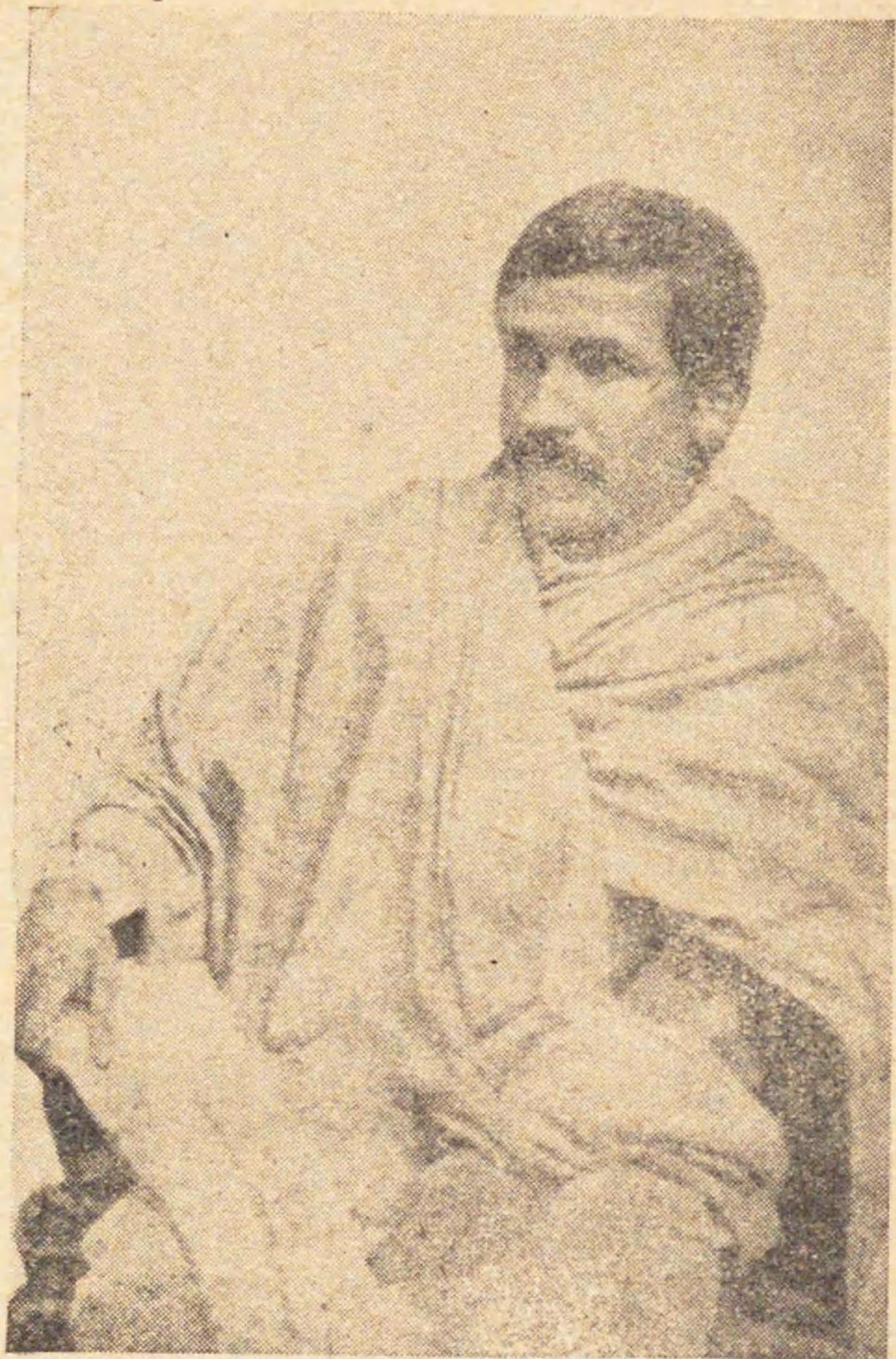
さて翻つて哲學的方面を見れば、アラビング・ゴシユの出現によつて、印度は初めて眞個の國民哲學者を得た。彼の哲學は、二十年に亙る歐羅巴留學の間に得たる西洋哲學の驚く可き蘊蓄と、豊富深刻なる自己の精神的經驗とを以て、薄伽梵歌の思想を闡明し開展して、周匝なる體系を與へたるもの。印度青年の魂に、正しき國民的自覺を喚起し、従つて革命的精神を奮興せしめたる點に

於て、彼の人格並に言論の如く深刻強大なりしはない。既に述べたる如く、宗教・文學・藝術の諸方面に於ける運動が、印度復興の拒み難き實證であり、且間接に國民主義的自覺を促がしたことは

事實である。また言論文章によつて印度の國民主義を力説したる幾多の思想家ありしことも事實である。さり乍ら、未だ曾て何人も吾がゴシユの如く直截明確に、而も深奥なる根據に立ちて、印度國民の自覺を促がしたものは無かつた。

彼は青年に向つて告げた

——「眞個の印度人にして初めて能く一切を信じ、一切を斷行し、一切を犠牲にし得る。故に諸君は先づ印度人とならねばならぬ。アーリヤの思想、アーリヤの鍛鍊、アーリヤの性格、アーリヤの



ユシーゴ・ダンピラナ

生命を再び擱得せよ、諸君の知識又は感情を以てに非ず、驀地に之を諸君の生命に擱得せよ」と。

彼はまた下の如く教へた——「第十九世紀の印度は、政治的解放、社會的改革、宗教的復興を求めた。而も此等の努力は、印度民族の精神と歴史と使命とを無視して、徒らに西歐の動機と方法とを學び、歐羅巴の教育、其の器械、其の制度を輸入しさへすれば、以て能く印度の爲に歐羅巴的なる繁榮と勢力と進歩とを招來し得ると考へた。それ故に一切の努力が竟に失敗に終つた。第二十世紀の印度は此の悲惨なる經驗に鑑み、英國化せる第十九世紀印度の目的と理想と方法とを悉く放擲せねばならぬ。印度は堅確に自己の路を歩みて、獨立せる生命と文化とを實現し、世界の面前に於て、歐羅巴が終に解決し得ざりし政治的・社會的・經濟的・道德的問題を解決せねばならぬ。此の目的を遂行する方法と力とは、之を印度自身の魂の衷に求めねばならぬ」と。

彼の教義は、カルマヨーガ——行ぎやうによる實現である。其の根本精神は、王陽明が「知は行の始、行は知の成るもの、聖學は唯是れ一個の工夫のみ」と唱へたと、全く同一轍である。この行の哲學は、寂靜無爲を以て高尚なるかに考へたる印度人に向つて、單なる思索冥想の無價値なること、行爲こそ思索の實現且完成なることを教へた。彼は森林に退く隱遁獨善の生活を斥け、人は一切の成敗を超越して神聖なる英雄的行動に終始すべきを説いた。而して此の思想は、多數の印度青年に

強烈なる實行的意志を鼓吹した。(註二)

アラビンダ・ゴシユは、印度精神の哲學的復活を示すもの、其の思想は復興印度の爲に哲學的基礎を完成せるものである。恰も此時に當り、外には日露戦争に現はれたる強烈なる日本精神が、深甚なる感激を印度人の魂に與へたるあり、内にはベンガル州兩分問題が多年鬱積せる印度人の不平に、俄然として爆發の導火となりたるありて、茲に印度復興は、明白に政治的——従つて革命的となつた。換言すれば印度精神の政治的覺醒が、所謂革命運動として現はれた。

(註一) 本章の敘述は月刊雜誌「アールヤ」一九一七年に連載されたアラビンダ・ゴシユの「印度に於ける新生命」と題する論文、同「近代評論」に現はれたる諸家の論文又は紹介、及びサルカル君の「亞細亞の未來主義」中の諸論文、殊に其の「青年印度文學の諸思潮」(同書三〇八—三二六頁)に負ふ。

(註二) アラビンダ・ゴシユの哲學を知る最上の著作は彼が月刊「アールヤ」に連載せる三大篇 *Essays on the Gita, Synthesis of Yoga, Life Divine* である。予が斷金の友ポール・リシャル君はゴシユと義兄弟の契あり、君のゴシユ論は載せて予の舊譯「第十一時」の中に在る。

五 印度に於ける政治的覺醒の行程

かくして印度精神の復活は、先づ宗教に現はれ、次に文學藝術に現はれ、更に哲學に現はれて、竟に政治に現はれた。故に其の運動は、之を表面に現はれたる相すがたに就て言へば、英國の印度統治を掃蕩せんとする政治運動に外ならぬけれど、奥深く其源を探り往けば、實に物心兩面に於て、完全に「イギリス」——従つて「歐羅巴」の支配を脱し、徹底して「印度」の獨立を求むる心に根ざして居ることを知るであらう。

さて排英運動は、其の初めて起るや憤怒・憎惡・復仇の感情の勃發であつた。此等の感情は、自身に於て決して嘉すべきものでない。而も天は其の意思の實現のために、一切の善巧方便を用ひ、能く惡を轉じて善とし、禍を轉じて福とする。此の場合に於ても、此等の激越なる感情ありてこそ、印度は其の政治的生活から、長年に亙る無爲苟安を驅逐し、代ふるに熱心と健闘とを以てするを得

た。そは少くも感情の方面に於て、政治に於ける英國勢力を葬り去つた。

前に述べた如く、アバニンドラ・ナート・タゴールの繪畫は、最も純一に印度精神を具現するものと言はれて居る。然るに



其のアバニンドラ・ナート・タゴールの繪畫に就てさへ、日本及びペルシアの影響が、假令亞細亞的であるとは言いひ乍ら、尙ほ且エギゾードイククなる調子を畫面に漂して居るとすれば、印度の政治運動が、其の擡頭の初めに於て、少くとも其の運動

方法が、範を西歐革命運動に採れることは、寧ろ尋常のことと言はねばならぬ。勇敢なる革命の諸戰士は、或は社會主義者の運動に倣ひ、或は虛無黨の嚇殺主義に學び、印度政府の水も漏らさぬ監

視、秋毫も假借せぬ彈壓の下に、嶮を踏み難を渡つて健闘した。

現代印度の政治運動を語るに當り、先づ述べねばならぬことは、チロルが「印度不安の父」と呼べるパール・ガンガ・ダル・テイラクの偉業である。彼はデッカン高原に據つて昔ながらの印度精神を護持せるチトパヴン婆羅門の保守主義に革命の情熱を鼓吹し、ボムベイ及びプーナを中心とし、其の主宰する兩新聞「マラタ」及び「ケサリ」に筆執り、愛國排英の思想を宣傳した。デッカンのマラタ族は、第十七世紀に出世して回教徒の征服に抗し、敵將アズファル汗を歎き殺して其軍を粉碎し、強大なるマラタ帝國の建國者となれるシヴジに對して、深甚なる崇拜の念を抱く。テイラクは彼等に國民的自覺を促し、其の尙武敢爲の氣象をいやが上に作興するために、一八九五年、シヴジの誕生日を期してライガル市に其の盛大なる紀念祭を行つた。一青年は此の紀念祭の式場に下の如き讃頌をシヴジの靈に捧げた――

吾等もまた果斷事に従ふことシヴジの如くならん

汝等劍と盾とを執れ、吾等は起つて敵の頭を斬ること算なからん

國の爲の戦ひに吾等は生命を賭す、而も敵の血を流さずば止まざらん

次に一婆羅門學者起つて下の如く述べた――「回教皇帝に其膝を屈してならぬと云ふ啓示を、僅

に九歳の時神から受けた此の偉人を、敢て殺人者と呼ぶは誰ぞ。偉大なる本務を果たすために小節を顧みざりし故を以て、吾がシヴジを非難するは誰ぞ。假令シヴジにして更に恐るべき五罪又は五十罪を犯したりとするも、予は吾主シヴジの聖像の前に、一度と言はず百度も跪拜する。一切の印度人、一切のマラタ人は、之を歡喜せねばならぬ。吾等は失へる獨立を回復すべく戦ふもの。而して此の羈絆を斷ち得るは、一致團結の力のみ之を能くする」。

テイラクの感化は、此等の言論によつて明白に知られるであらう。而して彼に動かされたる二青年は、翌々一八九七年、プーナの街頭に二英國官吏を射殺して革命の血祭に上げた。テイラクは此事に坐して囹圄の人となつたが幾くもなく放免された。此時に彼れの爲に百方奔走して其の放免を早からしめたる者は、實に近代東洋學者の隨一たるマクスミューラー博士其人であつた。何故に博士は此の激烈なる危険思想家の爲に骨折つたか。曰くテイラクは、其の寧日なき政治的運動の間に、實に印度精神の源泉たる吠陀の研究に没頭し、其の業績を發表せる兩著作の如き、正に世界學界の珍として驚嘆せらるる處のものであり、推しも推されもせぬ世界的サンスクリット學者と認められて、其の學問を以てマクスミューラー博士と親交ありしが故である。此の非尋常なる天才の活動によつて、西南印度に捲き起されし風雲は、一九〇五年のベンガル兩分問題の時に愈々物凄きものとな

り、東の方^{かた}ベンガルの革命青年と相呼應して、血腥き雨を降らすに至つた。

ベンガル青年は、固より此の「印度不安の父」の思想によつて動かされて居た。而も彼等をして一齊に奮興せしめたる革命のパン種は、既に述べたる如くアラビンド・ゴーシユの哲學であり、彼等の運動を實際に指導せる者は其弟バリンドラ・ゴーシユであつた。日露戦争に感激し、ベンガル分割問題に憤激せる青年は、バリンドラ・ゴーシユを盟主として、一九〇六年の頃、アヌシラン・サミテイと呼ぶ革命秘密結社を組織し、排英興印の爲に一身を捨てることを誓つた。彼等の覺悟のほどを知る爲に、予はアヌシラン・サミテイの入社誓言を下に掲げるであらう——

「某甲、梵天・父母・教師・長老及び生國の前に跪き、恭しく誓言す。某甲、サミテイの使命を成就せざる間は、父母・親族・種族・朋友・竈及び家より遠離すべし。某甲、サミテイの事業を奉行するに當つては、一切の犠牲を拂ふに躊躇せざる可し。某甲、若し此の誓言に忠ならず、また此の誓に背くことあらば、長へに梵天・カリ母神・及び大聖衆の極罰を蒙むらん、誓言仍而如件。」

彼等は母神カリに向つて、下の如き願文を讀誦した。決死の青年、密室に相會し聲を揃へて之を讀誦したる物凄き光景を想像せよ——

嗚呼、華鬘を捨てて鬪鬪を戴く母神チャムンダー！ 爾は何れに行きしぞ

嗚呼、大憤怒相の母神よ！ 爾を熱愛する兒等、爾を呼んで救を求む

悪鬼、爾の兒等を苛^{さいな}み、悪魔、印度を灰燼となせり、其の恐ろしき虐政をもて。

カンヂよ！ 來れ、來りて彼のチャンダとムンダを永劫に罰せよ！

ベンガル革命の父バリンドラ・ゴーシユは、一九〇八年に起りし名高きムザッファル事件に連坐して、終身の重刑に處せられ、印度獨立の暁まで、生きて天日を仰ぎ得ぬ身となつた。而も彼によつて創立せられたる結社は、彼の受難によつて却つて眞劍熱烈なるものとなり、多くの決死盡忠の青年を同志とし、不屈不撓の戰鬪的團體となつた。

次には尙武的宗教アーリヤ教會の發祥地パンジャブに於て、此の宗教が喚起したる國民的自覺を政治運動に導きたるラージパト・ライが居る。印度に於て最も實行的なるパンジャブ人が、ライ其他の先覺者によつて排英思想を鼓吹せられ、一九〇七年の初め、地租徵收の争が導火線となりて暴動の勃發となるや、ライは其の騒亂の首魁と目せられ、突如捕へられて緬甸に護送せられ、裁判を受けず従つて罪名も告げられずに牢獄に投ぜられた。然るにライは其の豊富なる學識、其の熱誠なる社會事業によつて、獨りパンジャブと言はず、實に、全印度の最も信頼好愛せる先覺の一人なりしが故に、彼に加へたる政府の處置は、全印度の激昂を招き、これが爲に頓に排英の氣運を煽るに

至つた。



イラ・トバジーラ

かくて國民運動は、マラタ、ベンガル、パンジャブの三中心から、次第に全印度に擴まつて行つた。其の運動の方法は、西歐に於ける革命運動のそれと全く同一であり、暗殺をもつて威嚇し、言論文章によつて煽動し、軍隊に宣傳して其の叛亂を使喚し、かくして贏ち得たる力を糾合し、機運の際會を待つて事を擧げんと企てて居たのである。

世界戰の勃發は、彼等に取りて眞に千載一遇の好機であつた。かくて彼等は米國に在りし同志ハル・ダヤルの下に組織せられたる革命團と遙に策應し、軍隊を味方として多年の宿願を成就すべく、

苦心慘愴を極めたりしに拘らず、ラホール陰謀乃至ベナレスの陰謀、皆な中道にして發覺し、遂に事を成すに至らずして止んだ。さり乍ら之を以て彼等の運動が全然失敗なりしかに考ふるは皮相の見である。此等の悲劇ありしが故に、排英の精神、革命の熱情は、實に非常なる速度を以て昂まり且弘まつた。

而して此事は、他面に於ては英國政府をして頗に印度の形勢に戒心せしめ、ローラット以下五名の委員を任命して、革命運動の真相を精細に調査し、且之を最も有効に取締るべき法律を立案すべきことを命じた。彼等はカルカッタ及びラホールに於て、必死の努力を以て調査に従事した。而して事態の眞に容易ならざるを知了した。故に彼等は、臨むに峻嚴秋霜の如き法律を以てするに非ざれば、印度の將來は到底平安を期し難しと認め、茲に名高きローラット法案を起草し、一九一八年七月、詳細なる報告を發表するに至つた。

ローラット法案は、印度政府が會て戰時非常法として發布し、戰爭終結と共に必ず撤廢すべしと約束せる印度國防條例を、叛亂條令の名稱を以て永久的のものたらしめ、官憲に與ふるに、苟くも英領印度に於て、安寧秩序を害する危険ありと認むる者は、其の何人たるを問はず、また裁判を経ることなく、直ちに之を逮捕・監禁又は投獄するの權力を以てするものである。此の法案は固より

印度人を激昂せしめずば止まなかつた。その帝國立法會議に上程せらるるや、心ある印度人は、悉く起つて反對運動を開始した。

此時パンジャブの最も繁榮なる町の一つにして、スイク教の聖都なるアマリツツアルに於て、市民の示威運動と軍隊との衝突を見、ダイヤー將軍の命令の下に發射せられたる機關銃によつて、僅かに十五分の間に、五百の市民殺され、二千の市民負傷した。此のアマリツツアル事件と呼ばれる英國の殘虐が、印度の全民を悲激せしめたことは言ふ迄もない。

形勢是くの如き時に、更に油を排英の熱火に注げるものは、實に聯合國の對土條約である。英國首相ロイド・ジョージは、初め印度に於て回教兵士を徵募するに當り、戦争が如何に終結するにせよ、必ず土耳其の回教宗主權を保全すべきことを、世界の面前に於て、印度七千萬の回教徒に約束した。然るに一九一九年のセーヴル條約は、明白にロイド・ジョージ前年の約を破りしものである。此の惡むべき不信は、從來寧ろ親英的なりし回教徒を驅りて、俄然排英運動を開始せしむるに至つた。回印兩教徒は、英國の陰險なる政策によつて、常に反目し確執し來れるもの。兩教の先覺、夙に之を憂ひ、屢々之が和合に努力したるも成らず、世界戦以來やや協力の傾向を助成し得たりしも、十分には思はしくなかつたのが、此事の爲に積年の争ひ一朝にして和らぎ、兩教徒は茲に初めて提

携して排英運動に當ることとなつた。こは印度を念とする者の非常なる重大事として慶賀せねばならぬところである。

世界戦を轉期として、印度の國民運動は、前後全く其の面目を異にする。印度革命の諸先覺者は、概ねラホール及びベナレス事件に連坐して或は刑死し、或は囹圄の人となり、或は國外に亡命した。而して其等の燦然たる星が姿を隠した時、日輪の如く印度國民運動の上に輝き初めたのが、取りも直さずモハンダース・カラムチャンド・ガンディ其人である。ローラット法案反對運動以來、其の中心指導者として、従前の諸先覺の功業を紹ぎ、而も全く別箇の方法を以て英國と戦ひを初めたる者はガンディである。予は次章に於てガンディ出現の意義を探るであらう。

六 ガンディ出現の政治的意義

印度に於ける革命運動が、復活せる印度精神の政治的發現である限り、自餘の方面に於ける復興

運動が然る如く、やがては西歐的色彩を離脱し、徹底して印度的となるべき筈のものであつた。若し然らずとすれば、彼等の執れる西歐革命主義は、一層強力なる英國の西歐權力主義の前に、所詮



兜を脱がなければならぬ。而も予が上來敘述したりし如く、印度の政治的覺醒は、深く而して堅く印度精神の根本的覺醒と相結ぶが故に、決して長く西歐的たることを許さるべきものでなかつた。果たせるかな此の論理は、ガンデイの出現によつて事實となつた。

ガンデイは往々にして「印度のトルストイ」と呼ばれ、米國の宗教家J・H・ホームズ博士の如き、彼を以て再臨せる基督と讃へて居る。さり乍ら予の觀る所に誤りなくば、ガンデイの偉大は端的に政治家としての偉大である。予は彼の哲學に於て毫も新しきも

のを見出ださない。彼の文章は、直截平明にして不要の舞文を事とする印度人の間に在りて、まさしく希有の異彩であるとは言へ、其の包むところのものは印度傳統の思想に外ならぬ。此點に於て彼は到底アラビング・ゴーシユの周匝雄渾に及ぶべくも無い。

彼の徹底せる禁欲簡易の生活は、歐米人の最も驚嘆するところであるが、印度に於ては決して珍とするに足らぬ。一切の物欲を斥け、樹下石上の生活に甘んずるは、常に印度苦行者の間に隨處これを見るのみならず、思想に於ては極端なる西歐崇拜、實行に於て徹底せる叛亂主義を鼓吹せる革命家ハル・ダヤルさへ、其の生活の禁欲的なる點に於ては、殆どガンデイと擇ぶところなかつた。彼は社會學の講師として、米國スタンフォード大學に教鞭を執つて居た頃でさへ、カラーもネクタイも着けず、蹠足のままで大學に出入して居た。而して米國に移住せる貧困なる印度勞働者と生活を共にして居た。それ故に、生活の簡易純一なることが、決してガンデイを印度に重からしめる主要の條件と思つてはならぬ。

唯だ夫れガンデイの偉大は其の組織統一の力に在る。ガンデイ一度び實際運動の指導者として印度民衆に臨む時、彼の一言一行は悉く嚴淨の光を放ち、能く老幼賢愚の衆生を化導すること、恰も龍の慶雲を興して一切に雨ふらすが如くなるを見る。此の一點に於て現代印度に彼と比肩すべき何

人も無い。

政治とは、打算と權謀とを以て、權力を爭奪し翫弄することでない。そは宗教が提示する人間の本體を發揮し、道德が教へる人間の本務を完うするために、最も適切有効なる生活様式を創造して行くことである。ガンディ自ら「予は政治家の面を被る宗教家なり」と言つて居るが、予は彼を以て「政治家として現はれたる印度精神」と呼ぶの一層剝切なるを信ずる。彼の眞理護持運動は、英國の印度統治が、印度に於ける萬惡の本源なることを指摘し、絶對に之と手を絶つべく、民衆を指導して印度政府に宣戦せることによつて、明確紛ふべくもなき政治運動となり、茲に從來の倫理運動乃至宗教運動とは、全く別箇の意義を現じ來り、かくして最も廣汎且深刻なる政治的覺醒を、印度人の魂に喚起したのである。

「吾等は英國政府と戦ひの門出にある。英國政府の政治は惡魔的なるが故に、吾等は之に向つて挑戦する。吾等は之を掃蕩せんが爲に起つ」。 「英人諸君は、吾等をして譽れある公けの戦場に於て戦ひ得ぬものたらしめた。而も勇敢なる魂の戦ひの路は、尙ほ吾等の前に開かれて居る」。斯くの如きは實にガンディ自身の言葉である。かくて彼は非暴力・非協同の二大綱領に據つて英國の印度統治に宣戦した。其の戦ひが武器の力を以てすると、魂の力を以てするとは、政治運動たる上に

些かの本質的問題でない。

此事は、青天直ちに白日を指す如く明白なるに拘らず、世上のガンディ讚美者、概ね却つて此の一點を閉却し、空しく彼の精神家としての偉大を説く。宛も夜光の杯に滿々たる葡萄の美酒を眺めながら、含有アルコール分幾プロセントと感嘆するの類ひである。ガンディの思想を其の政治運動より抽象して、徒らに眞理の護持を説き、非暴力と非協同とを説くだけでは、假令富縷那の辯舌を以てするも、國民は決して歌はず又舞はぬであらう。

近來ややもすれば日本の改造を志す者のうちに、熱心なるガンディ崇拜者を見る。その多くはガンディの運動を所謂精神運動と解して曰く、先づ何よりも魂の革新が必要だと。魂の革新の必要なるは、葡萄酒にアルコール分が必要なると等しく確實なる事實である。而も單に夫れだけの事ならば、必ずしもガンディの出現を待つまでもない。世上幾多の善知識、既に説得して懇切を極む。若し夫れ日本に於て眞にガンディたらんとする者は、イギリスを惡魔の帝國と看破せるガンディの政治的洞察を以て、日本に於ける萬惡の根源が、果して何ものなるかを具體的に把握せねばならぬ。而してガンディの眞摯・無畏・熱誠を以て、之を明らさまに國民の眼前に突きつけ、且ガンディの驚くべき組織統制の力を以て民衆を指導し、敢然として其の不義の本源と戦はねばならぬ。

英雄頭を回らせば即ち神仙、予はガンディに於て其の實例を見る。暫く予をして彼れの爲人ひととなりを語り、其の何故に印度民衆に歸依せられ、如何にして彼等を政治的に覺醒し、且如何にしてイギリスと戦へるか語らしめよ、そは權謀術數以外、また政戦の途あるを知らぬ吾國の政治家に對して、好箇の一大鉗鎚たり得る。

先づガンディが、印度に於て絶大の勢力を有して居ることは、世界の悉く承認して疑はぬところである。彼の到る處、民は堵を成して迎へる。一度び演壇に立てば、常に數萬の聽衆を呼ぶ。田舎の無智なる農民は、堅く彼の神通力を信じて疑はず、彼が行へる奇蹟として、數々の物語が誠にやかに傳へられて居る。民衆は皆な彼を呼ぶに「マハートマ」を以てし、殆ど神に近き尊崇の念を以て彼に對する。古今東西の歴史に於て、恐らくガンディの如く偉大なる力を民衆の上に揮ひ得たる者は無き。

而も彼の風采は「憐むべく貧弱」であり、短身瘦軀、吹けば飛ばんばかりである。多年の禁欲生活が彼の容貌を憔悴せしめた。講演に臨んでも、立つて辯舌を揮ふに堪へず、椅子によつて僅かに語ることさへある。唯だ一つ彼の眼だけが、彼の廣く深く且強き魂の窓たるに適はしく、聖なる光を湛へて輝く。ガンディは其の辯舌に於て世の所謂雄辯家でもない。彼は修辭に無頓着であり、態

度に無頓着であり、唯だ諄々として其の思ふところ、信ずるところを述べるだけである。彼は世の政治家が唯一の武器とする黄金を有つて居ない。迫害に終始したけれど權力の背景は絶無である。

是くの如きガンディが、印度に於ける政治的支配者となつたのは、實に其の崇高なる人格の力による。彼はホームズ博士がいみじくも言へる如く、「身を立てること」を念とせず、「身を下さすこと」を念として來た。登れば登り得る富と榮譽との路を捨て、汗と涙と血との路を擇んで降つた。あらゆる人間の苦難に堪へ、あらゆる人間の侮辱を忍び、あらゆる人間の犠牲を拂ふ覺悟を抱いて、彼は人生の一切の悲惨と苦惱とを最下層の民と共にした。彼が南阿に於て労働者を指揮した時は、先づ一切の財産と地位と職業とを捨て、徹底して其の導ける苦力と寢食を同じくした。其の運動に際して暴漢の爲に殴打せられ、絶息して溝壑の中に轉墜して居たのが、危く引上げられて病院に運ばれ、蘇生はしたものの、重傷にて生命覺束なしと思はれた時のことである。彼の諸友が、此の暗殺者を起訴すべきことを勧めたるに對し、彼は實に下の如く答へて居る——「彼を訴へる道理は無き。彼は自ら正しと信じたことを行ひ、自ら正しと信じたことの爲に命を投出したのだ。私は彼を頼母しく思ふ。私は彼を憎まない。私は屹度彼を味方にして見せる」。數月の後、此の暗殺者は、果して最も忠誠なるガンディの隨順者となつて居た。彼は牢獄の人となること七度び、殴打されて

重傷を負ふこと三度び、五體は慘ましき幾條の傷痕を止めて居る。

印度人は皆善く此等の事實を知る。それ故に徹上徹下、無私・純潔・眞摯なる彼の人格を疑はぬ。彼の人格を疑はざるが故に彼の言行に信頼する。彼の政治的勢力の據つて立つ根柢は、印度民衆の苦惱を躬ら嘗め盡し、之を慰安し、之を親撫し、之を濟度せんとする大丈夫の慈心悲腸に外ならぬ。此の點に於て彼の印度民衆に臨むは、猶ほ善智識の信男信女に臨むと等しい。

さてガンデイの政治運動は、其の掲ぐる理想に於て、其の根ざすところの精神に於て、西歐の政治運動と白雲萬里の懸隔を有し、之が爲に人をして、ガンデイの運動は宗教運動なりと言はしめるほど、徹底して印度的である。而も此の運動は徹底して印度的なるが故に、初めて空前の政治的成功を得た。

ガンデイの政治的理想は言ふ迄もなく「自治」^{スワラジ}である。而も彼の「自治」は單に英國の支配より獨立することに非ず、實に印度人として一切の邪惡の支配より獨立することである。「内心の汚れを除かずしては如何なる自治もあり得ない」。而して此の自治を獲得するために、ガンデイは非暴力と非協同とを二箇綱領として、世に名高き「眞理護持運動」を開始したのである。吾等は此の運動の本質に就いて、彼自身の言に聽かねばならぬ――

「眞理護持とは、予が南阿に於て、南阿在住同胞が滿八年に互りて渾へる力を現はす爲に鑄造せる名稱である。それは當時英國及び南阿に於て消極的抵抗と呼ばれたるに對し、之と區別すべく鑄造したのである。眞理護持は眞理の力を意味する。予は之を愛の力又は魂の力とも呼んだ。予は眞理を求むるには、暴力を其敵に加ふるを許さず、却つて忍耐と同情とを以て、敵を其の錯誤より遠離させねばならぬことを知つた。忍耐とは自ら惱むことである。故に眞理護持は苦惱を敵に與へず、却つて自身に與ふることによつて、眞理を確立することを意味するに至つた。

「眞理護持と消極的抵抗とは、相異なること南極と北極との如し。後者は弱者の武器として案出せられ、其の目的を遂げる爲には、物力又は暴力を用ひることを禁じない。然るに前者は最強者の武器として案出せられ、一切の形式に於て暴力の使用を排斥する。

「此の主義は決して新しきものでない。それは單に家族的生活の原則を政治的生活に布衍したに過ぎない。家族的の紛糾衝突は、愛の法則によつて解決されるを常とする。この愛の法則は、眞理の法則に外ならぬ。眞理なくして愛はない。眞理なき愛は、自國を愛して他國を害ふが如き愛、若き男子の女子に對する惑溺の如き愛である。又は無智なる父母の子に對する愛と等しく、不合理且盲目の愛である。愛は一切の動物性を超越し、曾て偏することがない。故に眞理護持は表面には愛、

裏面には眞理を讀む貨幣に譬へられる。それは隨處に通用し、無限の價値を有する貨幣である。

「またそれは魂の力と呼ばれる。何となれば若し眞理護持者は死が戦ひの中止を意味せず、却つて其の完成を意味するを信すべきものとすれば、衷なる魂を明確に認めるのは必然のことである。身體は單に自我表現の一つの車に過ぎぬ。故に肉體が敵をして眞理を認めしむる妨げとなる時は、眞理護持者は喜んで之を捨てる。彼は若し其の肉體を犠牲にすることが敵の意見を變じ得ると信すれば、喜んで其の肉體を抛つのである。

「眞理護持は、選ばれたる少數者にのみ實行が可能だと言はれる。されど予の經驗は然らざることを實證する。一度び其の單純なる原則、眞理を愛し且苦難に拘らず之を確立すると云ふ原則さへ了解すれば、如何なる人も行ふに難くない。それは他の徳育と同じく、困難であり又容易である」。

ガンディは如是の主義を擁し、英國政治は眞理と相容れず、従つて印度に於ける萬惡の泉なるが故に、印度人は眞理を護持する爲に、手を英國と絶たねばならぬとした。印度人は一切の方面に於て英國と協力してはならぬ。之が爲に假令英國が武力を以て印度に臨むも、決して暴力を以て抵抗してはならぬ。印度は暴に代ふるに暴を以てする矛盾に陥つてはならぬ。「惡に屈服して隨順するは、惡と妥協し荷擔することである。惡は飽く迄も之に抗し之と戦はねばならぬ。その爲に如何なる苦惱を吾身に招かんとも」。

かくの如き主義並に運動は、當初空論夢想として英人の哂笑する所であつた。然るに事は彼等の想像に反し、ガンディの勢力は燎原の火の如く全印度に擴まつた。二十年以前、ガンディが不法なるローラット法案に激し、アムリツツアルの虐殺に激し、セーヴル條約の不信に憤りて此の運動を開始するまで、印度の完全絶對なる獨立を理想とする者は、所謂革命黨の諸子に限られ、多數の有識階級は、大英植民帝國內の一自治領たらんことを目的として居た。一般民衆に至りては、斯くの如き政治問題に對して、概ね無智なるか然らずば風する馬牛であつた。然るに今日を見よ、英國の庇護の下に立つ藩王、英國政府の官吏、及び現在に於て富貴と榮譽とを享有する一部の階級が現狀維持を念とする以外、印度人の殆ど全部が一齊に英國統治の根本的排斥を理想とし、既に其魂に於て之を實現して居るではないか。而して此の偉大なる政治的事業は、其の成功の本源をガンディ其人の指導に有する。予はガンディ其人の出現によつて、最早や決して退轉せざるべき印度の政治的復興を確認する。既に政治的に覺醒し、且其の正しき進路をガンディに學べる印度は、晚かれ早かれ英國の鐵鎖を絶ち、希有莊嚴なる獨立の凱歌を奏するであらう。

七 印度復興の確實性

述べ去り來りて、予は略ぼ印度復興の内面的徑路を明かにした。更に完璧を望まば、史學・言語學・人類學・植物學乃至其他の科學的方面に於ける現代印度の旺盛なる知的活動——殊に復興印度の科學的精神を具現せるジャガデイス・ボースの功績を述べねばならぬけれど、今は唯だ國民生活の最も直接なる發現と見るべき宗教・藝術・哲學・政治に就いて述べるだけに止めた。而して之によつて略ぼ印度復興の確實性を立證するに足りたと信ずる。

英人故W・W・ピアスン君は予の親しき友であつた。彼は一九〇七年印度に來り、カルカッタに於て教鞭を執り、後に詩人タゴールと親交を訂して其の建立にかかる學院の一長老となり、詩人の日本に來遊するや君も共に來り、詩人去りて後約二年我國に滯留し、其の滯留中に「印度の爲に」と題する小著を公けにした。時は一九一八年の夏のことである。彼は此の著書の第二章に「印度は

準備成れるか」と題し、語勢を強めて「然り！」と答へて居る。予は印度復興を確信する者、決して予一人の事に非ざるを示すため、又一つには印度の形勢に關する好箇の鳥目觀を與へるため、親友の敘述を下に譯出して置く——

「多くの批評家は、印度は自治の準備未だ成らずと云ふ。而も準備の意味如何と問へば、彼等の答ふところ漠然として捕捉すべくもない。一國が自ら治むる力あるか無きかを知る最も肝心なる公準の一は、其國に治者階級として國政に任すべき人物ありや否やと云ふことである。印度は自治に堪ふる有爲の人才を有して居らぬか。斷じて、否である。今日の印度は世界の孰れの國にも劣らぬ有識階級を有して居る。

「先づ宗教に於ては印度が偉大なる指導者を生み出す力ある事を疑ふ者ないであらう。ラーム・モハン・ロイ、デベントラ・ナート・タゴール、ギドヤシャガル、皆な第十九世紀に於て社會的・宗教的指導者として異常の力を現はしたる偉人である。如何なる國も彼等に優る宗教家の典型を出しては居らぬ。今日に於ても印度には深奥なる哲學者にして宗教家を兼ねたるアラビング・ゴーンが居る。彼は今や來るべき世界の最大なる宗教的並に社會的指導者の一人として印度人の渴仰を受けつつある。

「哲學的思索に於ては、印度は常に世界の教師として認められて來た。故に印度が今日多くの詩人・哲學者・思想家を有することは怪しむに足らぬ。タゴール一家のみでも既に幾多の偉人を出して居る。前世紀にはデベントラ・ナートあり、現在には詩人ラビントラ・ナート、哲學者にして數學者なるドギジェントラ・ナート、音樂家ジョティンドラ・ナート、藝術家アバニンドラ・ナート及びガガネンドラ・ナートがある。彼等はベンガルに於ける文藝復興の具現者にして、年若きベンガル詩人及び文士の作品、カルカッタ美術學院の繪畫、皆な彼等の流を汲む。ベンガル以外の諸州にも、唯に文學のみならず、歴史・考古學・經濟學・政治學の諸部門に於て、有爲なる學者が輩出しつつある。今日此等の學者が多く世に知られざるは、其の著書が英語を以て書かれて居らぬ爲である。

「さり乍ら印度は、常に偉大なる思想家・哲學者・詩人を有するのみならず、一切の現代諸國が有する科學者・教育家・醫師・操觚者を初め、ラタン・タタ及びR・N・ムケルジの如き企業家をも有して居る。科學者のうちでは、化學者P・C・ライ及びマルコニに先だちて無線電信を發見し、自ら發明せる器械によつて植物の感覺を實驗しつつある植物學者J・C・ボースの名は、全世界に知れ渡つて居る。さり乍ら假令其名は知られずとも、科學的研究に没頭しつつある幾多の學者があ

る。彼等は印度政府の方針から科學的研究に多大の不便を感じて居る。若し日本政府が其の國民に與へるほどの獎勵と便宜とが印度人に與へられるならば、其の科學界に對する貢獻は、日本の夫れよりも遙かに大であらう。

「出版界に於ては土語及び英語の幾多の新聞があり、其の出來榮えは英人が印度に於て發行するものに比して些の遜色ない。また多數の讀者を有する週刊乃至月刊の雜誌も多い。カルカッタで發行されるヘモダン・レギュー及びヘブラバシの主筆ラーマーナング・チャッテルジ、マドラスのヘインディアン・レギューの主筆ナテサン、ボンベイのヘインディアン・ソーシャル・リフオーマーの主筆ナトラジャンの諸君は、予自身の親友であり、其の才能と識見とに於て、斷じて英米第一流の記者の下に在るものでない。彼等は常に豊富なる世界的知識を有するのみならず、大なる犠牲と高き道德的理想の爲に其の雜誌を用ゐて居る。

「英國に於て政治家の多數が法律家出身であり、法律家を大臣に擧用することが、英國政治の特色となつて居る。印度に對して如何なる偏見が逞しうせられるにせよ、印度法律家の才能を認めぬ譯には行かぬ。或は侮蔑の語氣を以てベンガル人は他の役には立たぬけれど、法律家には適して居るとさへ言つて居る。英國其他の歐羅巴諸國では、法律家たることが政治家たるべき最善の階梯

の一つとせられるのに、印度では之を輕蔑するは不當である。兎にも角にも印度にはラネード・アリ・イマーム、アシュートシ・ムケルジ等の法律家があり、此の方面に於て決して他國の助力を必要とするものでないことを立證して居る。

「教育に於ても、教育者としての最も高い地位が、悉く外國人によつて占められて居るに拘らず、印度は獨り學識優秀なるのみならず、其の高徳を以て學生を感化せる多數の教育家を出して居る。バリサールのクマール・ダット、ベンガルのB・N・シール及びP・C・ライ、パンジャブのムンシ・ラーム、デリーのルードラ、ベナールスのバガヴン・ダース等は、數ふるに遑なき大教育家の二三を挙げただけである。生徒の話す言語も知らず、其の働きつつある國に殆ど何の經驗もなき外人教師が、此等の人々よりも有爲なる教育家たり得る道理があらうか。

「政治的方面に於ても、印度は偉大なる才腕と高貴なる人格とを具ふる人物を出して居る。彼等は一身を印度の爲に獻じて、何等物質的報償を期待しない。ゴケールを知る者は、若し彼が英國に生れたならば、グラッドストンやアスキスに譲らぬ宰相たり得たことを認めるであらう。彼の大敵なりしカーゾン卿すら、其の才幹を稱揚せざるを得なかつた。またガンデイも指導者として無比の天稟を示せる一人である。彼は南阿に住むこと二十年、其の收入多かりし辯護士の職を棄て、専ら

印度人の爲に一切を犠牲として働いた。彼は能く印度教徒と回教徒を結合せしめて全印度人を一體とし、印度人を奴隷視せる南阿政府其者にまで敬意を拂はしめた。若し彼にして獨立國に生れたりせば、其の才幹は直ちに認められ、敵意ある政府と戦ふ爲に非ず、其國の建設的政策の爲に之を用ゐることであらう。

「最後に印度人は行政的能力を缺くと言ふ者があるけれど、事實今日の印度政府に於て、實際行政の衝に當つて居るのは印度人であり、假令明日英國の代表者が悉く印度を引上げて、印度の行政機關は殆ど何等の變化なしに運轉されて行くであらう。唯だ一事の異なるところは、其時の政治目的は、英國と其の植民地とを富ますことに非ず、實に印度の衰退を防ぐに存するであらうと云ふことである。

「是くの如く印度は世界に於て自由なる、また最も尊敬せらるる諸國と、同一の道德的水準に立ち得る有識階級を有して居る。果して然らば、印度に自治の準備なしとの誣言は最早許さるべきものなからう。

予の敘述だけで不安を感じる人々は、如上のピアスン君の言によつて疑惑の雲を拂つて欲しい。印度は現に復興して居るのである。而して此の復興印度は、一切の點に於て印度的である。故に其

の創造しつづつある文化は、截然として西歐文化と相異なれる印度文化である。世界は長く文化とは西歐文化のことと迷信して居た。而も世界戦及び世界戦後の歴史的進行は、遂に西歐文化の破産を招いた。かかる時に際して、印度精神の復活は、實に二重の意味に於て偉大なる世界史的意義を有する。第一は外面的に、其の政治的獨立が、嘗に印度に於てのみならず、禍悪を世界に蒔くイギリスから、一舉にして強國の地位を奪ひ去るべきことである。第二は、内面的に、其の精神的獨立が、印度本來の精神に根ざせる新文明の創造によつて、人類向上の爲に貢獻すべきことである。

「いつの世にてもあれ、正法衰へ非法榮ゆる時、吾れ直ちに自己を現す！」——これクリシュナがアルジュナに約束せる言葉である。予は信ずる、クリシュナの出現、決して遠くはない。クリシュナ一度び方向を決着すれば、世界一切の力は、意識すると否とを問はず、之を好むと憎むとを問はず、悉く率ゐられて其の定めたる方向に奔流し行く。そは大風興つて海洋に逆巻く波濤の、或時は高く或時は低きが如く、成功と失敗との幾波瀾を繰返すであらう。イギリスは印度の統一を困難ならしめるため、有らゆる術策を講じて來た。言語は千差萬別である。民度は高低參差である。風俗は區々である。信仰の對立は激烈である。イギリスは未だ曾て之を融和し、均齊し、統一し、調

停せんとせざりしのみならず、却つて乖離反目を助長して、全國民の一致を不可能ならしめて來た。それ故にイギリス統治の没落が、直ちに印度統一國家の出現を意味するものでは斷じてない。イギリスの手を離れたる印度が、先づ陥るべき運命は恐らく、亂麻の如き混沌であらう。而も一切の起伏を通して、浪はひた寄せに定められたる方向に進む。印度も竟に獨立の實を擧げるであらう。其際に何者にも優りて印度統一のために貢獻するものは、ガンデイの偉大なる人格であらう。年少氣銳の闘士は、いまやガンデイの革命戦術に不満を抱いて居るとは言へ、時局更に進んで全土亂離に陥る如きことあらば、印度の民は再びガンデイを導師と仰ぐであらう。印度獨立は單純なる政治問題でない。吾等は其の奥底に潛む深甚なる世界史的意義を明確に認識せねばならぬ。

ジャ
ワ
ハ
ル
ラ
ー
ル
・
ネ
ー
ル

一 はしがき

印度國民運動に於て、マハトマ・ガンディに次ぐ偉大なる指導者は、疑ひもなくジャワハルラール・ネルルである。昨年十月二日を以て古稀の高齡に達せる老いたる聖者の後を繼いで、やがて印度獨立運動の最高指揮者たるべき者は、恐らくネルル其人であらう。ジョン・ガンサーは、其著「亞細亞の内幕」に於て、ネルルを紹介せる一篇を下の一句で結んで居る——「印度を旅行して到處で受ける最初の政治的質問は、貴下はジャワハルラールに會つたか、彼は何をして居るかといふことであつた」。いまやネルルは、それほどまで重きを印度になして居り、その一言一行が、國民至深の關心を惹いて居る。それ故にネルルを知らずしては、最早今日の印度を知るべくもない。ガンディとネルルとは、互に他を推重し、敬愛して居る。例へば一九三三年五月、國民會議と印度官憲との鬭争が極度に激化せる時、ガンディがエラヴダ監獄内に於て三週間斷食を行ふ數日前、

獄中よりネールに宛てたる下の書翰は、如何にガンディが彼を親愛して居るかを立證する——「專柄の真相が判らぬ自分に何が言へようか。予は未知の國土で道に迷つた感がする。貴下のみが唯一の道しるべで、暗闇を手探りで歩まうとするが、蹉いてばかり居る。何事が起らうとも、予の愛情と思想とは、常に貴下と偕に在る」。而してネールもまたガンディに對して至深の敬意を拂ひ、彼の生涯に最も深刻なる個人的感化を與へた者は、彼の父モテイラール・ネール及びガンディだと言つて居る。

それにも拘らず、この偉大なる兩印度人は、その性格に於て、またその心性に於て、最も著しき對照をなして居る。まづガンディの性格が徹底して宗教的なるに對して、ネールは飽く迄も理知的である。ガンディに従へば「結局吾等は、總て神が考案せる劇中の人物である。シェークスピアの戯曲に現れる人物が、その作者に對して有つと同様の關係を、吾等は神に對して有する」ものである。彼は常に祈禱し、屢々斷食する。その斷食は「心を澄ませ、雑念を去りて、根本的なるものと、時としては宇宙の太靈と」感應道交するためである。彼曰く「斷食潔齋しなければ、予は眼を失へるに等しい。蓋し眼は外界を觀るものであり、斷食は内界を觀るものであるから」と。彼は其の性格並に哲學に於て、紛ふべくもなき印度教徒であるが、基督教に好意を示し、回教にも敬意を拂ひ、

乃至一切の既成宗教を容認する。彼に従へば、印度は宗教の國なるが故に、決して政治家によつて統一せられることなく、唯だ聖者によつてのみ導かれるものである。

然るにネールは、謂はゆる宗教に對して何等の敬意をも拂はない。彼は言ふ——「印度は何はさて置き宗教の國であると謂はれ、印度教徒・回教徒・スイク教徒及び其他が、皆な彼等の信仰を誇り、死を以て其の眞實を立證せんとする。而も印度又は他國に於て、謂はゆる宗教、又は少くも既成宗教の現状は、予をして嫌惡の念に堪へざらしめる。予は屢々之を非難し、且之を掃蕩し去らんと望んで來た。殆ど總ての場合、宗教は盲信と反動、獨斷と頑迷、迷信と搾取、既得利益の擁護に味方する。予は宗教には其れ以上の或者が存すること、人間の至深の要求に應ずる或者が存することを熟知して居る。……而も既成宗教は、その過去が如何に在りしにもせよ、今日に於ては概ね眞實の内容を失ひ盡せる空虚なる形式に墮して居る」。従つて彼は、専ら精神的方面のみを高調する宗教運動は、決して印度を救ふ所以でないと力説する。「個々の人間が、環境と境遇とを超越して、偉大なる精神的高峰に登ることは可能であらう。而も多くの團體又は國民に取りては、内面的向上の途を歩む爲に、先づ或る程度の外面的發達を必要とする。經濟的事情の犠牲となり、生きんがための苦闘に束縛掣肘せらるる人間が、高き内面的自覺に達し得ることは至難である。蹂躪せられ搾

取せらるる階級は、決して内面的に發達すべくもない。政治的並に經濟的に他國に隸屬し、束縛せられ、掣肘せられ、擄取せらるる國民は、決して精神的成長を遂げ得ない。かくて内面的發達のためにも、外面的自由と適當なる環境とが必須の條件である。内面的發達を妨ぐる一切の障礙を排除するために、この外面的自由を獲得し、且環境を改善せんとする運動に際して、當面の眞個の目的を失敗に歸せしめるやうな手段は取りたくない。ガンディ翁が、手段は目的よりも重大だと言つたのは、此の意味であらうと思ふ。但し其の手段は、目的達成に役立つものでなければならぬ。然らずば其れは努力の浪費であり、時としては却つて内外兩面に於ける一層大なる墮落に陥ることさへある」。従つて彼は、ガンディの非協力運動のみが印度解放の途であるとは考へない。

兩者の風貌が、また其の性格の如く違つて居る。ガンディは、ウィル・デューラントの言葉を借り來れば「銅色の顔と肌と、灰色の坊主頭と、骨張れる頬と、優しい小さな褐色の眼と、殆ど齒の無い大きな口とを持ち、而して更に大きな鼻と瘡せた手足とを持てる、亞細亞の最も醜く、最も貧弱な、最も弱々しい男」である。此の醜く弱々しき風貌のうちに、最も美しく且強き魂と、最も逞しき精力とを宿して居ることは、更めて附言するまでもなからう。然るにネールは、軀幹長大、眉目秀麗、態度また優雅にして莊重である。彼は平素國民會議制服の白衣を纏つて居るが、そのガン

ディ帽を被れる姿は、わけても美しく見える。其上ガンサーに従へば、彼は「實物よりも寫眞が一層立派に見える幸運者の一人である」。



ル - ネ

ネールの魂も、また其の風貌の如く清純であるやうに見える。往々にして彼は餘りに清廉であり且潔癖であるために、政治家として成功せぬであらうと言はれる。ガンディは定義に拘泥せず、常に妥協し、屢々讓歩し、その目標は不變であるが、その態度は變通自在

である。曾て印度回教聯盟の指導者ジンナーは、ガンディが數回に亙つて發表せる「印度獨立」に關する七個の互に相異なる定義を列擧し、その孰れが眞實なるやを彼に向つて質問した。然るにネ

ールは、飽迄も良心的に定義を作り、嚴格に之に従ふ。彼は其の慎重に擇べる一路を邁往し、妥協を惡み、變通を厭ふ。彼には微塵も芝居氣がない。彼は謙遜で慎み深く、語る時には常に控目に物言ふ。政治的集會に於ても、彼の演説は大學教授の講義に似通つて居る。彼は自ら馴々しい態度を取らず、他人の無作法なる差出口をも好まない。彼は群衆に親しみ、群衆もまた彼に親しむ。然し乍ら彼は自分を忘れるほど群衆と親しくはなり得ない。彼自身の言葉によれば、彼は常に群衆の中に居るが、決して群衆のものではない。

ネールは寂寥の人である。彼は中世紀的なる印度に生れ、西歐的教養の下に徹底せる近代人となつた。「予は東洋と西洋との奇妙な混合物となつた。予は到處に居辛く、何處にも故郷がない」と彼は述懐する。まことにガンサーの言葉の如く、彼は西歐人となれる印度人、社會主義者となれる貴族主義者、民衆指導者となれる個人主義者である。彼は其の複雑なる性格、高貴なる品性、無比の健康、無限の精力、事務の才幹を以て、印度獨立の戰士として、前後二十五年の善戰健闘を續けて來た。彼は三十二歳の時に初めて獄に投ぜられてから、下獄實に八回に及び、人生の最盛期を鐵窓裡に過ごした。

彼は一九三一年より一九三三年に至る第六回の下獄の間に、當時十三歳なりし愛嬢インディナに

宛て百九十六回に互つて世界歴史を順次に書き送つた。そは後に上下二卷の「世界史瞥見」として出版されたが、菊判一五六九頁の大冊である。而して一九三四年六月より一九三五年二月至る最後の下獄に際し、獄裡の無聊を慰むるため、また現代印度の政局を靜に回顧するため、更にまた自らの行動を肅そかに反省するため、一篇の自敘傳を書上げた。そは後に菊判六百頁の一巻として出版されたが、アーキン卿が「何人も此書を読まずしては印度を理解するを得ず」と言へるほど、印度研究上の貴重なる文獻である。そは最も誠實なる自敘傳であるのみならず、現代印度の忠實なる物語であり、印度の生活と政治との精緻なる繪卷物である。予は此書に據つて、ネール及び彼の慘ましき國土に就いて語るであらう。

二 生立ち

ジャワハルラール・ネールはカシユミルの名家の裔である。今を距る二百年前、モーガル帝國が

既に衰へ初めたころ、梵語及び波斯語の碩學として名高かりし彼の祖先カウルが、名譽と榮達とを求めてカシユミルの山地より豊沃なる中原に出で、帝國の首府デリーに居を構へて朝廷に仕へた。其後家運に隆替あつたが、一八五七年の大亂によつて、時勢急變するに及び、ネール一家はデリーよりアグラに亡げ、一先づ此町に住むこととなつた。彼の父モティラール・ネールは、一八六一年五月六日、奇しくも詩人ラビンドラ・ナート・タゴールと同年同月同日に、此のアグラの町で生れた。彼の祖父はモティラールの誕生以前に此世を逝つたので、モティラールよりも遙に年長なりし二人の兄が、多數の家族を擁するネール家を扶養した。その二人のうち、長兄は印度政府の司法部に奉職して諸方に轉任したが、次兄ナンドラールは官職を辭して辯護士となり、初めはアグラに開業し、後にアラハバードに移つたので、ネール一家も彼に従つた。

モティラールは、次兄ナンドラールの愛護と指導との下に成長し、彼と同じく法律を學んで辯護士となつたが、其の明敏なる頭腦と、旺盛なる闘志と、無比の勵精とを以て、若年にして夙くも確乎たる地歩を法曹界に占め、年と共に富裕になつた。當時のモティラールは、身も魂も法律に打込んで居た。彼は如何なる政治團體にも加入せざりしのみならず、徒らに口舌を弄して一事をも成し得ざる印度の政治屋を輕蔑して居た。彼はイギリス人の性格並に生活に敬意を拂ひ、印度の零落は

必然の因果だと考へて居た。彼の収入が増加するに連れて、その生活も豪華になり、且次第に歐羅巴風になつた。ジャワハルラールは、一八八九年十一月十四日、アラハバードに於て是くの如き家庭に生れた。彼が誕生してから十一年間、天はモティラールに子を授けなかつたので、彼は由緒ある富家の一人息子として、存分に甘やかされて育つた。

父は彼の十一歳の時、イギリス人F・J・ブルックスを彼の家庭教師に備つた。ブルックスは、ネール家に止宿して三年間彼を教育せる間に、大なる感化を彼に與へた。彼は讀書の趣味をジャワハルラールに教へ、科學に對する興味を鼓吹した。父は其子のために小さな實驗室を建ててくれたので、彼等は物理學や化學の實驗のために、毎日長い時間を其の實驗室で過ごした。

日露戦争が始まつたのは、彼の十四歳の時であつたが、日本の連戦連勝が深刻なる感激を彼に與へた。彼は戦争記事を読むために、日々の新聞を待ち焦がれた。「予は日本に關する多數の書籍を註文し、その若干を読まんとした。日本の歴史は理解し惡かつたが、日本の昔の武士の物語や、ラファディオ・ハーンの爽やかな文章は予を喜ばせた。國民的思想が予の胸に充滿した。予は歐羅巴の羈絆を脱せる印度の自由並に亞細亞の自由を渴望した。予は劍を提げて印度のために戦ひ、印度の解放に貢獻すべき武勳を樹てたいと夢想した」。

翌一九〇五年五月、彼は両親に伴はれて英國に渡り、ハロー學校に入學した。彼はドービーよりロンドンに至る汽車中で、對馬沖に於ける日本海軍の大勝を知り、意氣の昂るを禁じ得なかつた。ハローでは、ラテン語以外の學課は、彼の學力が遙に同級の英國青年を凌いで居た。彼は其父への手紙の中に、英國學生が如何に愚鈍であるかを書き送り、彼等が遊戯や勝負事の外に話題を有たぬことを笑つて居る。

故國印度では此頃より頗る政治的不安が昂まつた。英國新聞の故意に貧弱なる報道も、敏感なる遊子の心を傷ましむるに足りた。恰も其のころ、彼は學術優等の褒賞としてガリバルデイ傳を貰ひ、貪る如く之を讀んだ。「予は印度に於ける同様の偉業、自由のための花々しき戰鬥を想ひ浮べた。予の心には印度とイタリーとが不思議にも混一された」。

ハロー在學僅に二年にして、彼はケムブリッジ大學に入り、自然科學の研究を志し、專攻課目として化學・地質學・植物學を擇んだが、在學三年間に文學・歴史・政治・經濟に關する多くの書籍を讀んだ。此頃の彼は尙ほ未だ確乎たる人生觀を有せず、彼自身の言葉によれば「一つには青春の常として、また一つにはオスカー・ワイルドやウォルター・ペーターの感化により、一種の漠然たる快樂主義者」であつた。

當時ケムブリッジ大學には、少なからぬ印度學生が留學して居た。故國の政情が激化し、テイラックやアラビンド・ゴシユの活動、ベンガルの排英運動に關する報道が、彼等の感情を煽り立て、殆ど一人の例外もなく革命運動を讚美し、言論は過激を極めて居た。但し彼等の殆ど總てが、卒業後は印度政府の官吏となり、司法官となり、乃至實直なる辯護士となり、「往年の悲憤慷慨家にして、其後の印度政治運動に貢獻せる者は殆ど無い」。

而も急迫せる印度の空氣は、從來訴訟事件の外に他を顧みざりし父モテイラールをして、政治に關心を有たしめるに至つた。此事は甚だ彼を喜ばしめたが、但し父の政見に對しては不満であつた。父は穩健派と行動を共にし、激しく急進派に反對した。彼は何故に父が穩健派に與せるかに就いて下の如く説明する——「彼の明晰なる頭腦は、強硬過激なる言論は、之に相應する行動を伴はずば、畢竟無益なることを看取した。彼は有効なる行動を期待し得なかつた。國產運動及び英貨排斥運動は、彼には成功すべくも思はれなかつた。且此等の運動の背景は、彼と風馬牛なる宗教的國民主義であつた。彼は古き印度の復活などを念頭に置かなかつた。彼は之に就いて何等の同情も理解もなく、却つて種姓制度其他の數々の古き印度の社會風習を徹底して悪んで居た。彼は歐羅巴を尊重し、歐羅巴的進歩を望み、且それは英國との協調によつて可能だと信じて居た。社會的に言へば、一九

○七年の印度國民主義は、明確に反動的であつた。印度の新國民主義は、他の東洋諸國に於けると同じく、必然一種の宗教的國民主義であつた。かくて當時の穩健派は、一層進歩的なる社會思想を代表せるものであつたが、彼等は民衆と何等の接觸をも有たぬ少數の上層群であつた。

かかる間に一九一〇年彼はケムブリッジ大學を卒業した。彼は一生の仕事として何を擇ぶべきかといふ問題に當面したが、結局父と同じく辯護士にならうと決心した。彼はロンドンに出でて法律を學び、可もなく不可もなき成績で片端から試験に及第し、二年にして辯護士の資格を取り、一九一二年夏、英國留學七年の後に印度に歸つた。

三 印度の混沌

ジャワハルラールが歸國當時の印度政情は沈滞して居た。テイラックは獄中に繋がれ、有爲なる指導者を失へる急進派は彈壓せられ、穩健派はミント・モーレー案によつて去勢せられ、國民會議

は其等の穩健派によつて占められて居た。「一九一二年のクリスマスに、予は一議員としてバンキポールに開かれし國民會議に出席した。そは英語に通じたる上流階級の仕事で、モーニングコートと折目正しきツボンが際立つて目についた。そは實質に於て一個の社交俱樂部であり、何等の政治的昂奮も緊張も無かつた」。

彼はアラハバード高等法院附の辯護士となつたが、法律事務には興味を覺えなかつた。但し彼は此間に多くの英人官吏及び印度人官吏と接觸し、彼等の眞實の姿を知ることが出来た。「英人は通例官界に關係ある同種類の印度人とのみ交際し、眞實の印度人に接することは殆ど無い。假令會つても彼等の本心を吐露させることが出来ない。印度に於ける英國統治は、英人と言はず印度人と言はず、官僚を社會的に優位に祭り上げたが、此の官僚は最も愚鈍で偏狹である。有爲なる英國青年でさへ、印度に赴任すると幾くもなく知識と教養の上で無感覺となり、一切の生命ある思想や運動と絶縁する。果てしなく回り來る書類を終日いじくつた後に、彼は運動したり、俱樂部に往つて同僚と雑談し、ウキスキーを飲み、滑稽雜誌や繪入新聞を讀んだりする。……印度人官吏も彼等に優るところ無い。蓋し彼等は英人を手本とするからである。……此の官僚の雰圍氣が、殆ど印度の中流階級全部に浸透し且支配して居る。醫師、辯護士其他が此風に化せられ、半官半民の大學の講堂

さへも此の空氣に満ちて居る。此等の人々は隔離せる世界に住み、民衆は愚か、下層の中流階級とさへも接觸が無し」。

かかる間に世界戦が勃發した。「口では英國への忠誠が聲高く叫ばれたけれど、英國に對する同情は殆ど無かつた。穩健派も、急進派も皆な心密かにドイツの勝利を喜んだ。ドイツを愛する筈はないのだが、唯だ吾等の支配者が膝を屈するのを見たかつたのだ」。やがて印度の政治運動が次第に活潑になつて來た。ローカマニヤ・テイラックは牢獄より出で、アンニー・ベサント夫人と共に自治聯盟を結成した。國民會議も稍や活氣を帯び、回教聯盟も會議派と歩調を一にし初めた。全印度の空氣は頓に緊張し、わけても青年は昂奮した。政府は此の形勢に驚き、先づベサント夫人を監禁して氣勢を殺がんとしたが、それは結局運動を激化させることとなつた。蓋し此の彈壓は、自治聯盟に加入せる臆病なる穩健派を、續々聯盟から脱退せしめた代りに、勇氣ある穩健主義者をして義憤に燃え立たしめ、進んで運動に加はらしめたからである。其の最も有力なる一人が、取りも直さず彼の父モテイラールである。

頑強なる穩健主義者たりしモテイラールは、其子が動もすれば急進主義に走らんとするを見て、深憂を抱いて居た。ジャワハルラールは、決してベンガル青年の如き過激なる革命思想を抱いて居

なかつたが、印度の現状を坐視するに堪へなかつた。彼は英國の印度統治に猫の如く屈從するは、個人としても國民としても、忍ぶべからざる不名譽であると痛感し、起つて之と戦はねばならぬと覺悟した。モテイラールも穩健派の哲學には不満を感じて居たが、急進派の言動には大なる反感を抱いて居た。彼は總ての事に於て、絶対に他に途なしと確信するに非ずば、決して一より他に移らうとせぬ性格であつた。一步前進することは、彼に取りて大なる精神的苦闘であつた。而も一たび進めば、彼は斷じて後退しなかつた。ベサント夫人の監禁は、終に彼をして政治的に進一步せしめたが、爾來更に歩一歩前進を續け、やがて多年歩調を共にし來れる穩健派と袂を別ち、ガンディと共に最も勇敢なる印度解放の指導者となつた。

さて世界戦は、印度工業の急速なる發達を促し、資本家階級の富と權力とを増大した。此等の最上位の富裕階級は、景氣の潮に乗つて富めるが上にも富まんとして居た。但し大多數の印度人は、固より彼等の如く幸運に恵まれず、唯だ荷ひ切れぬ負擔の軽くなることを待ち焦がれて居た。中流階級の印度人は、憲法改革によつて自治の範圍が一層擴大せられ、彼等のために立身出世の途が拓けんことを切望して居た。彼等は戦時中に起れる數々の政治運動が、必ず何等かの實を結ぶべきものと期待して居た。大衆殊に貧農階級の間にも、政治的不穩の徴候が萌し初めて居た。回教徒の間

には、聯合國のトルコに對する態度について、またカリフ問題について、不滿の感情が昂まつて居た。

總じて印度は待つて居た。滿腔の希望を以て、而も恐怖と不安の感情を混へ乍ら、印度は待ちに待つて居た。然るに英國の新印度政策の第一回の提案は、革命運動彈壓を目的とせるローラット法案の成立であつた。政府と警察とに對して、「辯護人なく、控訴なく、辯論なし」に、彼等の欲せざる人物を逮捕し投獄する權能を與へんとする此の法律は、有らゆる印度人の憤激を買ひ、最も穩健なる政客さへも之を糾弾した。モハンダース・カラムチャンド・ガンディが、その龍の如き姿を印度政局の舞臺に現はしたのは、實に此時である。

ガンディは世界戰中に南阿より印度に歸り、同志と共にサバルマティの道場に住んで居た。南阿に於ける眞理護持闘争以來、彼は印度で著名になつて居た。彼は一九一七年には、ビハールのチャムパラン地方で、白人農園主の虐待に苦しめる小作人のために戦ひ、其後グジラートのカイラ地方の農民のためにも戦つた。一九一九年の初頭、彼は重病に罹つたが、それが恢復するかせぬかの時に、印度總督に向つてローラット法案に同意を與へぬやう嘆願書を提出した。此の嘆願が容れられぬのを看て取ると、彼は最初の全印度運動の指揮者として起ち上つた。彼は眞理護持團を結成し、

ローラット法に對する不服従を團員に命じた。そは明らかに自ら進んで牢獄への道を歩む運動であつた。

新聞によつて此事を知れるネールは、恰も雲霧を抜いて青天を仰ぐが如く感じた。彼は此道こそ竟には最後の勝利に導く道であると考へ、抑へ難き情熱に燃えて、直ちに眞理護持團に加入せんと欲した。然るに彼の頭に三斗の冷水を注ぎかけたのは、父モティラールの態度であつた。父は新しき一步を踏み出す前に、常に慎重に其の結果を考慮する習慣であつた。父は仔細に眞理護持團並に其の計畫を検討したが、すればするほど反感を増した。大勢が監獄に行つたところで何になるか、左様な事で政府を壓迫し得るものかと、此の法律家は考へた。其上に彼は、其の一人息子が入牢するといふやうなことを想つても見たくなかつた。それ故に彼は、ジャワハルラールの眞理護持團加入に反對した。而も其子が容易に其志を翻へさざるを見るや、父は直接ガンディに依頼し、ガンディをして其子を説かしたもので、ジャワハルラールも止むなく思ひ止まつた。

ガンディの運動は、世界に於て類例なき目新しきものであつた。そは比較すべきもの無きが故に、多くの指導者をして判斷に迷はしめ、躊躇せしめ、効果を危ぶましたのも無理は無かつた。而も一度びガンディが、一九一九年四月六日の日曜日を期して、全印度に互る罷業、業務停止、及び集

會を命じ、茲に謂はゆる眞理護持運動を開始するに及んで、その指令は、印度の最も邊鄙なる村々にまで届き、町と言はず村と言はず、全國の有らゆる人々、有らゆる團體が之に参加した。而して此の運動に續いて數々の事件が連發し、遂にパンジャブには戒嚴令が布かれるに至つた。パンジャブは印度の他の部分から隔離せられ、報道は絶え、人民の出入は至難となり、不安と恐怖との幾月かが續いたが、戒嚴令の撤廢と共に、パンジャブで行はれたる恐るべき慘事が分つて來た。その最も悲惨なるは四月十三日に起りしアムリツツアルのジャリヤンワラ園の虐殺で、約二千の武器を持たざる民衆が、ダイヤー將軍の指揮せる機關銃隊のために殺傷された。

パンジャブに於ける非違の數々に對する痛恨が、印度全國に漲り、その實狀を明かにするために政府でも國民會議でも、調査委員を任命した。會議側の調査は、主として彼の父モティラール及びC・R・ダースの指導下に行はれ、ガンデイも之に協力した。此の調査の間に、ネールは屢々ガンデイと會見した。ガンデイの提案は、調査委員會では常に突飛奇抜に思はれ、屢々其の反對を受けた。而もガンデイは巧みに彼等を説得して其の提案を容れしめ、且その結果は、彼の聰明と智慧とを立證したので、ネールは次第にガンデイを尊敬するやうになつた。

四 政治的目覺め

さて其頃までの印度に於ける政治運動は、中産階級のそれであつた。急進派も穩健派も、等しく中産階級を代表し、何よりも先づそれぞれの地位の向上を目指して居た。穩健派は主として少數の上層中流階級を代表したが、彼等は現にイギリス統治の下に利益を得て居るので、如何なる急激なる變化をも好まず、専ら現狀を維持せんとし、政府及び大地主とも緊密なる關係を結んで居た。之に對して急進派は、下層中流階級を代表した。工業労働者は、世界大戦中に其數を激増したが、僅に二三の都市で組織を與へられて居ただけで、殆ど無力に等しかつた。農民は無智極貧にして其の悲惨なる運命に諦め、彼等に來る總てのもの——政府・地主・金貸・小役人・巡査・法律家・僧侶から搾取され通しであつた。而して英人經營の新聞は言ふまでもなく、謂はゆる「國民會議派」の諸新聞さへも、其實は印度の大地主又は資本家の投資による關係から、労働者や農民に關する記事

を殆ど取扱はなかつた。印度の知識階級は、空しく「政治的自由」を叫び、全地に漲る怖るべき貧窮と悲惨とに面を向けようとしなかつた。ネール自身が「一九二〇年に於て、予は全く工場及び田園に於ける労働の状態を知らず、従つて予の政治的見解は完全にブルジョア的であつた」と告白して居る。

然るに此年六月、アラハバード市を距る五十哩の奥地の農民約二百が、ラーマチャンドラと呼ぶ一指導者に導かれ、言語に絶する彼等の窮状を該市の政治家達に訴へる爲に押寄せて來た。ネールは此事を聞きて、二三の友人と共に、ヤムナ河の一支流の畔に疲れ果てて蹲踞して居た農民を訪ひ、その世にも憐れな姿を見、その切々たる訴へを聞いた。ネールが「此の訪問は、予に取りて一個の天啓であつた」と言つて居るほど、彼等の限りなき悲惨がネールの魂を震撼した。彼は此年及び翌一九二一年に互り、暇あれば即ち農村を巡回して、具さに農民の實状を視察した。彼自ら語る——

「予は數限りなき彼等の悲痛なる物語、次第に増し來る地代の堪へ難き重荷、不法極まる誅求、土地と泥小屋からの放逐、假借なき打擲、地主の手先・金貸・巡查などの阿修羅どもが四方を取巻いて彼等を餌食とすること、終日辛苦すれども其の作れるは彼等のものに非ざること、彼等の勞苦に對する報酬は足蹴・罵言・空しき胃袋だけなることを聞いた」。此の經驗は後年のネールの政治的

進路に重大なる影響を與へた。そは彼をして社會主義者たらしめ、獨立運動指導者中の異色ある政治家たらしめた。

ネールが眞個の政治的目覺めを體驗せる此年の秋、パンジヤブ問題とカリフ問題の非違糾弾を目的として、國民會議の特別議會がカルカッタに開かれた。ガンディが、印度は非暴力・非協力を以てイギリスの不義と戦ふべしとの破天荒なる主張をなせるは、實に此の議會に於てである。而も此の新奇なる戰術は、ラージパト・ライヤC・R・ダースを初め、殆ど總ての有力なる議員の賛成せざる所であつた。彼等は皆な、此の空前にして無類なる戰に躊躇し、且その勝利を危ぶんだ。有力者のうち、飽くまでガンディを支持したのは、唯だネールの父モテイラールだけであつた。但し大多數の議員は、皆なガンディの際立てる人格に魅せられ、無條件に之に賛成したので、國民會議は此案を可決し、やがて非協力運動が實行に移されることとなつた。而して之と共に現代印度史に於けるガンディ時代が始まつた。

印度政府は、好むと好まざるとに拘らず、極めて廣範圍に互る印度人の協力を基礎を置いて居る。若し此の協力が撤回せられ、ボイコットが遂行せられるならば、それは政府に對して重大なる脅威であり、それだけ人民の力を増すべき筈である。それは完全に平和的ではあるが、決して單なる無

抵抗ではない。眞理護持は、非暴力的ではあるが、不義に對する抵抗の、嚴肅なる様式である。此の戦術は、インド人の氣風といみじく適合せるものであつた。民衆は「マハートマ・ガンディ萬歳 Mahatma Gandhi ki jai」と関の聲を擧げて、此の新しき福音に歡喜した。此の民衆の情熱と運動初期の成功とは、最初躊躇せる指導者の危懼を拂拭し、欣んで此の運動に参加せしむるに至つたが、獨りモハメッド・アリ・ジンナーだけは此時以來、國民會議と訣別し、後には最も反動的なる回教宗派運動の首領となるに至つた。ジンナーは、女詩人サロージニ・ナイドゥが「印回兩教統一の大使」と呼べるほど、過去に於て回教聯盟と國民會議との協調に盡力して來たのであるが、ガンディ指導以後の國民會議は、全く往年のそれと本質を異にし、到底彼の氣象と相容れぬものとなつたことが、その脱退の動機であらう。

かかる間に モンテীগ・チエルムスフォード改革案による新しい參事會や議會が出来た。國民會議の穩健派は、此の改革に満足した。彼等は其の望む所を遂げたりとして、嘗に會議より脱退せるのみならず、進んで大臣其他の官吏となり、政府を助けて非協力運動並に國民會議と戦ふに至つた。而も民衆は彼等を蔑すみながら驀地に前進した。非協力運動は、實に不思議の力を以て印度人の魂を解放した。臆病なる 卑屈なる、衰へ果てたる民衆が突如、昂然として其頭を擡げ、堂々の

る歩武を以て進み、欣然として團體的行動を取つた。聲を潛むる私語、法律を怖るる婉曲なる語法は跡を絶ち、人々は感じたままを直言し、而も屋上から疾呼した。まこと此年は、印度に取りて非常の年であつた。「其處には國民主義と政治と宗教と神祕主義と熱狂との不思議なる混融があつた。而して其等の總ての背後には、農民の不穩と、大都市に於ける勞働運動の擡頭とがあつた」。

ネールは此の運動に文字通り没頭した。彼自ら曰く「予は一切の他の交際や關係、多年の友人、書物、また新聞をさへも棄てて顧みなかつた。予は殆ど家を忘れ、妻を忘れ、娘を忘れた。予は事務所、委員會、群衆の中に生活した。村々に行けといふのが吾等のスローガンであり、吾等は遠く田野を跋渉して邊鄙なる村々を訪ひ、農民の集會で演説した」。

ガンディは言ふまでもなく、其他の國民會議の指導者等が、到る處で喚び起せる民衆の熱狂は、印度政府をして運動の意外なる發展に愕然たらしめた。七月三十一日、外國製の布の山が、ガンディ自身の手によつて焼かれた。翌八月一日は、偉大なる革命家テイラックの一周忌に當り、國民は彼の遺志を繼いで印度獨立を戦ひ取らんとする決意を一層固くした。政府は極度に狼狽し初め、九月に入りて國民會議首腦部の檢擧を開始し、アリ兄弟以下の逮捕を見るに至つたが、それは昂まる潮の如き運動を阻むべくもなかつた。政府はまた英國の皇族を招聘し、之によつて印度の民衆を感

激せしめ、わけても貴族や地主を籠絡して會議派の運動を支持させまいとした。而も此年十一月十七日、英國皇太子がボムベイに到着するや、全市は完全に罷市ハイクンを實行し、人通り絶えたる街路と閉ざせる窓とを以て之を迎へた。英國人以外の者にして此日の奉迎に参加せる若干の印度人は、民衆の激怒を買ひ、其家を焼かれ、五十餘人が殺害された。皇太子の訪へる總ての町々が皆な同然であつた。アラハバードもカルカッタも、死せる都に等しかつた。この成功は、印度民衆をして一層勇敢ならしめ、眞向より政府に反抗せしむるに至つた。政府は國民會議義勇隊を非合法と宣言したが、それは却つて民衆を驅りて義勇隊に入らしむるだけであつた。嚇怒せる政府は、遂に意を決して極端なる彈壓に出でた。一九二一年十二月に開始せられたる總檢擧の嵐は全印度を風靡し、C・R・ダース、ラージパト・ライ、チャンドラ・ボースを初め、ネール父子もまた捕へられて牢獄に投ぜられた。一般の義勇隊員もまた逮捕され初めた。十二月より翌一九二二年一月にかけて、政治犯人として投獄された者が、實に三萬人を超えた。

唯だ運動の總指揮者ガンデイのみには、政府も指を觸れんとしなかつた。印度民衆を左右し得る者はガンデイの外に無い。彼無くば事態は政府の收拾し得ぬ混亂に陥る。ガンデイ必死の指導なかりせば、彈壓は直ちに全土に互る暴動を招くであらう。飽く迄も非暴力を説くガンデイあればこそ、

運動は叛亂とならずに居る。政府は此事を知るが故にガンデイを檢束しなかつた。ガンデイは、夜となく晝となく民衆を指揮し、鼓舞し、激勵しつつ戦ひ續けた。然るに一九二二年二月に至り、ガンデイは突如、非協力運動の中止を聲明した。

此年二月四日、聯合州ゴラクプールに近きチャウリ・チャウラ村に於て、警察と民衆との間に衝突が起つた。それは警官が農民の集會を襲撃したのに對し、農民が之に反抗したので、警官は銃火を浴びせて彼等を死傷せしめ、彈藥盡くるや、逃げて警察署に立籠つたのを、激昂せる民衆が火を警察に放ち、猛火に驅られて逃出せる警官を殺して之を火中に投げ込んだ事件である。ガンデイは、最近の國民會議に於て、彼が最も適當と認むる時機に於て、非協力運動を開始し又は之を終結せしむる權能を賦與されて居た。チャウリ・チャウラ事件を耳にせるガンデイは、全印度の國民會議派に對して、即時、非協力運動を抛棄せよとの指令を發し、二月十一日、國民會議委員會は正式に該運動の中止を決議したのである。かくて非協力運動の第一期は終つた。

五 休 戰

ガンディの此の決意は、全英國並に全印度を驚倒せしめた。そは多數の國民運動者を憤激せしめた。猛烈なる抗議が四方からガンディに殺到した。獄中に於て之を聞知せるネール父子も、甚だしくガンディの處置を憤慨した。ネールは怒つた——「チャウリ・チャウラは、嘆かほしき事件であり、非暴力運動の精神と全然相容れぬものであるかも知れぬ。而も邊鄙なる田舎の激昂せる村民の失策が、自由獲得のための國民的鬭争を終止させるとは何事か。偶然の暴行が、必然、全運動を終止させるとすれば、非暴力抗争の哲學と戰術とは何等かの缺陷がある。抗争の途上に於て、斯かる暴行を絶無ならしむることは不可能である。吾等は抗争を開始する前に、まづ印度三億の民に、非暴力の理論と實際の訓練を與へねばならぬといふのか。若しそれが可能としても、政府側の反間苦肉の策により、吾等の敵が味方を装ひて暴行を敢てせぬと誰が保證するか」。さり乍ら如何に憤

慨してもネールは獄中に在りて如何なる活動も出来なかつた。彼のみならず殆ど總ての有力なる首脳部は皆な囹圄の中に在つた。民衆は九天の上より九地の底に落されたる如く感じた。人々の意氣は沮喪し、國民會議派に於けるガンディの人氣は衰へた。政府は此の機會に乘じ、三月十日遂にガンディを捕縛し、裁判の結果、之を禁錮六年の刑に處した。

さてネール父子は、共に禁錮六箇月の判決を受けて服役することとなつたが、ネールは三箇月後に釋放されて出獄した。彼は直ちにアーメダバードに赴きてガンディを訪はんとしたが、その到着以前にガンディは既に獄裡の人であつた。彼はアーメダバード裁判所で、ガンディの公判を傍聴した。假令其の政治的行藏について大なる不満を抱いて居たとは言へ、法廷に於けるガンディの態度及び其の陳述は、深甚なる感激をネールに與へた。やがて彼はアラハバードに歸つたが、運動は頓挫し、同志の多くは尙ほ獄裡に在つたので、ネールは大なる寂寥を感じた。唯だ不服従運動の中止に拘らず、外國製織物のポイコットだけは、尙ほ國民會議のプログラムの一つとして續行されて居たので、ネールは同志と共に嚴重にアラハバードの織物商を監視し、外國品の輸入又は販賣を阻止するに努めた。然るに官憲は脅迫罪の名の下に再び彼を檢舉し、一年九箇月の禁錮を宣告した。かくて彼は出獄後僅に六週間にして、またルックノー監獄に投ぜられた。

一九二三年一月三十一日、ルックノー監獄に服役中の總ての政治犯人が、思ひがけなく釋放された。それは州參事會の努力の結果であつた。ネールは新鮮なる空氣、廣潤なる天地、街頭の風物、友人との握手を喜んだが、國民會議の狀態を知るに及んで忽ち憂愁に襲はれた。非協力運動は中絶し、ガンデイは獄裡に在る。國民會議は一委員會を任命して、今後何を爲すべきかを考究させた。委員會は長き討議の後、一つの報告を提出したが、それは會議派首脳部に互に敵視する二つの黨派を對立させることになつた。即ち一は從來の如く非協力プログラムを續行せんとし、他は之を變更せんとするものである。直接行動の失敗の後には、常に合法的運動の主張が擡頭する。印度の場合に於ても、會議派首脳部の中に、立法議會を自由獲得の舞臺とすべしと主張する者を生じた。それは非協力プログラムの中より、參事會に協力せずとの一項を除き、固より政府と協力するために非ず、之と戰ふために、同志は進んで參事會に入るべしと主張した。所謂「非變更派」の反對に拘らず、此の「變更派」と呼ばれる團體は、遂に「自治黨」を組織して一九二三年の選舉に臨み、可なりの成功を収めた。而して自治黨の指導者は、實にネールの父モテイラールとC・R・ダースの兩人であつた。

ネールの父とダースとは、共に法律家であることを除けば、全く異なる性格の所有者であつた。ダースは法律家であり乍ら、詩人的情熱に燃え、自ら詩作し、雄辯家であり、宗教的であつた。ネールの父は、散文的であり實際家肌であり、宗教に無關心であり、不屈の闘士であつた。然るに彼等は、その對蹠的なる性格に拘らず、相識りてより幾くもなく意氣相投じ、やがて斷金の間柄となつた。彼等は互に他の缺點を補ひつつ、絶対に信賴提携して黨を指導せるが故に、自治黨は次第に勢力を加へて來た。それと共に多くの機會主義者・便乘主義者の入黨を見たが、潔癖なるネールの父は「吾黨は不健全なる四肢を切斷するに躊躇せず」と宣言し、その宣言通りに不純分子の艾除に努めた。

ダースは屢々ネールに向つて、熱心に入黨を勧めた。而もネールは、斯くの如き運動の畢竟無益なるを信じ、決してダースの勸告に應じなかつた。父もまた内心は切に其子の入黨を望んで居たが、ネールの性質を熟知せるが故に、敢て勸誘はしなかつた。自治黨は幾多の州參事會及び中央政府の立法議會に於てさへ、絶對多數を占むるに至り、議會に上程せらるる有らゆる政府の議案に反對し、大臣の俸給を含む毎年の豫算案までが、屢々否決された。然し乍らそれはネールが洞察せる如く、何等政治的に影響を及ぼし得なかつた。議會に於て否決された殆ど總ての法案は、州知事や總督によつて是認され裁可されたからである。

さてネールは、出獄後數週間ならずして、突如アラハバード市長に選舉された。彼は同時に國民會議聯合州委員會書記長並に全印度委員會書記長を兼ねたるため、その日常は多忙を極め、屢々一日十五時間も活動した。其間に彼は、ナバ藩王國に於けるスイク教徒の運動を視察するため、二人の同志と共に此國に赴いたが、不法にも直ちに官憲に捕へられた。ナバの裁判官は、全然無根の事實を捏造し、彼等三人を叛亂罪として、それぞれ二箇年及び二箇年半の刑を宣告した。流石に官憲は數箇月後に彼等を釋放したが、三人とも不潔極まるナバ監獄に於てチフス菌に侵され、出獄後幾くもなくして皆な發病し、就中ネールは一時重態に陥つたが、幸にして恢復した。

ネールの公平にして潔白なる性格は、次第に先輩並に同志の間に重きをなして來た。彼は市長の劇務を見る上に、一九二三年度・一九二四年度の全印度國民會議書記長の重任を負はされた。但し印度の政情は、彼の意圖する所と逆行した。一時融和せる印度教徒と回教徒との宗教的對立が、今や反動的に激烈となり、到る處に血腥き衝突を見た。自治黨員の或者は、高官の地位を以てする政府の誘惑に打負けて、獨立運動から脱離した。國民會議は何等の具體的方針もなく、無用の黨争を事とした。

是より先き一九二四年春、ガンディは獄中に盲腸炎を患ひ、病癒ゆるや無條件で釋放せられ、ポ

ムベイに近きジューフ海濱で靜養することとなつた。ネール父子は直ちにジューフに赴き、數週間滞在して存分に彼と意見を交換した。父はガンディを自治黨に誘致せんとしたが、ガンディは肯んじなかつた。ガンディはまたネールの抱ける數々の疑問に對しても、何等満足なる解決を與へなかつた。彼の意見は、國民會議の建設的又は社會的改革案を遂行して、辛抱強く國民に奉仕し乍ら、戦機の熟するを待てといふことであつた。ガンディは徹底せる平和か、然らずば徹底せる戦闘を期して居た。ネールは此の態度に不満であつた。單りネールのみならず、多くの知識階級がガンディに慚らず感じた。かくてガンディの聲望は、一時獨立運動者の間に落ちたが、一般民衆の彼に對する渴仰は、微塵だも揺がなかつた。

かかる間に一九三五年秋に至り、ネールの愛妻カマラが重病に罹り、數月の長きに亙りてルックノー病院に呻吟した。病癒えて退院するを得たが、醫師は保養のためにスイスに轉地すべしと奨めた。ネールは此の機會に於て自身の疲勞をも癒やし、且渦中より退いて印度の實情を把握したいと考へ、一九二六年三月、意を決して妻と共に西遊の途に上り、十三年目に再び歐羅巴の土を踏むこととなつた。彼等は居をジュネーヴに定めて靜養したが、其間ネールは獨伊に遊び、ブルネッセルに開かれし被壓迫民族會議に出席し、更にモスコウを訪ひて新しきロシアを視察した。彼は歐羅巴

及び亞米利加を通じて、政治的・經濟的・社會的改造の潮が、澎湃として漲りつつあるを見た。監獄と病床と、而して此度の洋行とが、彼に深き内省と政治的研究の時間と機會とを與へた。彼は、印度の眞個の敵は、資本主義發達の産物たるイギリス帝國主義に外ならぬこと、従つてそれは國民主義的立場よりのみならず、社會主義的立場よりも打倒せねばならぬことを確信するに至つた。イギリス帝國主義は、帝國の政治的要求に基礎を有すると同時に、資本家の利益保護に根ざして居る。それ故にイギリス帝國主義と戦ふものは、國民主義者であると同時に社會主義者でなければならぬ。彼は従前から農民及び労働者との接觸により、單純なる國民主義だけでは印度を救ひ得ないと考へて居たが、今や一層その社會主義的信念を強めて、一九二七年暮、約一年半の休養に、心身共に激刺たる元氣を恢復して歸國した。

印度では、ネールの留守中に、M・M・マラギヤ及びラージパト・ライを首領として、自治黨に對抗するため「國民黨」が新たに創立された。新黨は其の政見に於て、自治黨より遙かに穩和であり、右傾的であり、且純粹に印度教的であつた。思想に於てはグリーン、J・S・ミル、グラッドストーン、モーレーなどの第十九世紀末英國思想に傾倒し、感情に於ては古代印度文化を憧憬せる老いたる國粹主義者マラギヤが、自治黨に不満を抱くのは當然としても、ラージパト・ライが新黨に

加はれる理由は捕捉し難くある。いづれにもせよ、國民黨の成立以來、印度に於ける宗教的對立は一層拍車をかけられ、自治黨内の回教徒の或者は脱黨し、頑固なる印度教徒の或者は、去つて新黨に走つた。一九二六年に行はれたる立法議會並に州參事會員選舉に於て、國民黨は大なる成功を収めたが、それは結局議會の政治的雰圍氣を低調ならしめただけであつた。

ネールは一九二七年の國民會議が開かれる直前に印度に着いた。純眞なる印度青年は、憂鬱なる印度政界の空氣に、大なる不満を抱き初めて居た。彼等は國民會議の長老たちが、果して印度獨立のために最後まで惡戰苦闘を續ける覺悟ありや否やをさへ疑つて居た。一方英本國に於ては、一九一九年に實施せられしモンテーグ・チェルムスフォード改革の有効期間十箇年の満了以前に、その統治法の明文に従ひ、該統治法の實績を調査し、且可能なる改善に關する報告を作成せしむるため、サー・ジョン・サイモンを委員長として、七名の英人より成る委員會を任命し、之によつて印度に於ける輿論の鎮靜を圖らんとした。然るに印度に於ては、一人の印度人も委員に任命せられなかつたことに對して、大なる屈辱と憤懣とを感じた。印度人は、此の委員會に彼等の境遇に對する同情ある理解を期待し得ざるのみならず、印度が自治の能力ありや否やを、英人の一團によつて裁斷せらるることを侮辱と考へた。有らゆる黨派・宗派の指導者は、此の委員會を排撃せよと叫び出した。

穩健派さへも大勢に押されて、此の叫びに雷同した。

かかる空氣の間に、此年十二月、マドラスに國民會議が開かれた。ネールは旅の疲れを癒やす暇もなく、直ちにマドラスに急いだ。彼は國民會議が現在の如き状態に彷徨する限り、印度のために竟に爲すなきを痛感し、敢然として會議の指導者たちに向ひ、現實に直面して大膽に前進せよと迫り、印度の目指すところは「完全なる獨立」に外ならぬことを明かにせよと提案した。彼の熱誠は會議を動かした。國民會議は、滿場一致を以て彼の提案を可決し、その歴史ありて以來、初めて堂堂と印度の「完全なる獨立」を宣言した。其上この會議は、一切の場合に一切の形式を以て、サイモン委員會を排撃すべきことを決議し、且全黨協議會を召集して、彼等自身の手によつて印度憲法を起草すべきことを決議した。

かくて一九二八年二月、サイモン委員一行がボムベイに上陸して以來、彼等は到る處閉ぢたる窓と、翻へる黒旗と、葬式の如き行列と、「サイモン還れ！」「委員會を排撃せよ」とのスローガンを以て迎へられた。官憲は例によつて有らゆる方法を以てデモンストレーションを抑壓したので、諸處に大小の衝突が起つた。就中ラホールでは、ラージパト・ライがデモンストレーションの指揮者として街頭に立つて居た時、年若き一英人警察官が、棍棒を以て彼を殴打し、そのために此の老

いたる「パンジャブの獅子」は、數箇月の後に長逝するに至つた。而してルックノーに於ては、ネールもまた竹杖を以て亂打せられ、全身に數々の打撲傷を負つたが、幸にして皆な急處を外れて居た。

サイモン委員會排撃は見事に行はれたが、印度憲法の起草には幾多の波瀾があつた。マドラス會議の決議に従ひ、全黨協議會が召集せられ、ネールの父モテイラールを委員長とする起草委員會が組織されたが、イギリスは多年に亘つて印度に於ける諸勢力の統一融和を阻止するため、之を離間し抗争せしめて來たので、社會的・地方的・宗教的・政治的に離反せる諸階級に、等しく満足を與ふべき憲法の作成は、難事中の至難と言はねばならぬ。而も委員會は萬難を排して統一憲法を起草し、之をルックノーで開かれたる全黨協議會に提出した。それは委員長の名に因んで「ネール草案」と呼ばれるものである。然るに此の憲法は、印度を以てカナダ・濠洲と等しく、イギリス帝國內に於ける一自治領たらしむることを根本原則とせるものなりしを以て、會議内の急進派は猛烈に之に反對した。而して之を指導せる者は、實に委員長の愛子ジャワハルラール・ネール其人であり、飽く迄も英國支配よりの完全なる獨立を主張して譲らなかつた。彼は新に「印度獨立聯盟」を組織し、此の目的のために邁往することとなつた。

一九二八年度の國民會議はカルカッタで開かれ、ネールの父が議長となつた。彼は其の「ネール草案」を、此の會議に於て必ず通過せしめねばならぬと意氣込んで居た。彼は其子の反對を悲しんだ。従前も亦此後も、父子の間に屢々政治的意見の對立はあつたが、此時ほど激しい衝突は無かつた。此の草案が會議に提出された時、ネールは忌憚なき批判を加へて猛烈に反對した。而して穩健派と急進派との幾度かの交渉の末、會議は一應此の草案を通過せしむるも、若し英國政府が滿一箇年以内に之を承認せざる場合は、會議は之を廢棄して再び完全なる獨立を宣言するといふ妥協案によつて、父子の争ひを調停した。ネールは、英國政府が斷じて此の憲法を承認せぬだらうことを熟知せるが故に、異議なく之に應じた。

國民會議の一進一退の態度は、印度に於ける年少氣鋭の革命派を憤慨せしめた。彼等はガンデーの非暴力主義を以て、さなきだに臆病なる印度人をして、愈々卑怯ならしめるものとし、因循姑息なる會議派とは別個の路を歩み、獨立の行動を取り初めた。此の傾向は印度北部に於て極めて著しく、各地に於て英人官吏に對する襲撃が頻發するに至つた。デリーでは、印度立法議會の開會中に、柔弱なる議員等を覺醒せしめる目的を以て、一個の爆彈が議場内に投げられた。ラージバト・ライを毆打せる英人警官も、ラホールに於て射殺された。カルカッタ大學出身の一婦人は、その卒業式

に臨めるベンガル知事を射殺した。ベンガル州ミドナポールの二女學生は、該地方の英人長官を訪ひ、卓子の中にして會談中に之を射殺した。カルカッタでは警視總監が殺され、ボムベイ知事は狙撃され、印度總督を乗せてデリーに向つて進行中の列車が襲撃された。

勞働不安もまた一九二八年以來、急速に激化した。ボムベイでは紡績勞働者が、四月より十月まで、總員約十五萬人の總罷業を敢行し、五月にはタータ製鋼所に於て總罷業が行はれ、南印度鐵道三千の勞働者、東印度鐵道工場一萬の勞働者も、工場閉鎖に反抗して起つた。翌一九二九年には、ボムベイ紡績勞働者が、またもや五箇月に亘る總罷業を行ひ、カルカッタ黃麻勞働者十五萬も、また罷業するに至つた。印度勞働者は、一九二〇年以來「全印度勞働組合會議」を結成して居たが、一九二九年の第十六次大會に於ては、ネールを議長に推し、その階級的・革命的・政治的色彩を濃くした。但し勞働運動の是くの如き傾向を喜ばざる溫和派は、此時より會議を脱退し、別に純粹勞働組合主義に立脚する「勞働組合聯合會」を組織し、茲に印度勞働組合は、左右兩派に分裂するに至つた。

六 不服従運動

希望と焦躁と昂奮との間に、一九二九年も十二月となつた。而して全國民の異常なる期待の裡に、國民會議はネールを議長としてラホールに開かれることとなつた。ラホールに於て民衆がネールに與へたる歓迎は、彼自身の言葉を藉り來れば「量に於ても強度に於ても凄まじきもの」であつた。彼の宿舎は、群がる民衆に取巻かれ、彼は殆ど五分間毎に出でて彼等に挨拶せねばならなかつた。彼は民衆に愛せられ、知識階級に尊敬せられ、多くの歌が彼を讚美するために唱はれ、數々の傳説さへ作り上げられた。此の異常なる人氣は、彼を喜ばしめ、また反省させた——「何故に予は此の人氣を博したのか。學問のためではない。予は非常な學者でもないし、また學問は人氣の因にはならない。予の拂へる犠牲のためでもない。幾百幾千の印度人が、予よりも遙に大なる犠牲を拂つて居る。英雄としての予の人氣は全く質のものであり、予自身は決して自ら英雄と考へず、且英雄的

な態度や浪漫的な身振りは、予には馬鹿馬鹿しく見えてならない。また予の如く非浪漫的な人間もない。予は唯だ若干の肉體的並に精神的勇氣だけは有つて居る。而も此の勇氣の背景となるものは、



ラホール國民會議に於けるネール

恐らく個人的・團體的・國民的の自尊心、及び強制を厭ふ性情である。……予が上流階級に生れ華美なる生活を營んで居たのを、後に之を捨て去つたといふことが、人氣の一因でもあらう。斯様な

五欲遠離は、印度人の心に常に訴へるからである。果して然りとすれば、予は聊かも快くない。予は消極的の道徳を喜ばず、積極的の道徳を重んずる。遠離も犠牲も、それが自身のためであるならば、予は毫も之を重んじない。予は唯だ精神的訓練として其の價値を認める。予は禁欲生活、五欲の極端なる斷滅に心惹かれぬ」。

彼自身が是くの如き冷靜なる理智的性格なりし上に、彼は勝れたる家族並に友人を有つて居たので、決して人氣に酔ひて自負矜高に陥ることなかつた。彼は斯く語る——「予が人氣者となりしこと、美辭麗句の限りを盡せる讚辭を浴びせられしことが、予の家族及び親友の團欒に於ける揶揄の的となつた。予の妻や姉妹は、國民運動の諸先輩に與へられし様々の仰々しい讚辭や稱號を探し集めて、面白半分に觸れまはした。彼等は予にからかつて「印度の寶玉よ」だの、又は「犠牲の神様よ」などと呼びかけた。そして此の冗談が予の心を和らげ、公會に於ける予の嚴肅なる氣分の緊張を緩めてくれた。予の小さい娘までが此のいたづらに加はつた。唯だ予の母だけは、飽くまでも予を眞面目に遇し、大切の息子に對する揶揄を喜ばなかつた。予の父は面白さうに眺めて居た。彼は靜に其の深き同情と理解とを示した」。

閑話休題、ネールを議長とせるラホール會議は、永久に記憶せらるべき會議であつた。印度の完全なる獨立が、未曾有の熱誠裡に、殆ど満場一致を以て更めて可決された。此の決議は、前年度のカルカッタ會議の憲法に對するイギリス側の應答を、最後の瞬間まで待つて居た會議が、一九二九年十二月三十一日夜半を以て其の猶豫期間が満了すると同時に可決せるものである。獨立が決議されると、ネール議長は、萬雷の如き「母國萬歲 Bande Mataram!」の歡呼の裡に、印度國旗を掲揚した。獨立の覺悟は新にせられ、獨立のための偉大なる戰の準備が開始されることとなつた。而して之に關する計畫を樹立し、鬭争を實行する權能は、全印度國民會議委員會に與へられた。

かくてラホール會議は、絶大なる昂奮裡に閉ぢられ、その決議は深甚なる感激を全國に與へた。但し人々は如何にして戰ふべきかに就いて、何等確然たる方針を有たなかつた。ネール自身が斯く述べて居る「吾等は將來の見透しがつかなかつた。會議中に示されたる熱心に拘らず、實行計畫に對する國民の反應については、何人も豫測し得なかつた。吾等は既に舟を焼き棄てたから、再び回することは出来ぬ。而も吾等の上陸せるは、殆ど未知なる、地圖にもなき國土であつた。唯だ吾等は、吾等の戰爭の出發點たらしめ、且國內の空氣を打診するため、一九三〇年一月二十六日を以て「獨立節」と定め、全國に互りて國旗を掲揚し、獨立宣言書を朗讀することとした」。

かかる間に獨立節が來た。一切の杞憂は拂拭された。全國民は熱烈に、而も肅然として此日を祝

福した。將に來らんとする鬭争に對する覺悟は、極めて堅確なるを示した。豫てより人々はガンデ
 イの命令を待ち焦れて居たが、此時まで彼は如何なる具體的方針をも示さなかつた。今や彼は名醫
 の適確を以て國民の決意を診斷し、實行の機正に熟せりと看取した。一九三〇年二月初旬、國民會
 議執行委員は、ガンデイに獨裁者としての全權を賦與し、其の適切と認むる時と處とに於て、所謂
 平和的不服從運動を號令する權能を授けた。ガンデイは、三月十二日を以て鬭争開始の日と定めた。
 人々は如何なる形式の不服從運動が、最も時局に適切であり、最も民心を捉へ、從つて最も効果的
 なるかに思ひ惑つた。何人も適確なる方策を有たなかつた。其時にガンデイは、鹽專賣法の蹂躪を
 以て鬭争を開始すべしと聲明した。人々は初めて之を耳にせる時、いつも乍らのガンデイの奇想天
 外に驚き、或は惑ひ、或は嘲つた。而もガンデイが鹽專賣法の眞實の意義、及び此の日常生活の必
 需品に對して如何に法外なる重税が課せられて居るかといふ事實を闡明せる時、國民は上下を擧げ
 て昂奮した。彼等はイギリスの法律のうち、最も不道德なる鹽專賣法を蹂躪するために、奮然とし
 て起ち上つた。

いよいよ平和的不服從運動開始の日が來た。三月十二日拂曉、ガンデイはアーメダバードのサバ
 ルマテイにある眞理護持道場で、存分に訓練を與へたる同志七十九名を率ゐ、勝利を得ずば再び道

場に歸らずと宣言し、名高き「海への行進」を開始した。彼は途上の村々に足を停めて人々を鼓舞
 激勵した。行進の報道が急速なる勢を以て傳はるや、四方より集まれる民衆は、堵の如く沿道に立
 ち列んだ。かくて三週間の行進の後、一九三〇年四月六日、一行は目的地たるキャムベル灣頭のダ
 ンデイに到着し、海に入りて齋戒沐浴せる後、海水を蒸發せしめて製鹽を行ひ、明らかに政府の
 鹽專賣法を蹂躪した。

ネール父子は、行進中のガンデイをジャムプサルに訪うた。彼等は民衆の比類なき熱情と、燎原
 の火の如く擴まり行く運動の勢ひとを見て、此の戰術が初めガンデイによつて提唱せられし時、そ
 の成否に疑問を抱きしことを恥ぢ、令更ながらガンデイの民衆の急處を掴む偉力、之を組織的行動
 に導く才幹に驚嘆した。而して數時間の會談の後、「手に杖を携へ、同志の先登に立ち、確乎たる
 足取りで、平和にして而も物を畏れぬ顔」で、次の村へと進み行くガンデイの姿を見送り、アラハ
 バードに歸りて運動の指導に當つた。

官憲の彈壓が直ちに始まつた。四月九日にはガンデイの息二人が先づ逮捕せられ、十四日にはネ
 ールが鹽專賣法違反の廉で、カルカッタ市長セン・グプタは煽動の廉で逮捕せられ、次で五月五日
 にはガンデイ自身がグジラートのカラデイで逮捕せられた。

ネールは、逮捕の即日、裁判に附せられ、直ちに禁錮六箇月の判決を受け、ナイニ監獄に投ぜられた。然るに二箇月半を経たる六月三十日の拂曉、實に思ひがけなくも彼の父モテイラールが、サイド・マフムードと共に入獄して來た。それは印度政府が國民會議執行委員會を非合法と宣言し、同時に委員等を捕縛せるためであつた。當時モテイラールは、甚だしく健康を害して居たので、獄中の生活は彼に取りて苦痛であつた。雨季は將に始まりかけて居たし、屋根からは雨漏りして、房内ははじめして居た。それでもモテイラールは、其の愛子と同一舎内に起臥して、其の眞心からの介抱を受けることを幸福に感じた。

越えて七月二十七日、サー・テージ・バハドゥル・サプルとジャカルとが、是亦思ひがけなくナイニ監獄にネール父子を訪うた。此の兩人は、親英派の旗頭として、革命的なる印度青年の最も惡むところとなつて居た。彼等は、印度政府と國民會議の間に立ち、一定の條件の下に不服従運動を止めさせ度いと考へ、印度總督の意を受けて、ネール父子を訪問したのである。彼等は二日に亙りて協議を遂げたが、ネール父子は、是くの如き重大なる問題は、同志殊にガンディとの相談なしには決して決定せらるべきものでないと主張したので、兩人は一旦引上げた。

八月八日に至り、兩人は再びナイニ監獄に現れ、印度總督はネール父子とガンディとの會見を許

可したので、其意ありや否やを尋ねた。ネール父子は、固より異存なき旨を答へた。時にガンディは、プーナのセラヴダ監獄に於て服役中なりしを以て、ネール父子は八月十日、特別列車に乗りてナイニからプーナに赴き、十三日より十五日まで、三日に亙りてセラヴダ監獄の一室に協議を凝らした。その結果、不服従運動撤回のための最小限度の條件を決定し、之を文書に認めて兩氏に手交した。但し印度總督は、此の提案に應じなかつたので、兩氏の骨折は水泡に歸した。

此の協議に於ける緊張がモテイラールの病軀にこたへ、十六日には高熱を發したので、父子は十九日までセラヴダ監獄に靜養し、然る後に再び特別列車でナイニ監獄に送還された。此の往復は秘密に附せられたるに拘らず、何處よりもなく聞き知れる民衆は、雲霞の如く停車場に集まり、時として線路の上まで埋め、危く事故を生ぜんとした程であつた。ナイニ監獄に歸りて後、父の病勢は益々悪化し、痛くネールの心を悩ましたが、九月八日に幸にも釋放された。而して十月十一日には、ネール自身も六箇月の刑期を了へて出獄した。

時に彼の父はムスリーに轉地療養中であり、妻カマラのみがアラハバードに留まりて國民會議の仕事に没頭して居た。彼は其妻及び諸同志の言により、アラハバードに於ける當面の問題は、租税不納運動を開始すべきや否やに在ることを知つた。恰も地代及び租税納入期が近づいて居たが、

世界的不景氣の影響は印度に於ても著しく、農産物の価格は暴落し、小作人も地主も等しく其の負擔に堪ふべくも無かつた。ネールは政治的並に經濟的條件が、該運動を開始するに最も有利なるを見、直ちに國民會議州委員會を召集し、長時間の討議の後、その實行に同意せしめ、且アラハバード市に民衆大會を開きて熱烈なる演説を試みた。越えて十三日、彼は妻と共にムッスリーに老父を訪ひ、樂しき三日を過ごした。父の健康が次第に恢復しつつありしことが、甚だ彼を喜ばせた。十九日にはアラハバードに農民大會を開催する豫定であつたので、夫妻は老父に別れを告げて十八日夜に歸宅した。然るに十九日早朝、彼が十一日に試みたる演説の故を以て、再び逮捕せられ、出獄僅に八日にして、またもやナイニ監獄に投ぜられた。而して翌一九三一年一月一日には、彼の妻カマラもまた逮捕された。此時カマラは一新聞記者よりメツセージを求められ、次の如く語つた——「妾は夫の踏める路を辿ることを、限りなく欣び且誇りとします。妾は印度國民が飽くまで旗を掲げ続けることを望みます」。

一九三〇年より一九三一年に亙る印度の平和的不服従運動は、世界の歴史に於て全く類例なき革命運動であつた。ガンディに於て鹽專賣法蹂躪による戰鬪開始の炬火が、一たびガンディによつて

上げらるるや、未だ數週間ならざるに、不服従の精神が印度の津々浦々に燃え立つた。人々は鹽專賣法のみならず、彼等が悪法と認めし一切の法律を蹂躪し初めた。彼等は森林法を無視して官林を伐採し、治安維持法を無視して革命的文書を公けの場處で朗讀した。イギリス製品及び外國製織物のボイコットは徹底して行はれ、一九三〇年五月の英國海外貿易は、前年度の同月に比して實に二千二百八十萬ポンドの激減を示し、ランカシャ及びマンチエスターを破滅に瀕せしめた。外國製の酒類や藥品の店舖に對しても、同様にボイコットが強行された。

運動の進行に連れて、官憲の彈壓は峻烈となつた。彼等は武装せざる民衆に對して、容赦なく機關銃や装甲車を濫用した。而も民衆は堅くガンディの命令を守り、官憲が敢てせる言語道斷の暴虐に對して、無抵抗の態度を堅持した。U・P通信社の記者ウェップ・ミラーは、實に下の如く述べて居る——「予は二十二箇國、十有八年に亙る通信員生活の間に、無數の騷擾・暴動・市街戰・叛亂などを目撃したが、未だ曾てダラサナ事件の如き悲愴なる光景に接したことが無い。歐米人は、暴力によつて報いらるる暴力を理解し得るけれど、冷然として、而も敢然として進み出で、何等防衛も試みず毆たる儘に委す人々を見て、驚くの外なかつた。その光景は餘りにも悲慘を極め、予は屢々顔を背けざるを得なかつた。一の驚異すべき特徴は、運動參加者の紀律である。彼等の精神